536-392
1200501500273
536
392

博施濟衆

昭和戊辰九月
八十九翁青淵 書

K228-10

帝國圖書館藏

澁澤榮一著

處世の大道

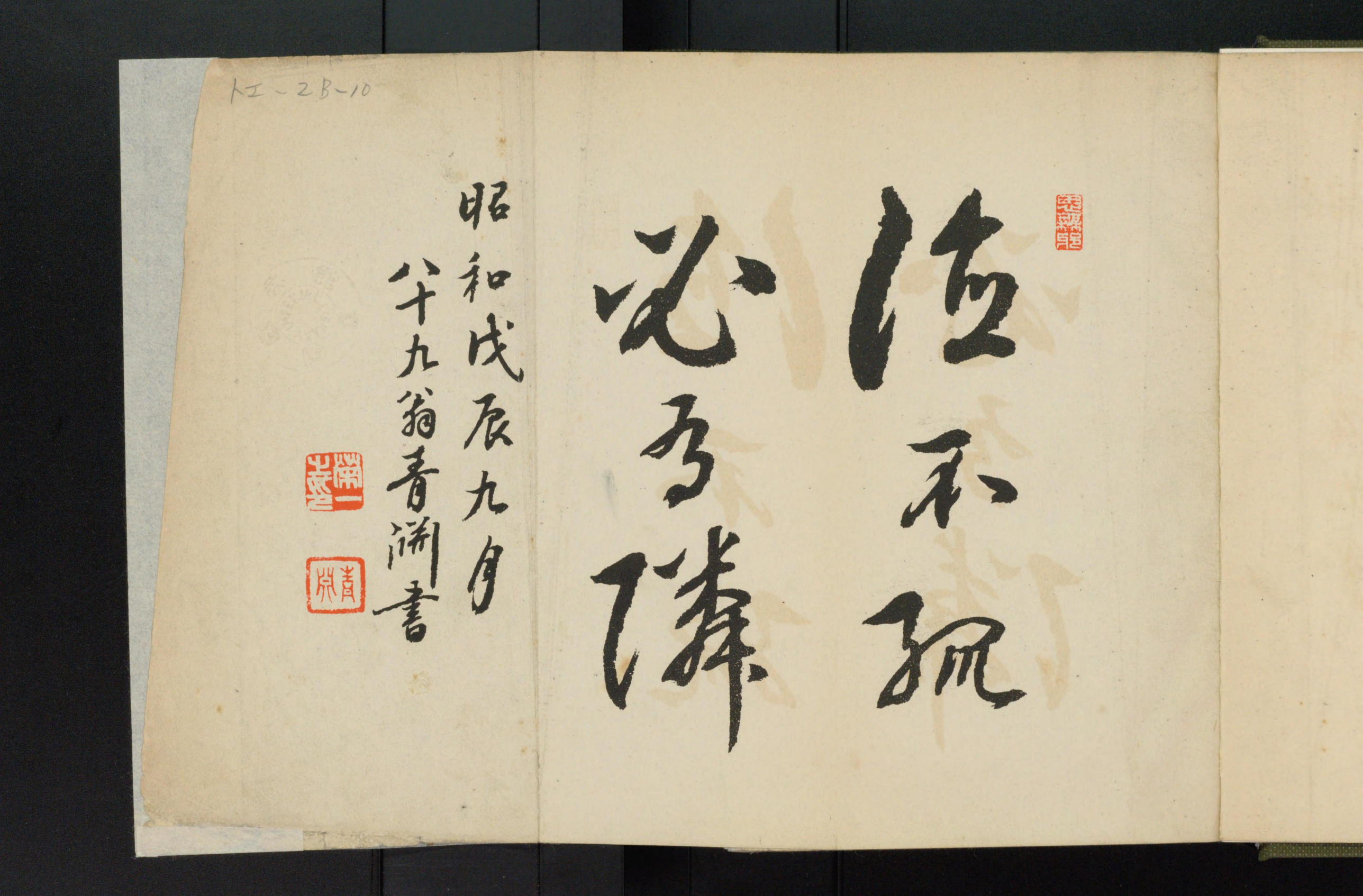
實業之世界社藏版

昭和三・一〇・一六 帝國圖書館

ト工-2B-10

昭和戊辰九月
八十九翁青淵書

ト工－2B－10



信不孤
必有隣

昭和戊辰九月
八十九翁青淵書

536-392

はしがき

本書は、大正四年六月から大正十一年九月まで約八年間に亘つて、子爵澁澤榮一閣下が大多忙の中から特に時間を割かれて、毎月二回若しくは一回づゝ物語られた直話の筆記を子爵自ら訂正され、それを纏めて一冊としたものである。子爵は人も知る如く論語の熱心なる愛讀者、孔子の崇拜者で、明治六年退官の際に今後は論語の訓へを基として實業界に立たんと明言され、爾來六十年の行動は全くその範を出ないのである。

世には所謂論語讀みの論語知らずの多い中に、而も實業界と云ふ小面倒な緇銖の利を爭ふ社會にあつて、子爵が論語の實踐躬行者であり得たことは、たゞ〳〵敬服の外はない。

故に本書は論語によつて行動された子爵の實驗處世談であり、又實に處世の大道を示されたものであると同時に、一面に於ては、子爵自身の言行錄とも云ひ得るのである。

又、子爵は自身の行動と共に、明治大正より遡つて維新前迄の自身の接した諸方面の人々の性格行動をも、論語によつて忌憚なく批評せられてゐるから、讀者は自己の修養に資する所あると共に、當年の歴史をも併せ知るべく、其間には面白い逸話も甚だ多く、此點に於て本書は、世上に流布せらるゝ無味乾燥な談義とは全くその類を異にして居る。

また本書は、實に論語より觀たる明治大正の社會史、政治史、思想史と云ふも憚らず、されば、子爵一代の事業として、本書こそ永久に記念さる可きものであると云はねばならぬ。

今や社會の思潮混沌として人心の歸趨に迷ふ時、本書の刊行あるは、正に思想界に於ける好個の清涼劑であり、羅針盤でなければならぬ。此意味に於て、學校、諸官衙、圖書館銀行、會社、商店等を初め、一般家庭の讀物としても上乘の物であると確信する。

元來、本書は大正十二年に發行したものである。然るに大震災のため紙型を燒失し、爾來絶版の姿であつたのであるが、十月一日子爵米壽の祝賀會の催される機會に、子爵をし

て今日あらしめたる處世の根柢を表現された本書の版を新にする事の有意義なるを感じ、舊版の「實驗論語處世談」の書名を「處世の大道」と變更したのである。然らば何故變更したかと云へば「實驗論語處世談」では題名稍々かたきに失し、多くの人は讀まざるに先だちて內容をも固くるしいものと憶測する懼れあり、且、舊版は菊版で、定價も六圓八十錢と云ふ高價なものである故、讀者を博く需むる意味に於て、標題を「處世の大道」と改むると共に四六版に縮刷し、定價も半額以下の三圓とした次第である。

要するに本書は、現下の日本に於ては廣く讀まるべき價値ある一代の名著であらう。日本全國一家一冊、盡く本書を備へつけられんことを希望する。

昭和三年九月五日

編者　野依秀一

目次

◎論語主義を奉ずる所以……（一）
論語に親むに至れる因緣――何故論語を選める耶――論語を實踐躬行す――論語主義は明治六年より――維新前の商工業者――孔子教は宗教なりや――論語に九ヶ所の天――孔子は如何なる人か――其志や察するに餘りあり――澁澤にも孔子の志あり――圓滿なる孔夫子

◎孔子の教訓と今の賢者の處世振り……（一六）
學而第一の冒頭――世間に知られざるを憂へず――青年子弟の感果して如何――今の賢者の處世振りを悲む――論語は悉く實踐躬行の教訓

◎論語を躬行するに至れる徑路……（二四）
京都に出でゝ思想一變す――平岡圓四郎に招かる――遂に一橋家の家臣となる――一橋慶喜の將軍職に反對す――豪族政治を夢む――靜岡に商法會所を起す――大隈重信の八百萬の神論

◎孝弟は仁を爲すの本なり……（三九）
孝弟と三省との功德――禮と位とは如何なるものぞ――學者に對し刺戟となる――今日に行はれ

ぬ教訓あり――仁とは何ぞや――商工業に於ける仁の道――巧言令色と直言との利益――三省と記憶力の増進――記憶強健なる所以――行つて餘力あらば文を修めよ――家庭圓滿の本は無邪氣

◎不惑と天命とに對する感懷……（五四）

七十歳にして漸く不惑――二十四にして立ちしに非ず――天命を知らぬも一貫の精神――德川民部大輔の爲に二萬圓――勝海舟とは同腹に非ず――勝に小僧扱ひにせらる――函館投軍を勸めらる――頼山陽に感動す――貞女の心事――大久保利通に嫁はる――大久保に反抗す――大久保怫然色をなす――薩人の暴戾に憤る

◎孝に對する見解と接客の心得……（七〇）

孝は子に强ふべからず――父晩香の孝道論――子に對する考――客に接する二樣の見地――虚僞欺瞞の接客法――澁澤は門戸開放主義

◎孔子の人物觀察法……（七七）

人物觀察法にも種々あり――孔子の人物觀察法――祖先崇拜は溫故知新――大藏省改正掛の事業――租税現金納入制度の發案――器ならざりし大久保利通――幕政廢止の意なかりし大西郷――大西郷は賢愚に超越せり――文雅な木戸孝允と器に近き勝海舟――人を見るに細心なれ――意外の失策をする人

◎知らざるを知らずとするは最善の處世法……（九二）

理論と實驗との併行――知らざるを知らずとせよ――大西郷は僞らぬ人――大西郷と豚鍋を圍む――御議事の間の會議――大西郷曰く戰爭が足らぬ――大西郷の一言意味深長――大西郷の來訪――二宮尊德の興國安民法――大西郷理に責められて窮す――時には返答に困る事がある――井上と大隈にも苦めらる――默して答へぬ返答

◎善の極意は自然に一致するに在り……（一〇八）

孔子を嘲弄せる質問――大隈の居据り内閣――政治家に通有の惡弊――濟生會創立當時の桂太郎――痛快なる孔子の答辯振り――施さざるの慈善あり――近江の孝子と信濃の孝子――孝子らしからぬ孝子――孝子母を勞して厭はず――善の極意は自然に一致の事――養育院の事業に盡す所以

◎信と義と無くんば國も人も共に亡ぶ……（一三一）

民に信無くんば其國亡ぶ――信は親より進化せるもの――武士道は義によつて立つ――文天祥の衣帶銘――高杉晉作と阪本龍馬――櫻田事變の有村治左衛門――水戸烈公は偏狹の人――東湖の遺子藤田小四郎――太田道灌の辭世――不義を見て爲さざるの勇――死を決して大鹽平八郎を諫む――大典參列の光榮と渡米――渡米の精神論語に發す

◎禮は仁義忠信の仕上げなり……（一三八）
禮は他無し社會の秩序——孔子の答辯は王手を狙ふ——禮の要は精神にあり——大閤秀吉の長所と短所——秀吉の一生は勉强のみ——中國より二週間にて山崎——秀吉は機略に長じ經略に疎し——晩年の振はざりし秀吉——倫常を無視せる女色——蒲生氏鄕の妻と秀吉の母——晩年の振はざる所以——何事にも根柢が第一——禮は仁義忠信の仕上げ

◎形式の整備よりも精神が根本なり……（一五三）
寛永寺を菩提所とす——父は見識のあつた人——國事に奔走するを許す——父は終生鄕里にて暮らす——鄕里にある父の死——鄕里にある澁澤家

◎正々堂々の爭ひは排すべきに非ず……（一六二）
爭ふが是か爭ふが非か——處世上に於ける爭ひの利害——先輩にも二種類あり——保護が保護にならず——益を與へし從兄——克己復禮は爭ひにあり——澁澤も爭ふ事あり——大藏省總務局の椿事——爭はぬ青年は卑屈となる——時期を待つ要あり——官尊民卑の弊止まず——江藤新平と黑田淸隆——木戸孝允と大久保利通——伊藤博文の爭ひ振り——伊藤の議論振り——大隈重信の其の書

◎天命は天の知らざる所……（一八三）

衛の權臣賄賂を誘ふ——天とは果して何ぞや——罪を天に獲るとは何ぞ——天は靈的動物に非ず

◎哀樂の中庸を得る心掛け……（一八九）
人は兎角極端に走る——澁澤には到らぬ所あり——節度ある人は殘酷陰險——德川慶喜公は卽ち其人耶——泣けて頭が上らなかつた

◎無意識の過失と有意識の過失……（一九七）
孔子は何事にも淡然——人の過失に二種類あり——悲觀的の人は殘酷——井上馨と大隈重信との別——澁澤の人と事とに對する態度——人は他人に害を與ふる意無し

◎公平敦厚の心事を以て人に對せよ……（二〇六）
孔子は二枚舌の人か——公平なる孔子の人物評——孔子は管仲を責めず——孔子の道德は國家的——慶喜公は公平の御性——靜岡藩勘定組頭の辭令——慶喜公より勞はらる

◎孔子敎と國體論……（二一七）
日本と支那とは國體が違ふ——孟子は極端なる革命論者——大槻磐溪の意見

◎仁德を心の安住地とせよ……（二二二）

里仁の意義は何ぞ——郷里を仁風に化せよ——故郷血洗島の純朴——小學教育に出金す——新知識は科學的知識——古俗を保存せよ——鎭守諏訪神社の新築——拜殿は結婚式場

◎富貴は正道を踏んで獲得せよ……（三三五）

宋儒の曲解も亦甚し——文王の政にも金錢の必要——三井家今日の由來——萬國日曜學校大會——孔耶兩教の相違點

◎算盤の基礎を論語の上に置け……（二四二）

何故の道德算盤違背——鎌倉時代より德川時代——德川家康と朱子學——德川時代の儒學——算盤の基礎を論語に——古稀祝賀の書畫帖——三島中洲の論語算盤說——西原龜三著書への序文——惡錢も時には身につく——相場で儲けた金錢——商賣は商戰に非ず

◎仁愛に過まるとも殘忍に過まる勿れ……（二六一）

過失によつて人を知れ——西鄕隆盛、江藤新平、大久保利通——三條實美は外柔內剛の質——岩倉具視は智略に富める人——三條は定見なき人

◎忠恕の精神を行ふには智略を要す……（二七〇）

暴擧を慫慂せるにあらず——道理に照らして行へ——自信は安心立命の基——曾子の偉大なる人

格——孔子の忠恕と耶蘇の愛——智略も必要なり——恩威は金錢と拳固

◎事業は利に喩らずして義に喩れ……（二八三）

目前の利害問題——鐵道債券は一枚も買はず——事業を義に喩る

◎三年ならずして父の道を改むるも亦孝……（二八七）

父の道を改めぬ意——父の家業は藍玉販賣——父の死後家業に就て惑ふ——藍屋を廢業せしむ

◎行に敏なると共に言にも敏なれ……（二九四）

不言實行の大西鄕——山縣有朋、大隈重信、伊藤博文、井上馨——中江藤樹と二宮尊德——絕交するの必要無し

◎仁と佞とは似て非なり……（三〇二）

仁は英雄豪傑の事——大きな仁と小さな仁——五代友厚は仁か佞か——木戸孝允の人物鑑識眼——退官建白書

◎天眞爛熳の人には輕忽の失多し……（三三）

子路は天眞爛熳の人——面白いが愼重を缺く——子路の如き人物あり

◎一を聞いて十を知る人は殃を招き易し……（三三七）
一を聞いて十を知る人は稀れ——平岡圓四郎と藤田小四郎——陸奥宗光に丈夫の志無し——言行の不一致を責む——初めは言により人を信ず——大事業を爲す人の鑑識——井上馨の人物鑑別眼

◎慾あれば剛ならず……（三三七）
無慾の者は勇氣あり——强慾の者は誘はる——人をして非義を己れに加へしめざるは眞の仁者——性と天とを知るは至難——大隈重信は聞かぬ人——囚はれざりし西郷從道

◎下問を恥づる者は鴻業を成し難し……（三四八）
孔文子の美點——伊藤博文は自慢の人——伊藤の碁と文章——下問を恥ぢて向上する者あり——德川家康と天海僧正——家康と金地院崇傳

◎恭敬は安全第一の道……（三五八）
近來の青年は粗暴——澁澤は幼少より丁寧——恭敬なれば過失なし

◎敬を失はざれば交情永く渝らず……（三六四）
大隈重信とは明治二年以來の交際——佐々木勇之助を敬す——佐々木の出身

◎己れを清くするも未だ仁を得ず……（三六九）
日本氣質と支那氣質——太田蜀山人は狷介の人——山鹿素行は政治家——安心立命のあつた素行

◎決斷の遲速と其の場合……（三七七）
三思するも尙足らざることあり——太閤秀吉と柴田勝家——秀吉の對家康策——人に重んずべきは晩年——水戸光圀の決斷——德川慶喜の決斷も明快

◎安心立命を得ざれば愚を守り難し……（三九〇）
日本人は愚と成り難し

◎舊惡を忘れて舊恩を思へ……（三九三）
舊惡を忘るれば人に怨まれず——廿五兩を貸した猪飼正爲——德川慶喜公傳の編纂も謝恩の爲め——編纂所を兜町に置く——編纂所組織の大要

◎交るに怨を匿さず節するに禮を以てせよ……（四〇五）
怨を匿して交るは卑劣——世の中は意の如くならず——三人三段の精神狀態——澁澤喜作との關

係――喜作幕府の祐筆となる――喜作彰義隊を組織す
◎相場は景氣の賣買……（四一五）
喜作陸軍樞倉に入る――喜作洋行して小野組に入る――喜作相場で再失敗す――十二年間一萬圓づゝ出金――結局自己にも利益となる
◎大山巖の美德……（四二四）
懷かるゝ人の美德――龜の甲より年の功――三千年の昔も今も同じ――國際道德の退歩甚し
◎王道は國際法なり……（四三四）
武裝平和は野蠻的――三條實美は自ら訟めし人――向上心が發達の動機――學問した人の長所
◎論語の新研究法……（四四一）
論語年譜を贈らる――文學博士林泰輔――諸侯春秋を畏る――井上馨は怒を遷す人
◎人の性質は變らぬ……（四四九）
平岡準藏は怒を遷さぬ人――歩兵頭俗事掛となる――四人の勇士と先を爭ふ――留學費の精算表調製――善にも習慣がつく――人の性情は一生變らぬ

◎菅原道眞と藤原時平……（四六〇）
大亦興治は非凡の天才――二十二歳で銀行支配人――貧を勸めしに非ず――富貴に淫せぬ心懸け――菅原道眞は情の人
◎維新前後の儒者……（四七一）
道を行ふ力の大小――辯口の達者な當世人――行ひには志が大事――君子儒と小人儒との別――藤森弘庵と鹽谷宕陰――三島中洲との關係――新井白石は君子儒
◎人物採用に就ての心得……（四八五）
人を用ひる三方法――石田三成の出身と末路――才を重んずるの得失
◎岩崎彌太郎と古河市兵衛……（四九〇）
岩崎彌太郎は專制邁進の人――岩崎家と懇意になる――古河市兵衛の人物
◎眞の事業家の進む可き途……（四九七）
損勘定に精細の人――金貨の引換に苦む――銀行廢業の議起る――大日本人造肥料會社の發起――第一回の發賣に失敗――友人等に危まる

◎高峰讓吉と理化學研究所……（五一〇）
高峰讓吉は溫厚の人——理化學研究所設立の動機——英雄的人物の好俟癖——紳士の條件は文質彬々

◎道を樂む者は苦痛を忘る……（五一八）
樂めば苦痛を忘る——社會事業を樂む癖——米澤大火の寄附金——由らしむべしの眞意——德川慶喜恭順の態度——澁澤は思ふ丈けを言ふ

◎動靜を兼ねて山水を樂め……（五二八）
山水を樂みとせず——樂みは山水よりも慈善事業——松平樂翁は道德經濟一致の人——樂翁と賴山陽の日本外史——大きな天然石の額

◎謙讓の德と不動の信念……（五三九）
幕府の倒れるは當然——芭蕉の句に似た語——論語に日本人の記事——二名の暴漢に襲はる——原因は水道鐵管事件——東京市水道との關係——刺客に金錢を贈る

◎禮を知れる英雄豪傑……（五五四）

君子を欺くは容易の事——論語を以て澁澤を欺く人——江藤新平の亡びし所以——上杉謙信、武田信玄、伊達正宗

◎德川家康と孔子教……（五六三）
大學中庸論語の比較——中庸の德は千變萬化——德川家康の對儒教觀——儒教と封建制度の關係——政治は實に至難のもの——仁者は他人を引立てる——市原盛宏の人物——近頃の人では山下龜三郎

◎常識萬能は人間を輕薄にす……（五七六）
孔子の說は奇ならず——孔子は謙遜のみの人に非ず

◎成功者は老獪と目せらる……（五八一）
戰國になるのは當然——英雄と國家觀念——德川家康征夷大將軍となる——家康は老獪に非ず

◎物識顏する人と我意を固執する人……（五八九）
一知半解を持ち廻す——大學の說き方面白し——孔子の失言取消——無理を言ひ張る人あり

◎道德的修養の價値……（五九七）

空米相場の許否論——玉乃世履遂に延取引に賛す——太閤秀吉には道德上の修養なし——德川家康の道德的修養

◎孔子の政治的手腕……（六〇六）

孔子の意政治にあり——孔子の政治的手腕——夢中に詩を作る

◎完全なる人物とは何か……（六一一）

人間の履む可き道を知れ——伊藤博文も政治に囚はる——西園寺公望は餘裕ばかり——太閤秀吉は藝に遊び過ぎた——三遊亭圓朝の落語革新

◎九代目市川團十郎論……（六二一）

藝人の氣風を一變す——九代目市川團十郎を作れる家系——九代目は座を締めた——演出法を一變せる見識——石川雅望と七代目團十郎

◎孔子は啓發教育の元祖……（六三一）

孔子は非注入教育——支那人の妙な性質——性理學と考證學と

◎近藤勇と淺野總一郎……（六三八）

無謀の勇は愚なり——新撰組の近藤勇——新撰組の勢力ありし所以——淺野總一郎の人物——維新時代の元勳は如何

◎寡慾なりし維新の元勳……（六四八）

維新元勳の根本精神——富者は何故富を求むる乎——農工商を賤むの風習は斷じて孔子教の罪に非ず

◎神佛と戰と疾とに對する信念……（六五五）

澁澤の神信心は漠然——松平樂翁の信仰——樂翁の宇下人言——癌と肺炎とで瀕死——中耳炎、膓加多兒、肺炎

◎兄弟和合の秘訣……（六六五）

骨肉相爭ふを戒む——間接に話せば圓滑——頼山陽の頓智即妙——西郷隆盛と弟の從道——大川平三郎兄弟と佐々木勇之助一家——澁澤元治と其經歷——元治と弟治太郎との仲

◎詩は情の發動を善導す……（六八〇）

詩經に顯はるゝ情趣——春雲樓遺稿の序文——長恨歌と露國の皇室——僅に絶句だけ作る——山陽詩鈔を愛誦す

◎政治の根本精神……（六九〇）
政治の根本義は不動——澁澤もタゴールも同じ——少時の思想過らず——書經は永久の眞理
◎辣腕家多き支那の女……（六九八）
靈公の夫人南子と西太后——高祖の呂后と高宗の武后——粗衣疏食奬勵に非ず
◎老子と禪學と耶蘇教……（七〇四）
禪學や老子は好まず——碧巖錄よりも聖書——君子は憂へず懼れず——今でも深夜二時に眠る——
—阪谷芳郎夫人の記憶力
◎流行の神樣……（七一五）
怪力亂神は中庸の外——武士は力自慢をせず——昨今神の現はるゝ所以
◎靜なれば壽長し……（七二五）
廻り遠い話をする人——米屋の總會で演說す——唐子西の古硯銘に就て——仲小路農相の米價調節策——多少の干涉は必要なり
◎省みて疚しからざる生活……（七三四）

壬生浪人に襲はる——井伊直弼は人當りが惡い——大久保利通遭害當時の回顧——大久保利通、岩倉具視、勝安房
◎矢野二郎の人物……（七四五）
平凡ゆえ理解せられず——顏回は孔子を解す——矢野二郎誤解せらる
◎文行忠信の人……（七五一）
頼山陽は兼ねし乎——菅原道眞と司馬光——聖人と善人とは何ぞ——三井三菱には恒あり
◎中庸の心情を以て萬事に處せ……（七五九）
孔子の漁獵と現今の漁獵規則——豪傑と漁獵の趣味——副島種臣、江藤新平は自我の人——松方正義に後入齋の稱あり
◎平和克復と論語……（七六八）
正義の力遂に勝つ——富力の勝利に非ず——道德の伴ふ富力の勝——論語は矯弊說に非ず
◎薩長氣質……（七七七）
孔子難問を受く——善意に解して受流す——薩長人は黨を組む質——水戸會津にも人物あり

◎帝國劇場設立の由來……（七八五）
伊藤博文、井上馨の遊び振り——澁澤は義太夫ぐらゐは語る
◎自己卽ち是神佛……（七九〇）
自己卽ち是れ神佛——利福を神佛に祈願せず
◎贅澤と吝嗇とに對する辨……（七九五）
禹は儉約家の好標本——古英雄と岩崎彌太郎、大倉喜八郎——卽易の名人平澤左內——綿密と粗忽は一見して知れる——孔子の容貌
◎東洋道德と西洋道德の差……（八〇五）
世に知られずして爲すが至德——東洋道德と西洋道德の違ひ——德川光圀と松平樂翁の至德——自由と放縱節儉と吝嗇
◎理性と共に愛情を高めよ……（八一四）
淳樸の風興れば協調會は不要——理性のみでは世の中は持てぬ——森村市左衛門末期の言葉
◎敬虔な氣風を高めよ……（八二二）

自我のみ主張してはならぬ——德川民部大輔に隨つて佛國に留學——德川家康の訓言
◎由らしむべし知らしむべからずの眞意……（八三五）
學問の順序——由らしむべし知らしむべからずの眞意
◎寬容ならざるの弊と驕吝の戒……（八三九）
論語を讀むに就いての希望——一見矛盾の感——各章句眞意の理解——責任を果さず權利を呼ばはる——才あるも驕吝なれば觀るに足らず
◎學問の廢頽と學生の政治運動……（八四九）
名利に走つて眞の學なし——威武も屈する能はず富貴も淫する能はず——日本若し危邦となるも去らず——途無きに富むは恥なり——學生の普選運動は是か——侗にして愿を缺くは人間の屑
◎明治天皇の懿德……（八六一）
半可通の學者の多い今の世の中——衆智を擧用するの德——堯舜と明治天皇の至德——非議する間隙なき君德
◎天命を悟り諸事公明正大なれ……（八六九）
利と命と仁と——私利私慾を排す——天命を無視せる獨帝——心の欲する所に從て矩を踰えずの

境地に至れ——偉大なる人格の發露——死生の巷に出入せし經驗

◎功利に奔るは破滅の基因……（八七六）

盛德と多能とは全く異る——孔子は聖人にして又多能の人——舉世滔々として功利に奔る——貧富貴賤の差別なし——多數の訪客に接するは人間の義務——春秋の時代と我國の現代

◎現代人の最大缺陷……（八八七）

人に接するに誠意を以てせよ——孔子の道德の妙用——孔子の孔子たる所以——孔子は凡人の典型——何事も程度を超えざれ——現代人の虛禮を戒む——慨しき現代の風潮——周時代の日本の文化——孔子生涯の一轉機と大戰前の歐洲の狀態——理窟は分つてゐて實行の伴はぬ現代人——光陰は流水の如く逝くものは還らず——德を好むこと色を好むが如き者を見ず——利を好む者はあれど德を好む者は尠し——理解力はあるが實行が伴はない——薄志弱行を戒む

◎理財と孔孟の道德……（九〇八）

孔孟の道德と理財とは相反せず——進步は大に望むが善惡を鑑別せよ——中途で挫折するは何事も出來ぬ人——努力する人と努力せぬ人

◎遷善改過の德と卓然たる節義……（九一四）

能く人の言を聞き己れの行を省みよ——三條實美、木戸孝允、森村市左衛門は遷善改過の人——

三軍の帥は奪ふ可く匹夫の志は奪ふ能はず——貧富に依りて賢愚の別なきも禮儀を守れ——道は窮りなし一事に滿足すること勿れ——事變に臨みて節義を變へざるは君子なり

◎知仁勇兼備の明治天皇……（九二一）

知仁勇の三つの德——ワシントンと德川家康——明治天皇は三德兼備の典型——與に權るに足る人尠し——道は目前に在り

◎時勢の推移と孝の解釋……（九二八）

本を忘れ末に趨る——陳蔡の難と孔門の十哲——孔子顏回を推稱す——孝に對する解釋——孝に就て親の理解が必要——舊道德にのみ捉はるゝ勿れ——嘘を平氣で言ふ現代人心理——文字の學問でなく生きた學問をせよ

◎人間は其分に安んぜよ……（九三九）

人は其節度を守れ——孔子顏淵の死を悼む——掬すべき師弟の情愛——孔子の常住坐臥髣髴たり——先づ一身一家を治めよ——孔子人を見るの明あり——上に諛ふ士を誡む——短所を護らず長所を掩はず——人間は中庸を保つが第一——孔子冉求の誤りを惜しむ——孔子門人の性格を評す——言論のみでは人物が分らぬ

◎現代教育の缺陷……（九五六）

孔子門弟薫陶の一例――精神教育を閑却する勿れ――濃やかなる師弟の情――孔子季氏を諷刺す――孔子佞辯者を誡む――孔子四門人の希望を評す――孔子謙讓の德を說く

◎仁は修身齊家治國の根本なり……（九七三）

孔子三節に分つて仁を說く――仁の體用と効驗と實例と――孔子の說く仁は實際生活に伴ふ――論語の死學ならざる所以――一切の事を苟且にすべからず――言ふは易く行ふは難し

◎明ある人と明なき人……（九八四）

君子とは何ぞ――近頃の綱紀肅正問題――子夏司馬牛を慰む――人事を盡して天命を俟つ――明ある人とは如何なる人か

◎儉約の半面は積極的たれ……（九九二）

善政とは如何なるものか――信は政事の根本なり――質と文とは車の兩輪の如し――加藤內閣の儉約奬勵――儉約は消極的ならざるを要す

◎偉大なる孔子の遺訓……（一〇〇一）

唐澤斗嶽氏の孔子政治家論――福地櫻痴氏の孔夫子論――井上哲次郎博士の孔子觀――孔子の理

想は人類の幸福增進にある――孔子の道は仁を以て根本とする――現今の政治と孔子の眞意――山鹿素行の論語觀――論語は世界各國語に飜譯さる――カーネギー論語を引用す――論語の蒐集約一千種類――孔子の遺訓は偉大なる眞意

◎予の處世方針と態度……（一〇一六）

野依秀一と初對面の動機――實業界に身を投ぜし所以――實業界隱退の時機

處世の大道

子爵　澁澤榮一　著

論語主義を奉ずる所以

◎論語に親しむに至れる因緣

何故私が孔夫子の論語に親しみ、之を服膺して今日の如く日常生活の規矩準繩と爲すまでに相成つたかは、或は世間の方々の不思議に思はるゝ所であらう。それに就ては先づ幼年時代に私が受けた教育の順序から申し述べねばならぬ。

維新前に於ける教育は、何地とも主として漢籍に依つたものであるが、江戸表などでは、初めに蒙求とか乃至は又文章物を教へたりしたやうにも聞き及ぶ。然し、私の鄉里（今の埼玉縣）

では、先づ初めに千字文三字經の如きものを讀ましめ、それが濟んだ處で四書五經に移り、文章物はその後になつてから漸く教へたもので、文章軌範とか唐宋八大家文の如きものを讀み、歴史物の國史略十八史略又は史記列傳の如きものをも此間に於て學び、文選でも讀めるまでになれば、それで一通りの教育を受けた事にせられたものである。

私は七歳の時に先づ實父より三字經を教へられ、明けて八歳となるに及んで、私より十歳ばかり年長であつた從兄の尾高惇忠といふ人から、大學・中庸・論語・孟子などの四書を教へてもらふ事になつたが、私に四書を教へて呉れた這の從兄の妹を、私は後年に至り娶つて荆妻としたのである。私の論語に親しむに至つた抑々の發端とでも申すべきものは、まづ以て斯くの如くである。

◎何故論語を選める耶

同じく孔夫子の教を遵奉するにしても、強ひて單り論語に據る必要は無からう。大學は如何中庸は如何との念を懷かるゝ方々も無いでなからうが、大學は其冒頭にも、

古之欲レ明二明德於天下一者。先治二其國一。（古の明德を天下に明にせんと欲する者は、先づ其の國を

治む）

とあるほどで、治國平天下の道を說くのを主眼とし、それから逐次齊家修身に及び、何れかと申せば、政治向に關する教訓が主である。中庸の說く所には又一段高い立脚地に立つて觀察した意見が多く

致二中和一。天地位焉。萬物育焉。（中和を致せば天地位し萬物育す）

とか

鳶飛戾レ天。魚躍二于淵一。（鳶飛んで天に到り、魚淵に躍る）

などの句があるほどで、何れかと申せば哲學的である。修身齊家の道には稍々遠い恨みがある。

然し論語になると、悉く是れ日常處世の實際に應用し得る教とでも申すべきもので、朝に之を聞けば夕べに直ぐ實行し得らるゝ道を說いてある。殊に鄕黨篇の如きに於ては、寢るから起るまで、飲食衣服の事より坐作進退に亘つて、殆ど漏らす所が無いくらゐである。是れ私が孔夫子の教を遵奉せんとするに當り、大學・中庸に據らず、特に論語を服膺し、之に悖らざらん事を孜々として是れ努むる所以である。私は論語の教訓を守つて暮らしさへすれば、人は能

く身を修め家を齊へ、大過無きに庶幾き生涯を送り得られるものと信ずる。

◎論語を實踐躬行す

世間には、大德の禪師を屈請して禪門の提唱を聽く篤志の方々もあらせられるが、私は昨今宇野哲人先生に御依賴申して、家族の者と打ち揃ひ、毎月一回づゝ論語の講義を拜聽する。然し私は單に講義を聽いて之を樂しみにするといふ丈けではない。勿論及ばぬ勝ちな不肖の身故如何に努めても及ばぬ所も多いには相違ないが、論語にある孔夫子の敎は一々之を身に體し、及ばぬながらも之が實踐躬行を心懸け、又之を實踐躬行して來た意氣である。此の意味に於て私が論語に對するのは、世間の方々と多少その趣を異にして、論語の章句をそのまゝ、今日まで處世の實際に施すに力め來つたものと、過言ながら言ひ得やうと思ふ。

私は明治六年に官を罷めて、實業に身を委ねる事になつたのであるが、畢竟するに、國を强くするには國を富まさねばならぬ、國を富ますには商工業を隆盛にせねばならぬものと信じたからである。當時はまだ『實業』なる言葉がなく、之を『商工業』と稱したものであるが、私は商工業を隆盛にするには、小資本を合して大資本とする合本組織、卽ち會社法に據らねばならぬものと考へ、この方面に力を注ぐことにしたのである。

さて愈會社を經營する事になれば、まづ第一に必要なるものは人である。明治の初年頃、政府が親しく肝煎をして創始めた會社に、爲替會社とか開拓會社とか云ふ如きものもあつたが、それが皆な良好く續かず失敗に終つたのは、當事者に其人を得なかつたからである。會社の當時者に其人を得、事業を失敗させずに成功しやうとすれば、其人をして據らしむるに足る或る規矩準繩が無ければならぬ。又私とても、據るべき規矩準繩が無ければならぬのに氣が付いたのである。

◎論語主義は明治六年より

當時まだ耶蘇敎は普及するまでに至らなかつたので、私は素より耶蘇敎の如何なるものであるかを知るべき由も無かつたのであるが、佛敎に關しても、知る所が甚だ狹かつたから、私は實業界に身を委ぬるに就て則とすべき規矩準繩を、耶蘇敎や佛敎より學ぶわけに參らなかつたのである。然し儒敎卽ち孔夫子の敎ならば、無學ながら私も幼少の頃より親しんで來た所である。殊に論語には、日常生活に處する道を一々詳細に說かれてあるので、之に據りさへすれば

萬事に間違ひなく、何事か判斷に苦しむやうな場合が起つても、論語といふ貴い尺度を標準にして決しさへすれば、必ず過ちをする憂ひの無いものと信じ、明治六年實業に從事するやうになつて以來は、斯る貴い尺度があるのに、之を棄てゝ何に據らうかと迷ふ必要は無いと思ひつき、拳々論語を服膺して之が實踐躬行に努めることにしたのである。

論語には實業家の取つて以て金科玉條となすべき教訓が實に澤山にある。假令へば里仁篇の

富與レ貴。是人之所レ欲也。不レ以二其道一得レ之不レ處也。貧與レ賤。是人之所レ惡也。不レ以二其道一得レ之不レ去也。（富と貴きは是れ人の欲する所なれども、其道を以てせざれば之を得るも居らず、貧と賤きとは是れ人の惡む所なれども、其道を以てせざれば之を得るも去らず）

の如き即ち其一例で、實業家の如何にして世に立ち身を處すべきものたるかを、明確に說き教へられたものである。又同じく里仁篇の中に

於二於利一而行多レ怨（利によつて行へば怨み多し）

などの句がある。其他一々枚擧に遑なきほどで、實業家の日常生活に於て遵守すべき教訓が、實に論語には多いのである。

◎維新前の商工業者

かくまで實業家の據つて以て則とするに足るべき教訓が、論語などに充ち滿ちて居るに拘らず、維新前は農工商等の實業に從事する者に毫も文字の素養なく、越後屋だとか大丸だとかの大きな老舗にでもなると、文字の知識ある者を、角い文字を知つてるからと稱し、何となく之を危險視して店員に採用せず、文字の素養が無い者ばかりを使用してたものである、隨つて角い文字で書かれた論語、其他修身齊家に必要なる典籍の如きも、士大夫の間にのみ多く讀まれて、實業家の間には讀まれなかつたものである。

その結果は更に悲しむべき現象になり、素と實踐躬行の爲に說き遺された孔夫子折角の教訓と、實際の社會に必須の要素たる實業との間に、殆ど何の關涉聯絡をも存せざるまでに至り、論語の如きも士大夫にばかり讀まれて、實業家が日常その稼業に處する上の指南車となり得ぬものとなり、知と行とが別々になつてしまつたのである。

維新後外國との交通も開けて參つたに就ては、商工業者の品位を高めねばならぬ事になつたのであるが、それには知行を一致さして、商工業等の實業に從事する者にも、その據るべき道

を知らしめ、斯の道によつて、實際の商工業を營むやうになさしめねばならぬものと私は感じたのであるが、この目的を達するには、維新前まで士大夫の間にのみ讀まれ、その極實行を離れて徒に章句の末を研究する弊に陷つてしまつたから、私は孔夫子の經典を實際の實業に結びつけて讀ましむるやうにし、之を實踐躬行するのが何よりであると考へ、最も實際に適切な道を說かれてある論語を、私も讀み、又他の實業家にも讀んでもらひ、知行合一によつて實業の發達を計り國を富まし國を强くし、天下を平かにするに努むべきものだと信じたのである。私が論語を服膺し、その敎訓を實地に行ふ事に心懸くるやうになつた一つの因緣は、實に玆にある。實業を何時も政府の肝煎にばかり任せて置いては決して發達せぬ、民間に品位の高い知行合一の實業家が現はれ、率先之に當るやうにせねばならぬものであると感じた事が、私をして論語の鼓吹者たるに至らしめたものだとも又云ひ得ると思ふ。

◎孔子敎は宗敎なりや

論語の如何なるものであるかを說く前に、一つ考へて置かねばならぬ事は、孔子の敎へ即ち儒敎なるものは、宗敎なりや否やの點である。目下のところ我が邦に於て之に對する意見が二派に別れて居る。文學博士井上哲次郎氏は、孔子敎は半宗敎で、少くとも宗敎らしい所のものであると主張せられるが、之に反對して法學博士阪谷芳郎氏は、否全然宗敎でない、孔夫子は單に實踐道德を說かれたものに過ぬと論駁し、今なほ論戰酣で、何れとも決定せられたわけでない。

論語子罕篇に、

天之將レ喪ニ斯文一也。後死者不レ得レ與ニ於斯文一也、天之未レ喪ニ斯文一也。匡人其如レ予何。（天の將に斯の文を滅ぼさんとするや、遲れて死する者は斯の文に與ることを得ず、天の未だ斯の文を亡さざるや、匡人夫れ予を如何せむ。）

とあるが、この章句にある『斯文』とは、孔夫子が之を其當時の世に傳へ、又後世に遺さんとせられた『先王の道』を指したもので、この一章の意は、聖人の道を滅ぼさんとするのが若し天意ならば、予（孔夫子）或は匡の人々の手によつて殺さるゝかも知れぬ。然し予が未だ其事業を卒らぬ中に殺されてしまへば、後世の者は聖人の道たる『斯文』を知り得られない事になるから、聖人の道を滅ぼしたく無いとの天意のある中は、『斯文』を傳ふるを以て天職とする予は、

決して匡の人々の手によつて殺さるべき筈のものでないといふにある。この處に孔夫子が天に對する信仰のあつた事が、ほの見えて居る。

◎論語に九ケ所の天

子罕篇の外にも、なほ孔夫子の天に就て說かれた所が論語の處々にある。爲政篇の「五十而知二天命一」(五十にして天命を知る)八佾篇の「獲二罪於天一無レ所レ禱也。」(罪を天に獲れば禱る所無し)公冶長篇の「夫子之言二性與一天道一不レ可二得而聞一也已矣」(夫子の性と天道とを言ふは得て聞くべからず)雍也篇の「予所レ否者。天厭レ之。天厭レ之。」(我の否む處のものは天之を棄てむ、天之を棄てむ)述而篇の「天生二德於予一。桓魋其如レ予何。」(天、德を我に生ず、桓魋—孔子を殺さんとせる人—夫れ我を如何にせん)泰伯篇の「堯之爲レ君也。巍々乎。唯天爲レ大。」(堯の君たるや巍々乎たり唯天を大なりとす)憲問篇の「不レ怨レ天。不レ尤レ人。下學而上達。知レ我者其天乎。」(天を怨みず人を咎めず、下學して上達す、我を知る者は夫れ天か)陽貨篇の「天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。」(天何をか言はんや、四時行はれ百物生ず、天何をか言はんや)など、論語全篇を通じ、天に言及せられた所が九ケ所ばかりある。殊に、八佾篇にある「罪を天に獲れば禱る所無し」の語に徵して觀ると、孔夫子

が天を信じ、又これが孔夫子の信仰であつた事は明かで、孔子教は方に一の宗教を以て觀るべきものだとは、井上博士の主張せらるゝ處である。

之に對し阪谷博士は、總じて宗教には禮拜祈禱等の形式を具備せねばならぬのを法とするに拘らず、孔子教には此の形式が無い。故に孔子教は目して以て宗教なりと云ひ得られぬものだと反駁するのであるが、私は今俄に其の何れが是であるか非であるかを申述べ得ざるにしても、孔子教を以て宗教であるとは思つて居らぬ。實際世に處するに當つて規矩準繩を說き示されたものとして孔子教を遵奉し、論語によつて之が實踐躬行を努めつゝあるのである。

◎孔子は如何なる人か

孔夫子は史記世家にもある如く、今を去る約二千四百六十五年前、魯の襄公二十二年に、魯の昌平鄉と名づけらるゝ里に生れられたものである。初めは倉庫掛乃至は又畜產等の役人になられたが、成績何れも見るべきものがあらせられた。三十五歲の頃、生國の魯が亂になつたので、昭公が齊に奔られた後を追うて、同じく齊に赴かれたところを、齊の景公が拔擢して大に用ひやうとしたが、反對者があつて用ひらるゝことが能きなかつたので、再び生國の魯に歸

られたものである。然るに四十三歳に及ばれた時、魯は季氏の天下となつた。この時に孔夫子は季子に仕へやうとせられたのであるが、偶陽虎と稱する者が反して又國が亂れたので、遂に仕へず退かれたのである。ところが五十一歳に成られた時に、季氏に反いて起つた公山弗擾が孔夫子を召すことになつた。この時も亦孔夫子は往かうとせられたのだが、遂に行かれなかつたとある。その後も孔夫子は諸國を遍歴し、諸公に仕へて見られたが、何れも我が志しを行はしむるに足る所が無かつたので、又生國の魯に戻られたのが哀公の十一年、齢方に六十八歳の時にあらせられる。それから七十三歳で逝かれるまでは全く仕官の念を斷つて、門弟を教育し道を傳へることにのみ氣を注がれたのであるが、六十八歳になられるまでは、志しが主として政治方面にあつて、周の時代を復興し、王道を天下に布きたいといふのに熱心であらせられたものゝ如く察し得らるゝのである。

◎其志や察するに餘りあり

五十にして既に天命を知られた大聖人の孔夫子ともあらうものが、魯の反臣たる季氏に反いて更に起つた弗擾に、如何に召されたからとて往かうとされたのは、恰も名分を辨へざるものゝ如くにも思はれ、其處此處と到る處に仕へ廻つた所を見ると、又焦せられてるやうにも思はれる。當時の周圍を少し注意して見廻しさへすれば。諸公の中にも士大夫の中にも、かの管仲を用ひて其志しを遂げしめた桓公の如き明君が無いくらゐの事は、理解りさうな筈だ。これが理解らずに、處々に遍歴せられたものとすれば、孔夫子は如何にも眼の見えぬ人であつたかの如くにも思はれる。

孔夫子は素より之を十分に承知して居られたらうが、斯く志を爲すに繾々たる如くあらせられたのは、是れ孔夫子が其志に忠なるの致す所で、何處でも構はぬから、我が志によつて王道の範を布かしめてくれる處がありさへすれば、一つ之を行つて見たい、今度こそは我が志を容れて之を遂げしめてくれるだらうと、周の時代を復興して民の鼓腹する狀態を實現したいとの勃々たる熱心があつた爲めである。孔夫子の情は實に察するに餘りある。孔夫子の志は殊に生國の魯をして再び周の盛時に還らしめんとするにあつたので、孟子の傳ふる所によれば、孔夫子の魯を去る時には、志が行はれぬ爲に他國を去る時の如く平然たる能はず、悒々として如何にも去り難くさうにして去られたものであるとの事である。

◎澁澤にも孔子の志あり

老いて六十八歳になるまでも政治上の事に戀々せず、早く見切りをつけて、門弟子の教育に意を注ぎ、道を傳へるのに力を盡してた方が、孔夫子の爲に利益であつたらうにと思はるゝ方々があるやうに、私なぞにも餘り世間の事に關渉せず、既に老人のことでもあるから、靜かに引き籠つて修身齊家の道を說くだけぐらゐに止めてたら可からうと思はるゝ方々もあらう。然し私は敢て僭して自ら孔夫子を以て任ずるわけでは素よりないが、孔夫子が若しや自分が出たら、其國の政治が良くなるかも知れぬと思うて、召されさへすれば何處にでも出て仕へたやうに、老人の私でも出て奔走すれば、若しや少しでも世間の御役に立つ事が能きやうかと思ふ心があるものだから、電燈問題が起れば之に顏を出したり、米國の問題があると云へば夫れにも關係をしたり、對支交涉の事件が起つたとなれば、之にも亦顏を出したりするやうになるのである。要は孔夫子が其志に忠なりし所を學んで、多少なりとも國利民福の爲に貢獻したいとの精神に外ならぬのである。

◎圓滿なる孔夫子

兎角古來英雄とか豪傑とか稱せらるゝ人々には、他に擢んでた非凡の長所特色がある代り、又大きな缺點の見出され得るものである。然るに孔夫子には是れが非凡の長所であると特に指さし得るものゝ無いと同時に、又一つの缺點さへ無いのである。總てが皆圓滿に發達し、總てが非凡であると共に、總てが平凡である、全く缺點が無いのである。之を稱して偉大なる平凡とでも云ふべきものであらうかと思ふ。孔夫子も自ら卑事に通じて居ると申されたほどで、何一つ世の中の事で知らぬといふものは無かつたのである。史記世家にもある如く、六藝に通じて、馬を御したり弓を射る事さへ心得られて、何事にも行き亘つて居られた。論語の鄕黨篇にもある如く、孔夫子が大廟に入らるゝや、事毎に問うて教を受け、後に始めて進退せられたものだから、傍にあつた者が、若しや大廟の禮を孔夫子が心得て居られぬのかと尋ねて見ると、爾うでは無い、斯く事毎に問うて後に進退するのが、即ち大廟に於ける禮であると答へられたほどで、禮樂は素より申すまでもなく、後年には春秋を著されて、歷史に對する造詣も頗る深くあらせられたのを示して居られる。

要するに、孔夫子は缺點なく何事にも精通した頗る圓滿な人物で、常識の非常に發達せられ

た方である。依て私は孔夫子に學んで、論語にある教訓を遵奉してさへゆけば、世間に出でゝ非難の無い常識の發達した人物になり得られるものと信ずる。又孔夫子の教訓は大なる常識に外ならぬものであるから、誰でも學んで實踐躬行し得られるものである。

斯の孔夫子の教は、孔子より孟子に傳へられ、其後韓退之なども之を傳へたやうであるが、一時餘り世に行はれず、宋の時代になつてから其の復興を見るに及び、朱子の如き學者が現れて、四書の朱氏集註の如きものを見るに至つたのである。然し之より先に古註といふものもある。日本には古註本も朱子集註本も共に渡來したが、德川時代には朱子集註が最も博く行はれたものである。

孔子の教訓と今の賢者の處世振り

◎學而第一の冒頭

學而時習レ之。不二亦說一乎。有レ朋自二遠方一來。不二亦樂一乎。人不レ知而不レ慍。不二亦君子一乎。

（學んで時に之を習ふ、亦悅ばしからずや。友あり遠方より來る、亦樂しからずや。人知らずして怒らず、亦君子ならずや）

この章句は論語の冒頭になつてるのであるが、筑前の學者貝井道載先生の著はされた論語語由等に據つても明かなる如く、處世上頗る大切な教訓である。全體の章が「學而」と「有レ朋」と「人不レ知而」との三段に分れ、一見何の脈絡も其間に無いかの如くに思はれるが、互に離すべからざる聯絡がある。「學んで時に之を習ふ、亦悅ばしからずや」とは、「斯文」たる聖人の道を學び、修め習ふといふ事は、假令單獨でしても悅ばしい愉快な次第である、との意味である。然るに、その上なほ遠方より來れる友人と共に、自ら習ひ修めた道を語り明かし、之と共に切磋琢磨して道に進んで行けるやうになつて假令二三人でも同志の殖えるといふ事は、更に一層愉快な悅ばしい次第であると云はねばならぬ。これが「朋あり遠方より來る、亦樂しからずや」との意味である。

◎世間に知られざるを憂へず

既に自ら習ひ修めた道を二三の友人になりとも傳へて、共に語つて樂むを得るやうになつた上は、更に此の上之を衆に傳へ、それが天下に行はれるやうになつたならば、一層悅ばしく又

愉快であるに相違ないが、さて之を衆に傳へ天下に行はうとすれば、世間が其教を容れて呉れず、人は容易に其道の何たるかを解して呉れぬ。然し世間が解して呉れず人が知つて呉れぬからとて、苟も君子たるの修行をする者は、之に腹を立てゝ怒るやうな事のあるべき筈のものでないといふのが、「人知らずして慍らず、亦君子ならずや」の意味である。

然し凡人は、兎角自分の折角の志が人に知られず世間に行はれぬと、腹を立てゝ憤つたり氣を腐らして悲觀したりするものである。そんな事をしてはならぬといふのが、この學而篇の冒頭にある章句の教訓である。私は今日まで及ばぬながらも論語の此の教訓を身に體して、自分の盡すべき丈けの事を盡しさへすれば、假令それが人に知られず、世間に容れられやうが容れられまいが、それには頓着なく、決して慍るとか腹を立てるとか悲觀するとか云ふ事は、無いやうにして來た意氣である。

◎青年子弟の感果して如何

私が論語を服膺して、今日までに其教訓を實地に行ひ來れる所謂「論語處世談」を「此雜誌」に掲載するのを讀まれて、今の青年子弟諸君が、果して如何なる感を抱かれるかは、私の切

に知らんと欲する所であるが、論語の教訓は單に之を論じたり批評したり、或は又單に之を難有い貴い教訓なりとして一方の高い處に片付けてしまひ、之を尊敬するのみで過ごすべきものでは無い。然し兎角當今の世の中には、かくの如く知と行とを全くの別物に取扱ひ、孔夫子の說かれた所は斯く〳〵であるが、世の中の實際は爾う〳〵聖人の教訓通りに行れるものでは無いなぞと、勝手の舉動に出でらるる人々が多いやうに想はれる。これは私の頗る遺憾に感ずる所である。

支那にも孔夫子より少しく後れて、墨翟卽ち墨子が出でゝ兼愛の說を唱へ、又楊朱卽ち楊子が現はれ、墨子に反對して、自愛の說を主張し、當時支那北方の學者が主として孔夫子の說を祖述せるに對し、南方の學者には、孔夫子に少しく先つて現れた楚の李聃卽ち老子の無爲說を祖述する者が多かつたのである。然し何れも學說の上でのみ爭つたもので、之を實地に行つたといふのでは無い。隨つて無爲說でも兼愛說でも自愛說でも、議論の上からのみならば、如何やうにも之を面白く述べ立て得られるに相違ないが、孔夫子の論語にある教訓は、たゞ議論をする爲に組み立てられた所謂「說」と申すものとは全く其趣を異にし、士大夫庶人より下は匹

夫匹婦に至るまで、凡らゆる階級の人をして、實地に躬行せしめんが爲に說かれたもので、他の空理空論とは其の根本の性質に於て異る所がある。故に孔夫子の說は毫も一方に偏することなく、先づ仁を主とせられてあるには違ひないが、仁ばかりでは實地に臨んで去就に惑ふ者を生ずる恐れあるべきを豫め慮られて仁義を兼ね敎へられ、仁と並んで義をも說かれたものである。それでも猶ほ、誤解を生ずる者の出づるのを憂ひられたものと見え、仁義禮智信の五常を以て人倫の根本なりとし、之を論語の中に併せ說かれて居る。

◎今の賢者の處世振りを悲む

這個に就ては、曾て法學博士穗積陳重氏も論ぜられた事のあるやうに記憶するが、墨子の兼愛說の如き、一寸聞いた所では、如何にも面白く感ぜられ、如何にも尤もらしく思はれ、又その中には或る眞理をも含んで居るに相違ないが、さて之を提げて實地に臨めば、往々にして行き詰りになつてしまはねばならなくなる。假令ば、今日の國際上にまでも墨子の兼愛說を演繹めて行はうとすれば、其結果は果して如何あらうか。思ひ半ばに過ぐるものがある。是に至ると、孔夫子が論語に說かれた仁義禮智信五常の道は、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施

して悖らぬ、坐しても行ひ起つても亦行ひ得べき、實際の處世に最も適切なる敎訓であるといふ事になる。

孔夫子と殆ど同時代の支那に於てさへ、孔夫子の敎訓は、單に一種の學說として取扱はれたほどのものである。況や、今日の我が邦に於て、之を單に學說の如くに取扱ひ、如何にも結構な敎であるといふ丈けで、之を實際に施して躬行する者尠く、聖人の敎訓は聖人の敎訓、實際の處世は實際の處世と、別々に分けて考へる人々の多くなつたのも、敢て怪むには足らぬ次第であるが、偶々之を實地處世の上に躬行した人があるかと思へば、それは多く中江藤樹先生と か、或は熊澤蕃山先生とか――蕃山先生は多少治政の事に關係もしたが――の如き所謂道學先生である。實地の社會とは懸け隔れた人々のみが、論語に孔夫子の說いて置かれた敎訓の實行者になつてゐるのは、如何にも遺憾である。

近頃の實業界などで、少し嶮しく立ち廻られやうとする方々などになると、其の根本の理想が全然私なぞと違つて、やはり仁義は仁義で隅の方に押し付けて置き、利ける事は利ける事で全く之を仁義の觀念から離してしまひ、勝手に日常の去就進退を決し、聖人の敎や論語の敎訓

を其儘實踐躬行したのでは、到底今日の世の中が渡れるものでは無い。金儲けなぞの能きるものでは無い。事業に成功するなぞは思ひも寄らぬ事だと考へて居られる如くに見受けられる。殊に甚しい方々になると、心は仁義を無視した行動に出られやうとしながら、それでは餘り世間への體裁上面白くない、餘り自利主義の如く見えて、彼是と非難を受ける恐れがあるからとて、自分が孔夫子の說かれた仁義に據らうとする心は露僅かもなくして、却て、自分で勝手な眞似をする行動の方に仁義を引き寄せ、仁義をして自分の行動を辯護させる道具に使ひ、世間の手前だけを繕はうとせられる。心から眞に仁義を行はんとする精神無く、皮層ばかりの仁義で世の中を渡らうと致される方が無いでもない。

然し聖人の道は、斯く實地を離れて片隅に押しつけ置かるべき性質のものでなく、錙朱の利を爭ひつゝある間にも、人は仁義を實地に行つて往けるものである。否な仁義を根本にして商工業を營めば、敢て爭ふが如き事をせずとも、利は自から懷に這入つて來るものである。世の中は總て分業で、學者は學理を研究して新らしい學理上の法則を發見し、治者は政治上に新らしい意見を立て、國家の繁榮を計るやうになつて居る。恰度そのやうに、商工業者は商工業

を營んで利を擧げ、孔夫子の論語に說かれてある道に合致してゆけるものである。

◎論語は悉く實踐躬行の教訓

私は論語に孔夫子の說かれた教訓は、是れ悉く實踐躬行の爲にあるもので、士大夫庶人より匹夫匹婦に至るまで、凡らゆる人の行ひ得、又行ふべきものであると信じ、孔夫子の御精神のある所を身に體し、今日まで之を實地に行つて來た積であるが、素より不肖の凡夫で、孔夫子の如き聖人には及びもつかぬ所より、私の一言一行が悉く知行合一であるとは申上かねる。殊に壯年以來、身を磊落に持つ慣習のあつた爲に、論語にある孔夫子の遺訓そのまゝに行つて參つたとは廣言しかね、及ばぬ所ばかりで慚愧に感ずる次第であるが、明治六年實業界に身を投じて以來、少くとも實業の上に於ては、不肖ながら、論語の教訓を其まゝに我が身に行つて來たものと斷言して憚らぬのである。

私は今日でも、又今日までも、如何な方の御訪問を受けても、故障の無い限りは、必ず悅んで御面會をする。決して面會を謝絕するやうな事を致さぬ。斯んな事は一些事の如くであるが、折角訪問ねて來て下されて、面會を斷られるやうな事があると、誰でも何となく不愉快な、

面白くない感じを催すものである。私は自分の行爲で、他人に斯る不快を御與へ申したく無いと思ふから、誰彼にでも御面會するのである。御面會して御話を聞き、何か御相談でもあれば、自分で能きる事なれば能きる、能きぬ事なれば能きぬ、宜しい事なれば宜しい、宜しく無い事なれば宜しく無いと、自分の意見を申上げ、毫も隱すとか、僞るとか、或は又包むとか云ふ事の無いやうにして來たものである。事業に當るに就ても矢張同樣で、僞るとか包むとか、體裁を繕ふとかいふ事をせずに、總て孔夫子が論語に說かれてある敎訓を、實地に行ふ事にのみ心を盡して參つたものである。

斯く私が論語の遺訓を處世の實際に行ふやうになつたに就ては、稍々餘談に亘る恐れはあるが、私が實業界に身を投ずるに至つたまでの徑路を、簡略に申述べねばならぬ。私が實業界に身を投ずるに至つた徑路は、是れ即ち私が、前にも申述べたる如く、論語によつて世に處し、論語を尺度にして實業界の事に當らうと決心するに至つた徑路であるからである。

論語を躬行するに至れる徑路

◎京都に出でゝ思想一變す

却說私は前にも申述べたる如く、自分より十歲年長の從兄で、漢學者であつた尾高惇忠に就て漢籍を勉强する間にも、家業の農と藍の商賣ともに父に勵まされ勉强して居る中、十七歲になつた頃には、家道も追々と繁昌するやうになつたものだから、私の鄕里（埼玉縣深谷驛より北一里の血洗島村）の御領主安部攝津守より、私の村へ千五百兩ばかりの御用金を言ひ付かつたる際、私の父も五百兩を調達して差出すことになつたが、その時に私は父の代理として、私の村より一里ばかりも隔つた岡部村にある御領主の陣屋に罷出でた處が、陣屋の役人は私に對して、如何にも權柄づくめの御取扱をなさるので、心中甚だ快からず、これも畢竟幕府の政治が弊竇の極に達したるの致す所と憤慨して居る矢先、世の中の調子が漸次變つて參り、德川の政治を非難する聲が到る處に喧しく、殊に私に取つては漢籍の師である尾高氏の弟に當る長七郎といふ人が、早く江戸に出でゝ天下の大勢を辨へ居つた丈けに、江戸より歸村する度毎に、當時の模樣を詳しく說いて聞かせられ、更に二十四歲の文久三年に、私が二度目に江戸に出で、海保漁村の熟と千葉の道場とに這入つて塾生をするやうになつてからは、かねて讀書

に依つて學び覺えて居つた國體論が深く私を感動し、私は愈よ百姓を廢めて國家の爲に盡さうといふ氣になつたのである。

依て私は江戸に四ケ月ばかり留まつたのみで鄉里に歸り、漢學の師である尾高惇忠を統領と仰ぎ、同姓の澁澤喜作と私との三人で密議を凝らし、他の力を借らずに一揆を起し、まづ其血祭に或る大名を討ち、直に其兵力を利用し、一擧して外國人の居留地たる横濱を燒擊したら、外國より問責の師が日本に向けて來るに相違ない。さうなると、幕府が到底支へ切れず顚覆するに至るは必定だと考へ、近頃云ふ不軌とまではゆかぬが兎に角一揆を企てたのである。然しこれは尾高氏の弟の長七郎に諫止せられて果さず、それこれする中に私等に斯る企てのあつた事が、其頃幕府の探偵であつた八州取締といふものゝ耳に入り、夫々手が廻つてるのを聞き知つたものだから、尙ほ鄉里に安閑として留まつてるのは、身を危險の淵に置くのみで、毫も國家に盡す所以でないと心付き、脫走といふでは無いが鄉里を去つて一先づ京都に出で、天下の形勢を觀望するに如かずと決し、私と同姓喜作との兩人は、相携へて京都に赴く事になつたのである。これが確か文久三年の十一月八日であつたやうに記憶する。さて京都に着いて見ると、從來の過激であつた私の思想は、玆に一變せねばならぬやうな事情を生じたのである。

◎平岡圓四郎に招かる

私と同姓喜作との兩人が京都に出づるに就ては、途中の詮議も却々嚴しくなり、且つ百姓では帶刀が能きぬといふので、兩人は一橋家の用人平岡圓四郎の家來であるとの先觸を出して置いて、東海道を無事に京都まで通過したのである。當時一橋慶喜公は禁裡御守衛總督の役を仰付かつて京都に在せられ、用人の平岡圓四郎氏も亦京都にあつたのであるが、私と喜作とは江戸の海保の塾と千葉の道場とに出入する中、友人よりの緣故で平岡氏に知られ、一橋家に仕官を勸められた事もあつたので、愈よ私共兩人が京都へ出發する事に決まるや、平岡氏の留守宅を訪ね、家來の者に面會し、實際の事情を述べて京都まで御當家御家來分の積りで先觸を出すから許して下されたいと依賴に及ぶと、平岡氏は其の出立前に、私共兩人が家來にしてもらひたいと賴んで來たら、何時でも許してもよいと申し置いて行つた爲に、直に私共の賴みを聽き容れて與れたが、私にも同姓の喜作にも、素より平岡氏の家來にならうとの氣は

毛頭無かつたのである。たゞ京都まで途中を無事に通過する便宜上、平岡氏の家來分たる名目を冐したのみである。

文久三年も暮れかけた所で漸く京都に着したので、伊勢大廟に參拜したりなぞする中に、その年も暮れてしまひ、翌けて元治元年の春を迎ふることになつたが、鄕里に於ける漢學の師であつた尾高氏の弟長七郎が、私の京都より發した出京を促す書簡を懷中にしたまゝ、鄕里より江戸に出る途中、或る行違で幕府の役人に嫌疑を蒙り、捕縛されて傳馬町の牢屋に繫がれるやうになつたとの獄中よりの通信を、私は長七郎から受取つたので、私の發した手紙の爲に、長七郎がさういふ嫌疑を受けたのでは無からうかと、二人で大に心配し、或は江戸に下つて長七郎と運命を共にしやうか、或は長州に奔つて多賀屋勇に賴らうかなぞと、小田原評定をして一夜を過ごすと、翌日に至り、喜作と私とは書面を以て平岡氏から招かれたのである。

平岡圓四郎と云ふ人は、今になつて考へて見ても實に親切な人物であつたと思ふが、私共二人が京都に出た理由を問ひ訊されたので、事情の始終を隱し包む所なく物語ると、平岡氏は兩人の一揆を起さうとして果さず出京したことも既に知り居られて、その事は早や幕府の方に

も探知せられ、兩人が果して平岡の家來なるや否やを、其筋より一橋家に問合せ來つて居る事情までも話して呉れたのである。

◎遂に一橋家の家臣となる

それに就て平岡氏は、幕府に於ても既に兩人が自分の家來で無い事を知つて居る際だから、强ひて家來であると僞つて報告するわけにゆかず、さればとて平岡の家來で無いと報告してしまへば、直に召捕られてしまふ恐れがある、其邊其麼したものだとの相談で、私共が鄕里に居つて懷いてたやうな一足飛びの過激な構想では　到底事の成るものではない、それより寧ろ此際節を屈して一橋家に仕へ、草履取から始める決心で、追々と政治上に實際の權力ある人に自分等の意見を進言し、之を行はしむるやうにした方が賢い道であると說き諭されたのである。喜作と私とは卽座に返答しかねて、其場は其儘引き取り、宿に歸つてから徹夜で兩人は一橋家に仕へる是非に就ての相談を凝したのである。

これまで德川幕府を倒さうとして奔走して來たものが、如何に焦眉の場合なればとて、幕府の支流たる一橋家に仕へてその家臣となるのは面白くないとは思つたが、此際躊躇へば其中に

は縛せられて犬死をするばかりであると考へ、猶ほ私は從來のやうな急激な理想では、到底國家の政治を改革することの能きるものでない事にも想ひ到り、且つは又私共兩人が一橋家の家臣になつた事が明かになれば、江戸傳馬町の牢屋に在る長七郎の嫌疑も、自然或は晴れるだらうとも考へて、茲に喜作と私との相談が一決し、兎に角一橋家に仕へて、槍持からでも、草履取からでも、何でも始めやう、その代り一旦仕へた上は、飽くまで君を堯舜にせねば止まぬとの決心を固め、翌日之を平岡氏に返事し、愈よ兩人とも二月二十三日を以て一橋家に召抱へらるゝことになり、茲に從來の私の思想が一變したのである。

◎一橋慶喜の將軍職に反對す

一橋家に召抱へられた時には、奥口番と申して奥の口の番に當る役柄で、四石二人扶持、滯京手當月四兩一分づゝの俸祿を受ける事になつたのであるが、間もなく一橋家の外交向を取扱ふ役所で、禁裡御所に對する接待、堂上公卿との交際、諸藩の引合筋等に對する御用談所の下役といふものを仰付けられ、一橋家の外交事務に參與する事が能きるやうになつたのである。その中、豫ねて私より一橋家に召抱へらるゝに先だつて申入れて置いた建言が容れられ、一橋

家に於て、一旦有事の日に備ふる爲め、廣く天下の志士を召抱へることになり、私と同姓の喜作とは關東人選御用掛といふものを命ぜられて、五月の末か六月の初旬であつたと思ふが、公然關東に下る事になつたのである。當時水戸の藩中に政爭があつて、志士は多く之に赴いて居つた爲に、應募者が極めて少數だつたが、一橋家の御領内にある各村を巡回し、廉潔忠誠の農兵三四十人を募集し、之に江戸で採用した劍客八人と漢學生二人とを加へ、京都に歸つたのである。

私の關東滯在中、平岡氏は六月十七日京都の一橋邸附近で水戸藩士の爲に暗殺されてしまつたのであるが、平岡氏の死後、用人として一橋家の政務を掌つた黑川嘉兵衛といふ人が、幸に私と喜作とを重用して呉れたものだから、九月の末には身分が御徒士に進み、食祿八石二人扶持、滯京手當月六兩になつたのである。翌けて慶應元年二月には私も小十人といふ身分に進み、十七石五人扶持、滯京手當月十三兩二分となつたが、その頃一橋家の兵備といふものは、幕府より借し與へられた二小隊の客兵が主で幕府よりいつ何時引揚げらるゝやも測り難く、それでは一朝有事の日に、一橋家が禁裡御守衛總督の大任を盡すかけにもゆかぬと私は考へたの

で、農民募兵の儀を慶喜公に謁見して言上し、遂に建言が容れられて、私は歩兵取立御用掛といふものになつたのである。

かくて私は兵隊組立御用を仰付かつて、一橋家の領地を巡回し居る中、領内の産米と木棉とが他領のものに比し値段が安くなつてる事や、硝石の産出が比較的領内に多いにも拘らず、大規模の製造所が無い爲に頗る不利を蒙つてる事に氣が付き、種々と建言する所があつたので、私は遂に食祿二十五石七人扶持、滯京手當月二十一兩の一橋家御勘定組頭を仰付かり、種々と財政上の案を立て、會計事務を取扱ふ事になつたのである。勘定奉行といふものが、昨今で申せば大藏大臣の格で、その次に勘定組頭があつたのだから、昨今で申せば私は一橋家に於ける大藏次官の格になつたのである。然るに茲に一つ困つたのは、徳川十四代の將軍家茂公が、慶應二年八月薨去になつたので、慶喜公が一橋家より宗家に入られて徳川十五代の將軍にならせらるゝといふ事である。之れには私は大反對であつたのである。

◎豪族政治を夢む

私はこの時とても、依然徳川幕府は倒してしまはねばならぬもので、又天下の大勢から察しても倒るべきものであると考へてたのであるが、若しこれまで君公として仕へ奉つた慶喜公に、一度將軍になられてしまふと、情誼の上から私は幕府を倒す爲に力を盡すわけに參らぬ事情に陷つてしまふ。のみならず、その當時私は、幕府も早晩倒れるに相違ないが、倒れた跡が今日のやうな御親政にならうとは夢にも思はず――今になつて思ふと誠に畏れ多い次第であるが――當分の處は豪族政治のやうなものになつて、薩長とか其他の有力なる藩が寄り合つて、天下の政治を行ふことになるものと信じたのである。斯う考へて徳川一門を見渡すと、尾州公でも水戸公でも、豪族政治の仲間入が能きさうな人傑では無い。たゞ一橋慶喜公だけは人傑であらせられるから、公を推し立てゝ行きさへすれば、豪族政治の仲に割り込んで、我が志も行へるといふものだが、慶喜公が一旦將軍に御成りになつてしまへば、幕府が倒れた時に、如何とも天下の政治に志の伸べやうが無くなつてしまふ。そこで私は飽くまで慶喜公を一橋家に引き留めて置いて、將軍職には御就かせ申すまいとしたのである。然しこれは後年に至り御面會を致した際に始めて承はつて知つた事であるが、慶喜公には此の時既に大勢の赴く所を御察知あらせられ、當時私共の想ひ及ばなかつた御深慮を御持ちになり、大政を奉還して御親政の

道を開きたいとの御志望から、愈よ將軍職に御就きになる事になつたのである。

私は此際ほど困つたことはない。これまで倒さう〳〵と心懸けて來た幕府であるから、假令是まで仕へて來た君――君といふのは少し穩かでないかも知らぬが――が將軍になられたからとて、オメ〳〵幕府に仕へて幕吏となるわけにもゆかず、さればとて今更浪人して見た處で仕方が無いのみならず、甚だ危險である。いつそ割腹して相果てやうかとまでに一時は思ひ詰めもしたが、それでは犬死になるからと暫く苦痛を忍んで、幕府の陸軍奉行支配調役といふものに仕官したのである。その中、慶喜公の令弟德川民部大輔といふ御人が、佛蘭西で開かれる千八百六十七年の博覽會に、我が國から大使として赴かれる事になり、引續き同國に留學せられる事となつた。其際私は隨員として佛蘭西留學を仰付かる事になつたが、此時ほど又私の嬉しく感じたことは無い。これで進退に谷まる憂も先づ無くなつたと思ふと、實に嬉しかつたのである。慶應三年の正月三日に京都を出發し、佛蘭西郵便船のアルヘー號で横濱を出帆したのが正月の十一日である。

◎靜岡に商法會所を起す

私の佛蘭西に參つてから後の慶應三年十月十四日、將軍の慶喜公は愈々大政を奉還せられて、御親政といふ事になつたのであるが、速に歸朝せよとの命があつたので、漸く佛蘭西語は文法書の一つも讀めるか讀めぬぐらゐに過ぎなかつたに拘らず、遺憾ながら止むなく歸朝することになり、明治元年の九月佛蘭西を出發して、日本へ着いたのが十一月三日である。着いて見ると、國內の形勢は洋行前と全く一變して居り、同姓の澁澤喜作は榎本武揚氏と共に函館の五稜廓に立籠り、尾高長七郎は元年の夏に傳馬町の牢屋から出獄はしたが、既に歿して居る。朝廷に立つて時めいてる人々の中には、知己舊識といふものが全然ない。多年恩顧を蒙つた慶喜公は、駿河で御謹愼中の御身分であると知つては、新政府の役人になるのも甚だ心苦しいので、當時駿府と申した靜岡に退隱して一生を送ることにしやうと私は考へたのである。

佛蘭西に留學中多少見聞した所もあるので、敢て蹇然たる八簽しい理論の上から考へたのでは無かつたが、商工業を盛んにして、國を富ましし兵を强くするには、之に當るものに報酬を多く與へるやうにせねばならぬ。然るに小さな資本で商工業を營んだのでは多くの報酬を引き出す道がない。依て小資本を集めて大資本とし、合本組織の會社法で商工業を營まねばならぬも

のであると思ひつくに至つた事は、前章にも既に申述べた如くである。靜岡に參つてから此の意見を藩の當路者等に話して聞かせると、幸にそれが容れられて、當時新政府で發行した紙幣を廣く全國に通用さする目的で各藩に貸付けられた金額の中、恰度五十三萬兩だけが靜岡藩にあるから、それと民間よりの資本を寄せ集めて、私に一つ會社を經營て見たら如何かとの相談になつたのである。明治二年の春、私は愈々それを引受けて、靜岡の紺屋町に事務所を置き、商法會所といふものを起して、商品抵當の貸附をしたり、鯨粕、乾鰯等の肥料類を買入れて農民に賣つたり、又米の賣買等の取扱をやつたのであるが、其當時の商法會所は、今日でも湖月といふ料理屋になつて其跡が殘つてゐる。處で明治二年の十一月二十一日に、太政官から急に私へ御召狀があつた。

私には素より新政府に仕官をしやうとの意が更に無かつたものだから如何かして御斷りをしたいものと思ひ、藩廳より御免を蒙つて出京を辭するやうに取計つてもらひたいと、藩の大久保一翁氏まで願つて見たが取あげられない。又慶喜公なども傍から御口添で懇々私を諭され、この際そんな事をしては、靜岡藩が有爲の人材を惜んで朝旨に悖つたことにせられるからといふ仰せなので、私も止むなく出京はしたが、その時には當路の方に面會して御免を蒙つて歸藩する積であつたのである。

◎大隈重信の八百萬の神論

十二月初旬東京に着いて、任官を勸められた時に如何にして斷らうかと、一ト晩十分に熟慮してから、其頃大藏大輔であつた大隈重信伯に遇つて見ると、一地方に引つ込んで居つてはとても志の行はれるもので無い、志を行はんとするには、全國に勢力の行き渡る中央政府に這入る方が可いと、色々に說き聞かせられたのである。其時大隈伯は、八百萬の神達が天の安の河原に神つどひにつどひ、神はかりにはかるやうにして、これからの新政を行つてゆくのだと盛んに論談せられて、從來幕人に對しては、何れかと云へば、私の方から意見を話して聞かせることになつて居つた所を、大隈伯からは私の方が反對に諄々と話して聞かされるわけになり、大隈伯の八百萬の神達論で吹き飛ばされてしまつたものだから、私も近頃の言葉にいふ一寸面喰つた形で、遂に斷りきれず、大藏省租稅正といふ職を仰付けられる事になつたのである。

愈々任官の御受を致して、二三日大藏省に出仕して見ると、省内は徒にガヤ〳〵騒々しくして居るばかりで、仕事が些つとも捗つて居らぬ模様である事が知れたのである。これでは折角の八百萬の神達も、神はかりはかるわけには參るまいから、宮の組織を整然と設くる必要があらうと大隈伯まで申入れる事に致すと、大隈伯も恰度其心があつたので、改正掛といふものが大藏省の中に置かれることになり、私も其一員となつて、職制が從來、卿、輔、丞、佑などに別けてあつたのを、更に細かく分けて改正する事や、度量衡、驛傳法、幣制、鐵道等の事までも、この大藏省の改正掛に於て評議するに至つたのである。

それこれする中に明治四年となり、大藏大輔であつた大隈伯は參議に轉じ、井上馨侯が其後を襲うて大藏大輔になられ、明治五年には私も大藏少輔事務取扱になつたのであるが、明治六年五月三日種々の事情から官を辭して民間に下り、孔夫子の論語に說かれてある教訓によつて、實業の振興を計らうとする決心を固め、以來官に就き治者の位置に立つ念を、全く絶つたのである。然し大隈伯、井上侯及び故伊藤博文公の三人は、右の如き關係より、其後も私の親しくした先輩である。

後年になつてからも、私は屢々官に就くのを勸められたもので、曾て井上侯が內閣を組織せられるから、私に大藏大臣になれと伊藤公から勸められたが、私の決心を披瀝してお斷りした。殊に明治三十四年故伊藤公が內閣を組織せられる際には、是非大藏大臣になるやうにと勸告せられたのであるが、この時も斷じて御免を願つたのである。それでも却々聽かれさうに無かつたので、そんなら止むを得ぬ次第故、一應銀行と相談の上、銀行が若し私の大藏大臣になるのを承諾ならば、忍んでも爲りませうと申上げ、銀行から御斷りをするやうにしてもらつたほどで、論語にある孔夫子の教訓によつて實業を經營し、實業界に身を終らうといふのが、明治六年以來今日まで一貫して變らぬ私の志である。

孝弟は仁を爲すの本なり

◎孝弟と三省との功德

談話が甚だ餘談に亘つたが、これから猶ほ論語學而篇の章句に就て、處世の實際上に感じたことを些か申述べることにする。

有子曰。其爲レ人也孝弟。而好レ犯レ上者鮮矣。不レ好レ犯レ上。而好レ作レ亂者。未二之有一也。君子務レ本。本立而道生。孝弟也者。其爲レ仁之本歟。（有子曰く、其人となり孝弟にして上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして亂を起す者は未だ之れあらざる也。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なるものは夫れ仁を爲すの本か。）

有子は孔夫子十哲の一人では無いが、論語の序文にも、論語は有子と曾子との門人の手によつて編まれたもの故、孔子の御弟子の中でも、有若と曾參とには特に「子」の敬稱を附し、有子、曾子と論語の中に書かれてあると記せられてるほどで、有子の言には敬重すべきものが多く、私は頗る之を悅ぶものである。却說人間は如何に智慧があつても、人情に惇樸な所が無いと、兎角惡い事を爲るやうになり勝のものである。故に私は他人を賴んで使ふにしても、智慧があるよりも、人情に惇樸で、我が家族に對し孝弟の道を盡す親切な心のある者を、力めて採ることにして居る。孝弟の道を辨へ親兄弟に親切な人でも、仲には惡い事をする者が絕無であるとは云へぬが、さういふ人は鮮いものである。素より上を犯す如き事は甚だ稀である。上を犯すを好まざる者は亂をなすといふ如き事は「未だ之れ有らざる也」で絕對に無い。隨つて人

情に惇樸な孝弟の道を辨へた人々を集めて事業を經營すれば、ゴタ〳〵なぞの起る心配は、まづ以て稀れであると云へる。

曾子曰。吾日三省二吾身一。爲レ人謀而不レ忠乎。與二朋友一交而不レ信乎。傳不レ習乎。（曾子曰く、吾れ日に三たび吾が身を省る。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。傳へて習はざるか。）

曾子は孔夫子の御弟子中でも、私の甚だ氣に入つて居る人物であるが、私は曾子の玆に說かれてある如く、一日に三度我が身を省るといふほどまでには參らなくても、人の爲に忠實に謀つてやらねばならず、友人に對しては信義を盡さねばならず、又孔夫子より敎へられた道を閑却せず、常に修めて行かねばならぬものであるといふ事を、忘れずに心懸けて居る。當今の人には此心掛けが不足な樣である。人の爲に忠實に謀り、友人に信義を盡くし、聖人の道を修めるに汲々としてさへ居れば、人は怨みに遠ざかる事が出來て、決して他より怨まるゝものでは無い。私が御訪問を受けさへすれば、誰彼にでも御面會し、隱し包む所なく意見を申述べるのも、この章句を些か身に體して行ひたいからの事である。「傳へて習はざるか」との句を

「他人に聖人の教を傳へて置きながら、自分では之を修めぬやうなことが無いか」との意味に解釋する人もあるが、矢張「他より教られて居りながら、たゞ聞いたのみで、之が實行を怠つてるやうな事は無からうか」といふ意味に解釋するのが宜しからうと思はれる。

◎禮と位とは如何なるものぞ

有子曰。禮之用。和爲レ貴。先王之道斯爲レ美。小大由レ之。有レ所レ不レ行。知レ和而和。不二以レ禮節ヒ之。亦不レ可レ行也。（有子曰く、禮の用は和を以て貴しとなす。先王の道斯れを美となし、小大之によ。る。行はれざる所あり。和を知つて和するも、禮を以て節せざれば亦行ふべからざる也。）

玆に有子が曰はる〻禮とは、普通の言葉に於ける禮と其意味を異にし、頗る廣い意義の禮を指したもので、その中には、禮記にある禮を總て含んでるものと觀るべきである。隨つてこの句にある禮の一字中には、周の刑制のことも亦含蓄せられてあるのだが、禮の精神が和にあるのを忘れては禮が禮にならず、却つて之がお互に疎隔する原因になつてしまふものである。刑の根本なぞに於ても、和を以て精神とし之を執り行ふことにせねばならぬものである。然し又和が餘りに過ぎると、互に狎れて却つて不和となり、世の中の秩序を紊すことにもなるから、

そこは禮を以て之を節して參らねばならぬもので、中庸を得たる所に眞の和が在るのである。

有子曰。信近レ於レ義。言可レ復也。恭近レ於レ禮。遠二恥辱一也。（有子曰く、信、義に近ければ言復むべし。恭、禮に近ければ恥辱に遠ざかる。）

如何に信は重んずべきものであるからとて、不道理な約束を仕て置いて之を履行するといふのは宜しくない事である。道理に適つた正しい約束であればこそ、玆に始めて人間は之を飽くまで履行せねばならぬといふ信を生じて來るものである。然らずして、義に近づかざる事でも何でも信を立て〻約束を守らねばならぬものだといふことになれば、泥坊をする約束でも何でも履行せねばならぬといふわけになる。過日も興信所員の訪問を受けたから、能く此の事を御話して、正しい約束を重んずる信の念を盛んにするやうにせねばならぬものであると申述べた次第である。

また恭虔も結構な事ではあるが、禮を以て節せずに其度を失するやうになれば、卑屈となつて恥辱を受け、その上、姦であるとの譏をさへ受けねばならぬやうになる。處世の實際に臨んで、是等の點は何れも深く注意すべきものであるから、有子は此の章句にある如く說かれたの

である。

◎學者に對し刺戟となる

私のやうな學問も無い者が、論語に就ての談話を致すのは、世間の或る一部からは、澁澤は之によつて美名を賣らんとして居るのだらうなぞと取沙汰せられぬとも限らぬが、私には美名を得ん爲に論語を擔がうとする如うな心事は微塵も無い。又素より學識に乏しい私の事ゆゑ、論語にある字句の說明や意義の解釋などで、學者諸先生に追ひつかうとしても、爾れは到底能きぬ業である。然し私は決して空理空論を御話し致しはせぬ、總て實地に行つて來て、處世上に益を得た點のみに就き申述べるのである。

昨今は學者先生方の中にも、末松謙澄博士とか、或は井上哲次郎博士とか、論語の事を種々と論議せらるゝ方々も大分多くなつたやうである。これには私共の如き全く無學の素人が、始終何の彼のと論語を御引合に出して談論した事も、多少與つて力あるものと信ずる。私の如き薄德なる者と雖ども、絕えず論語の談話をして居れば、それが多少でも刺戟になつて、學者先生方の深遠なる御議論となり、惹いては一般世間をして孔夫子の敎訓に心を寄せしむる事にもなるので、風敎の爲に幾分かの利益があるものと惟ふ。

◎今日に行はれぬ敎訓あり

論語の章句の中にも、時代の關係から今日の世には直に其儘適用し得られぬものがある。然し時代に關係の無い個人個人の行爲に就ての敎訓は、今日に於ても將た千載の後に於ても、萬古變る事なく直に實行し得らるゝものである。論語を讀む者は、豫め其敎訓中に、單に孔夫子御在世の時代に於ける時世を救ふ爲に說かれたものと、人として萬世に亘り守り行はねばならぬ事を說かれたものとの別があるのを心得置かねばならぬ。

私の論語に就ての談話は、空論を避け、主として孔夫子の敎訓を實地に臨み如何に守り行ふべきかの工夫と、之に伴ふ實驗とを申述べるのを主意とするから、私が自身で行はうとして見ても、薄德の爲め實行の能きぬやうな事は、前回にも一寸附け加へて御斷りして置いたやうに毫も隱し包む所無く、能きぬ達せぬと申述べて憚らぬのである。然し實地に臨んで論語にある敎訓を其儘實行し來つた所も亦少くないから、この點に就ての談話は、今の靑年子弟諸君に多少稗益する所があらうと信ずる。

◎仁とは何ぞや

仁に就ては孔夫子も論語の中に種々と説かれてあつて、處々に仁の文字が散見する。之を狹義に解釋すれば、人に對して日々親切を盡くしてやるといふやうな、簡單なる意味になつてしまふが、之を廣義に解釋すれば、論語雍也篇に御弟子の子貢が、「如有二博施一於レ民。而能濟レ衆如何。可レ謂レ仁乎。」（若し博く民に施し能く衆を救ふあらば如何。仁といふべき乎。）と孔夫子に御尋ねすると、「何事レ於レ仁。必也聖乎。」（何ぞ仁を事とせん、必ずや聖乎。）と答へられてあるのでも解るやうに、濟民の事即ち治國平天下が仁であるといふ事になる。又文章軌範に輯錄せられてある韓退之の一文原道の冒頭には、「博愛之謂レ仁。行而宜レ之之謂レ義。由レ是而之焉之謂レ道。」（博く愛する之を仁と謂ひ、行つて之を宜する之を義と謂ふ。之に由つて之く之を道と謂ふ。）とあるほどで、道德の大本になるものは亦仁である。仁は決して小さな私德にのみ限らるべきものでない。公德に於て又之を體する事にせねばならぬものである。

孔夫子は管仲の人物に感服して居られず、論語八佾篇に於て、「管仲之器小哉。」（管仲の器は小なるかな。）と稍罵らるゝ如き意味を漏らされたほどで、孟子の如きは弟子に當る公孫丑の問に

應じ、「子誠齊人也。知二管仲晏子一而已矣。」（子は誠に齊の人なり。管仲晏子を知るのみ。）と答へられ、汝は齊の生れで同國故、兩人を豪いと思ふかも知らぬが、管仲や晏子は大して豪い人物で無かつたぞと譏されて居る。然し管仲の社會上盡した功は孔夫子も之を沒せられず、憲問篇に於て「微二管仲一。吾其被レ髮左レ衽矣。」（管仲無かつせば吾れ夫れ髮を被り衽を左にせん。）と管仲が風俗改良に致した功を頌へ、「如二其仁一。如二其仁一。」（その仁に如かんや、夫の仁に如かんや。）と、天下を統一し風教を興した管仲の働きを、仁であると賞せられて居る。之によつて見ると、治國平天下の道も亦仁の中であることが愈々明かになる。

◎商工業に於ける仁の道

孔夫子の時代は、今日の如く商工業の盛んな時代で無かつたものだから、論語の中にも、孔夫子は商工業を營むに當つての實地の方法、即ち如何にして商品は作り又賣るべきものか、商業道德とは如何なるものであるか等の細節に亘つて毫も說かれて居らぬ。然し仁は既に道德の大本で、人と人との相交はり相接するにも、又國家を治めて天下を平かにするにも、皆仁が本になるものであるとせば、實業に於ても仁が本にならねばならぬ筈である。政治にも仁が必要

各個人日常の交際にも亦仁が必要であるものなら、獨り實業にのみ之が必要で無いといふ筈があるべきで無い。

眞正に仁を行はうとすれば、國の政治も改善し、風俗も改良して行かねばならぬ事になるのだが、それは誰でも力を盡しさへすれば直ぐに成るといふわけのもので無い。それ〴〵の順序がある。然し國民が皆私德と共に又公德を重んじ、實業にも其意を以て當るやうにすれば、仁が自然と行はれて、國家の品位を高め得る事になる。私は會社を經營するに當つても、單に其衝に當る當事者が利するのみでは可けない。勿論當該會社の利益を謀らねばならぬが、同時に之によつて國家の利益即ち公益をも謀らねばならぬものと信じ、今日まで其方針で萬事に處して來た積である。一に孔夫子が論語に說かれた廣義の仁を實地に行はんとするの意に外ならぬ。仁には又義の伴はねばならぬものである事は、既に申述べ置いた通りである。

◎巧言令色と直言との利害

巧言令色鮮矣仁。（巧言令色鮮し仁）

これも學而篇にある句だが、什麼しても心に僞りのある者は、直言することの能きぬやうに

なるもので、他人の惡い所を見ても、之を直言せずに、言を巧にし色を善くして其人に接することになる。斯くの如き巧言令色の人と雖ども、勿論仁のない私德公德を無視する者ばかりとは限らぬ。故に孔夫子も絕對に無いとは仰せられずに「鮮矣」と曰はれて居る。然し大體の上から觀れば、子路篇にも、「剛毅木訥近レ仁。」（剛毅木訥は仁に近し）と說かれてある程で、巧言令色の人よりも、剛毅朴訥、直情徑行、他人の惡を見れば之を其儘に棄て置かず直言するものに、私德公德を重んずる人が多いやうに私は思ふのである。直言は素より結構の事に相違ないが直言するに就ては能く時と場合とを稽へ、又直言するに就ての形式にも注意せねばならぬものである。何でも他人の惡を見つけ次第、直に之を包む所無く無茶苦茶に言つてしまひさへすれば、それが仁の道に適ふものだと思はゞ甚だしい心得違ひである。是に於てか孔夫子も他の處では、「發いて直とする之を暴といふ」と戒められてあるほどで、處かまはず他人の弱點を擧げ、之を衆人の目前に曝露したりするのは、仁に近い剛毅朴訥といふよりも、寧ろ禮を知らぬ亂暴の極といふべきもので、これは血氣に逸り易い青年子弟諸君の大に愼まねばならぬ點である。巧言令色と禮とを混同する事の惡いやうに、徒に他人の非を摘發して直言するのも、亦惡い事で

ある。

◎三省と記憶力の增進

學而篇に曾子が說かれて居る日に三省せよとの敎訓に就ては、前にも一寸申述べ置いたが、これは單に品性の涵養上に利益があるばかりのもので無い。私の經驗によれば、記憶力を增進する上にも、少からぬ効がある。一日の仕事を終つて床に就いてからでもよいから、その日に如何な事をして來たかを、靜に想ひ回す事になれば、若し他の爲めに謀つて忠ならざりしことや、友人に對して信義の足らなかつた事、乃至は又他人にのみ道の守るべきを强ひて、自ら修むる所の足らなかつた事なぞ、アリ〳〵と皆心に浮んで來て、今後斯る過ちを再びせぬやうにとの氣を起し、身を慎む上に無論大効がある。同時に又その日にあつたことが一々記憶の上に展開されて來る爲に、之を順序よく心意の中に揃へて、一目に檢閲する事にもなり、深い印象が腦に殘つて自然と容易に忘れ得られぬものになる。

三省の法は、斯く記憶力を增進する上にも効のあるもの故、假令德性修養の爲めで無いにしても、飯櫃床に這入つてからとか、或は又翌朝になつてから、兎に角自分が一日にした仕事に

就て考へて見るやうにしなさいと、私は時折私の子女達にも申聞かせるが、さて實行は却々六ケ敷樣子である。然し私は曾子の所謂三省の實行を、是非今の青年子弟諸君に御勸め致したいのである。

◎記憶强健なる所以

世間では、私が性來、非凡の記憶力を持つてでも居るかのやうに噂せられるが、私とて別に非凡の記憶力があるのでも何でも無い。たゞ曾子の所謂三省の法を實行して、假令三省とまでは行かぬにしても、一日の仕事を終つて愈よ寢に就くといふ前か、或は翌朝に、一度心意の中に、一日中にあつた事を總て再び想ひ浮べて顧ることにして居るからで、それが多少深い印象になつて、心意に殘るだけの事である。

假令ば昨日(大正四年六月廿日)は事務所へ第一銀行の佐々木勇之助氏が尋ねて來て、樓上で種〻銀行の業務に關する相談を遂げ、晝食を共にし、それから事務所の家屋取擴げに就て屋外に出で、敷地の模樣を檢分し、決定すべきを決定したが、來客の數は總て十四人あつて、一々之に接し、種々話す中に、末には雜談となり、四方山の世間話に移り、遂に揮毫を餘儀なくせら

れて、二十枚ばかりに惡筆を揮ひ、歸宅したのが夜の十時過であつた――斯う今朝（六月廿一日）になつてから、一度昨日あつた事を繰返して心意の中で讀んで置くと、そのことが不思議に永く忘れられなくなつてしまふものである。記憶を強くするには、複雜した記憶法を研究するなどよりも、曾子の所謂三省を實行するのが何よりである。

◎行つて餘力あらば文を修めよ

子曰。弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆親仁。行有餘力。則以學文。（子曰く、弟子入つては則ち孝、出でては則ち弟、謹にして信、汎く衆を愛して仁に親づき、行つて餘力あらば則ち以て文を學べ。）

仁は前にも申述べた如く、道德の大本であるが、之を實地に行ふに就ては、如何に致すべきであるかといふに、玆に孔夫子が敎へられて居る如く、まづ手近い所から始めて、家にあつては父母に孝を盡くし、外に出ては朋友等に對し盡くすべきを盡くし、何事にも愼み深く、信義を重んじて僞らず、如何なる人に對しても愛情を以て接するやうにしさへすれば、それが仁になるのである。かく內外に對し盡くすべきを盡くして猶ほ餘力があらば、文卽ち文字の上の學

問をせよといふのが孔夫子の敎訓である。

「行ひ餘力あらば則ち以て文を學べ」との此の句は、大に味ふべきもので、內外に對し、我が盡くすべき道を盡くしもせずに、徒に文字の學問ばかりをしても、その人は實行の伴はぬ文字の人になつてしまひ、立派な人とは云ひ得られぬ事になる。然し當今の靑年子弟中には、實行に努めずして、行ひ餘力あるに非ざるに、文を學ぶことにのみ專らならんとする弊が無いでも無い。これは大に戒むべき點であらうと思ふが、玆に揭げた一章は、日常實地の行ひに就て、孔夫子の遺された敎訓の中でも根本的のもので、論語の骨子であると云へぬでも無い。

◎家庭圓滿の本は無邪氣

子曰。詩三百。一言以蔽之。曰。思無邪。（子曰く、詩三百一言以て之を蔽へば、曰く思ひ邪無し。）

これは爲政篇にある章だが、五經の中の詩經は、其昔天子が諸國の風俗民情を知つて施政の參考に供せんとし、寄せ蒐められた民謠や其他の詩篇より成つたものである。孔夫子の時代には、それが三千餘篇ばかりあつたのを、孔夫子が刪修して三百十一篇に約められ、更に秦の始皇帝が書を焚かれた時に、又その中から六篇だけ散逸してしまひ、現に三百五篇のみが殘つて、

今の詩經を作して居るのである。

詩經開卷の第一には、「關々たる雎鳩は河の洲に在り、窈窕たる淑女は君子の好逑」とあるが、これは周の文王が大姒と仰せらるゝ妃を納れられた時に宮人の謠つた詩で、君子が容色の美しい心情の貞淑な起居の床しい淑女を配偶にせらるれば、家庭圓滿和氣靄々であるとの意に外ならぬ。然も之が詩經全篇の骨子で、一家和合の秘訣は、家族のものに邪念の無い事である。家庭のものに邪念が無ければ、自然と家が齊ひ、家が齊へば國も治まり、天下も平かになつて、廣義に於ける仁が行はれることになる。故に人は殊に家にある時に、小兒らしく無邪氣になつてることが必要である。

不惑と天命とに對する感懷

◎七十歳にして漸く不惑

子曰。吾十有五而志レ于學。三十而立。四十而不レ惑。五十而知二天命一。六十而耳順。七十而從二心所レ欲不レ踰レ矩。（子曰く、我れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十

にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に從つて矩を超えず。）

漸次爲政篇に移つて申述べるが、井上哲次郎博士も論ぜられて居るやうに、孔夫子は、昨今の言葉で申す却々の活動家で、寸時も息む所なく努力し修養に勉められたもの故、殆んど十年毎に思想の狀態が一變し、七十歳になられた頃には、如何に心のまゝに行つても、それがチヤンと人間の履むべき道に合致し、決して規矩を超えるやうなことの無かつたものと思はれる。然し私の如うに非德なものは、却々さうは參らぬ。既に七十餘歳に相成つた今日でも、若し心の欲するまゝに行ふやうにすれば、依然規矩を超えて亂れる事になる。幸に私が曲りなりにも、兎に角規矩を超えた行ひに陷らずに濟むのは、一に克己の賜である。私が克己即ち己れに克つ事に力めて私の心を制するやうにしなければ、決して今日の私であり得るもので無い。克己は實に偉大なる力である。

然し七十餘歳になつた今日、孔夫子が僅に四十歳にして達し給ふた不惑の境涯にだけは、私も何うやう斯うやら達し得られたやうに思ふ。今より十五六年前までは、種々他人の御說を聞くと、成る程それも左樣だと能く惑つたものであるが、今日ではまづ斯る惑を起さずに濟む。

一例を申述べると、國民に信念を起さするには神道に限るとの説を私に御聽かせ下されて、神道さへ信ずれば、國民道德は自然に高まるものと御説きになる方もある。十四五年前ならば、之を聽くと或は左樣かと思はぬでもなかつたらうが、早や七十餘歲になつて、處世の實地を久しく經驗して參つた今日では、國家内外の事情も參酌せねばならぬものと思ふから、直ぐ夫れに心を動かすといふやうな惑は起らぬのである。

◎二十四歲にして立ちしに非ず

私の今日までに於ける經驗を談話すれば、十有五にして學に志したと丈けは、申上げて憚る所は無いが、三十にして立つたとは申されぬ。二十四歲の時に鄕里を出でゝ京都に赴いたのは、私が兎に角今日までに相成つた素地を作つたもので、その時に鄕里を出なければ、或は今日あるを得なかつたかも知れぬ故、お前は三十にもならぬ二十四にして、孔夫子よりも早く立つたのだと仰せらるゝ方もあるか知らぬが、あの時の私の心情を回顧て見ると、什麼しても立つたのだとは云ひ得ない。何れかと云へば間違つた行ひに出でたもので、今日の御時勢に相成つて當時の事を想ひ回らすと、天朝に對し奉り畏れ多く思ふほどである。

當時の考は唯無暗に過激なばかりで、自分の過激な意見が貫らなければ、死んでしまふといふに過ぎなかつたものである。然し死ぬと云つても、華嚴の瀧に投じた藤村操のやうに、自分一人が死んでしまふといふのでは無く、必ず道伴れを拵へ、自分の過激な意見を行ふのに邪魔立てをした者を殺して、一緒に死なうといふのであつたから、立つどころか、什麼しても間違つた行に出でたものと云はねばならぬ。

◎天命を知らぬも一貫の精神

孔夫子は五十にして天命を知り、天の命ずる所を覺つて行はれるやうになつたと曰はれてるが、私は幾歲になつた時から天の命ずる所を知り得たなぞとの高言は致し得ぬものである。然し慶喜公や當時靜岡藩を預つて居つた大久保一翁氏などに、明治政府の召に反いては却て德川家を不利な破目に陷らしめることになるからと說かれた結果、一時明治政府に仕官したこともあるが、兎に角私は一度慶喜公に仕へて身を立てた身分のもの故、慶喜公が既に大政を奉還せられて、世捨人になられた上は、私も亦主從の義を守り、官途に就て政治向のことに關係致すまいと決心した精神だけは、佛蘭西から歸朝の明治元年以來、今日に至るまで一貫して毫も變

らぬのである。私の精神は舊主家たる德川家に對する情義を全うしたいといふのにある。

◎德川民部大輔の爲に二萬圓

前回にも申述べ置ける如く、私が佛蘭西に留學するやうになつたのは、民部公子に隨伴しての事であつたが、當時私の外にも同行した留學生があつて、民部公子及び一行留學生の費用としては、毎月五千弗ばかりを支給せられて居つたものである。私は當時理財のことに通じて居るからといふので、會計の衝に當らしめられ、民部公子御手廻りの家具調度等をも多く買ひ調へたが、明治元年一行歸朝の際には、買ひ求めた器具一切の賣拂と豫納借家料の回收等を、當時巴里にあつた帝國名譽領事の佛人フロリ・ヘラルドに一時委托して參つたのである。諸道具の賣拂代金と借家料の回收金とを合すれば彼是二萬圓ばかりになり、回送せられて來た處、維新の爲に政府が變つてしまつてるので、その二萬圓が新政府のものであるか、或は又民部公子に下げらるべきものであるかに就て隨分喧ましい議論が起つて、ゴタ〳〵したものである。

その時に私は態々靜岡から東京に出て、新政府當局に交渉し、佛蘭西に殘して來た諸道具や借家料回收金などは、假令明治政府になつてから現金にせられたにしろ、道具を買つたり借家

料を豫納した時の費額は、曩に留學中民部公子に支給せられた全額の中より、私なぞが御儉約を致させ申して支出したのであるから、何れも民部公子の私有財産である。依て佛蘭西より今回々送された現金は、當然民部公子に御下げになつて然るべきものであると主張し、その二萬圓ばかりを受取つて歸るやうにしたこともある。これなぞも、一に舊主家の德川家に盡くしたいとの精神から出たものである。

◎勝海舟とは同腹に非ず

そんなら私の精神は勝海舟伯と全く同一であつたかと云へば爾うでもない。私は勝伯が餘り慶喜公を押し込めるやうにせられて居つたのに對し、快く思はなかつたもので、伯とは生前頻繁に往來しなかつた。勝伯が慶喜公を靜岡に御住はせ申して置いたのは、維新に際し將軍家が大政を返上し、前後の仕末が旨く運ばれたのが、一に勝伯の力に歸せられてある處を、慶喜公が東京御住ひになつて、大政奉還前後に於ける慶喜公御深慮のほどを御談りにでもなれば、伯の金箔が剝げてしまふのを恐れたからだなどいふものもあるが、まさか勝ともあらう御人が、爾んな卑しい考を持たれやう筈がない。たゞ慶喜公の晩年に傷を御つけさせ申したくないと

の一念から、靜岡に閑居を願つて置いたものだらうと私は思ふが、それにしても餘りに押し込め主義だつたので、私は勝伯に對し快く思つて居なかつたのである。慶喜公の東京に御住ひならられたのは、伯の死なれてから後の事である。

◎勝に小僧扱ひにせらる

私の佛蘭西から歸朝した時は、勿論大政奉還後で、德川家へは七十萬石の藩を天朝から靜岡に賜はつたのだが、當時なほ榎本武揚氏の一隊が函館に籠り、一旗擧げて騷いでる頃であつた。神田の錦町に靜岡藩の役所があつたので、私は歸朝後其處で勝伯と屢々御會ひしたものである。

當時德川家が朝敵名義で懲罰にならずに濟み、靜岡一藩を賜はるやうになつたのも、畢竟勝伯の力である。又勝伯を殺さうとするものが幕臣中に數多くあるに拘らず、何れも伯の氣力に壓せられて近づくことが能きぬなぞと、伯の評判は實に嘖々として喧しいもので、私も亦當時は些か自ら氣力のあることを恃みにして居つた頃であるから、氣力を以て鳴る伯とは好んで會つたものである。然し當時の私と伯とは全然段違ひで、私は勝伯から小僧のやうに眼下に見ら

れ、民部公子の佛蘭西引揚には、栗本鋤雲のやうな解らぬ人間が居つたので嘸ぞ困つたらう、然しお前の力で幸ひ體面を傷けず、又何の不都合もなく首尾よく引揚げ得られて結構なことであつたなどと、賞められたりなどしたものである。

◎函館投軍を勸めらる

函館に籠つた榎本武揚氏以下舊幕臣の面々は、北海道を獨立さして置いて、それから其手にある舊幕府の軍艦に乘込み、大阪を衝かうなぞといふ考を懷いてたものである。當時これは必ずしも實行し得られぬと限つた空想でも無かつたので、恭順の意を表して居らるゝ慶喜公を首領に戴くわけにも行かぬ處から、折柄歸朝せられた水戸の民部公子を首領に擔がうと、函館の方からは切りに私なぞへも投軍を勸めに來たものである。既に民部公子及び私共の一行が上海に着した時にも、同地まで此事で出迎に來たものさへあつた。然し私は斷乎として斯る勸めに應じなかつたのみならず、民部公子にも之は應ぜられぬやうに申上げたのであるが、私が歸朝して神田錦町にあつた靜岡藩の役所で勝伯に御遇ひした時には、勝伯は、幕臣の中にも、まだ〳〵斯る間違つた考を起すものがあるので困る、然しお前は民部公子を爾んな者共に擔

がれぬやうにして呉れたので嬉しいなどと、私に申されたこともある。

私が函館に旗揚をした榎本氏の軍に投ずるのを勸められた時に之に應じなかつたのも、一に慶喜公の御意のある所に從つたに外ならぬもので、慶喜公に對して義を守ることだけは、終始一貫して參つたと申しても決して過言でなく、明治六年幸にして官を辭するを得てから以後は、斷じて政治に思を絶つたのである。是が若し天命を知るといふものならば、私も或は明治元年六月以來天命を知つた者と云へば云へるかも知れぬ。明治元年は私が二十七歳の時である。

◎賴山陽の文に感動す

敢て天命を知つたといふほどでも無いが、明治元年六月以來、舊主の德川慶喜公に對し情義を全うして終りたいとの一念より、假令一時は召されて已むなく新政府に仕へたことがあつたにしろ、全く仕官の念を廢し、政治方面に功績を擧げやうとの望みを全然絶つてしまひ、明治六年以後は、如何に勸められても官に就く事を斷然御斷りして今日に至つた次第は、これまでにも縷々申述べた通りであるが、私が斯く決心するに當つて、非常に私を感動さした有力なる一つの刺戟がある。

私が明治元年佛蘭西より歸朝致してから後當分、その駿府と申した靜岡に隱退して居つたことは、これも既に申述べて置いてあるが、その靜岡に引つ込んでる時に、私は賴山陽の書いた甲州の貞女おまさに就ての文を讀んだのである。

◎貞女の心事

山陽の文に據ると、この貞女おまさは夫に死に別れてから、親類緣戚の者等より再緣を勸められたのだが、貞女兩夫に見えずの義を確く守り、斷じて之に應じなかつた。然るに再緣を勸める方の者も却々熱心で、爾んなら寡婦を貫して操を立てるが可いと直ぐは贊成して呉れず、飽くまでおまさに再緣を迫り、然もそれが何れも、おまさの利益良かれと思ふ懇切心から出たものであるので、おまさも一概には之を却くるに忍びず、亡夫に對する貞操を全うすると共に、折角再緣を勸めて呉れる親類緣戚に對する情誼をも無にせず、玆に兩全の道を立てんが爲め自刎したといふのが、山陽の文の趣意であつた。

私は之を讀むや、將軍家に於かせられて既に政權を奉還し、私が舊主の臣たるを得ざるに至つた上は、猶ほおまさが其の夫と死に別れたのと同じやうなもので、私が新政府に仕官を勸め

られるのは、又恰もおまさが再縁を勸められるのと毫も異りが無い事と思つたから、私とてもおまさと同じ心になり、舊主に對する主從の義を全うする爲め、斷じて新政府の治下に官途に就くまいと決心したのである。そんならおまさの如く自刄して相果てたら可からうかといふに、それでは犬死になるので、私は官途に就かぬ代り、實業方面に働いて邦家の爲に盡くさうといふ氣になつたのである。當時私が山陽の文を讀んで感じた際の斯の感想を蕪文に綴つて、佛蘭西に同行した杉浦愛藏といふ知人の父が、先づ靜岡での漢學者であつた處より、此の人に見てもらつたが、非常に賞めて吳れて、その草稿は今でも猶ほ筐底に保存してある。その中發表する時機もあらう。

◎大久保利通に嫌はる

壯年の頃の逸話をした序であるから、餘談ながら一つ申述べて置くが、若い中は兎角何事にも卒直になり勝なもので、思ひ内にあれば色外に顯れ易く、遠慮なく思つたまゝを言うてしまふから、他人に嫌はれたりすることにもなる。然し永い中には他人も諒解して吳れるものである。私なぞも壯年の頃は隨分卒直で、思つたことは包まず憚らず、ドシ〳〵言うてしまふのを

例にして居つたので、大久保利通公には大層嫌はれたものである。

私は明治二年の暮新政府に仕官して大藏省に這入つてから、三年の暮までは主として大隈伯に使はれたのだが、四年の春には大藏大輔であつた大隈伯が參議に轉じ、大藏卿であつた伊達正二位も辭職されて大久保利通公が大藏卿になられ、大阪の造幣寮の頭であつた井上侯が大隈伯の後を襲うて大藏大輔に任ぜられ、以來私は主として井上侯に使はれる事になつた。

井上侯は頗る機敏の人で、見識も高く、能く私を諒解して下されたのみならず、又至つて面白い磊落な質で、私と一緒になつて樂む所謂遊び仲間にもなられたので、侯と私とは肝膽相照らす親しい間柄にまで進んだが、明治四年の八月、井上侯の大藏大輔の下に、私が大藏大丞であつた頃のことである。大藏卿の大久保公が一日突然に、陸軍省の歲費額を八百萬圓、海軍省の歲費額を二百五十萬圓に定めることにしたからとて、當時私と同列の大藏大丞であつた谷鐵臣、安場保和などを喚び寄せ、その可否を諮問せられた。當時は如何したものか井上侯は其の會議に參與しなかつたのである。

◎大久保に反抗す

新政府當時の財政狀態は、頗る不確實不統一のもので、歳入は約四千萬圓もあつたらうが、之とても明瞭でなく、歳出は殆ど握み拂ひと云つたやうな風を帶び、收納がありさへすれば何でもやるが、無い時には廢めて置くといふ如き實狀にあつた。私はこれではならぬ、如何しても財政整理を斷行すべきであると思ひ込み、種々苦慮して歳入の統計を作り、之に應じて歳出を調節せんものと私が大藏次官といつたやうな格で諸事工夫し、中村清行氏が專ら調査統計の任に當つたが、それの未だ出來上りもせぬ中に、約四千萬圓ばかりの不確實な歳入中から、陸海軍合して一千五十萬圓の經費を支出しやうといふのが、大久保大藏卿の意見で、之により私が折角工夫中の財政計畫を減茶々々にされてしまふ事になつたから、私もグツと癪に障り、大久保公の此の意見には反對せざるを得なかつたのである。

依て私は諮問會議の席上に於て大久保公に對し、自分の反對意見を述べたのであるが、總じて財政は「量レ入爲レ出」を以て原則とせねばならぬ、國家の財源が豐かになりさへすれば、「爲レ出量レ入」の方針を取るも、敢て妨げなきに至るやも知れぬけれど、當時は未だ斯る狀態に國家の資源が發達して居らぬ。然るに歳入の精確なる統計も未だ分明せざるに先ち、兵事は如何に

國家の大事なればとて、之が爲め一千五十萬圓の支出を匆卒の間に決するなぞとは以ての外のことで、本末顚倒の甚しきものである。宜しく統計が出來上り、歳入額の明白になつた後に於て徐ろに事の輕重を詮衡し、之に應ずる支出額を決定すべきであるといふのが、私の述べた意見である。

◎大久保怫然色を作す

總じて薩州人には一種妙な癖があつて、何か相談でもせられた時に、直ぐそれに可否の意見を述べると之を悅ばず、熟考した上に御答へするとでも申して一旦退引がり、翌日にでもなつてから意見を述べると、之を容れるといふやうな傾がある。薩州人であつたから、流石の大久保公にも矢張この癖があつた。

然るに私が卒爾として「量レ入爲レ出」の財政原則から說いて、諮問會議の席上直に公の意見に反對を表明したので、維新三傑の一人と稱せられるほどの偉い方ではあつたが、私と同列の安場とか谷とか、當時何れも五十以上の老大丞等が、大久保公の人格に稍々壓せられた氣味で、別に之といふ意見も述べず、唯々として贊意を表せるに拘らず、漸く三十を越したばかりの

最も年齢の若い私が、折角公が心に決定て居られた所に反對したのを聽かれて、小癪な奴だとでも思はれたものか、大久保公は怫然として色を帶び、「そんなら澁澤は陸海軍の方は如何でも關はぬといふ意見か」と私に詰問せられたのである。之に對し私は、「如何に私が軍事に通ぜぬとは申しながら、兵備の國家に必要であるぐらゐのことは心得て居る。然し大藏省で歳入の統計が出來上らぬ前に、巨額な支出の方ばかりを決定せられるのは、危險この上もなき御處置である」と、更に抗辯したが、他の大丞に反對意見のものが無かつたので、遂に大久保公の意見通りに決定せられてしまつた。

◎薩人の暴戻に憤る

私はその初め幕府を倒すのを志にしたほどのもの故、幕府を倒して出來た新政府に對して決して惡感を懷いてたのでは無いが、薩人が暴戻であるとの感は、多少あつたものである。然るに大正四年の今日になつても、當時私が持つて居つた「量レ入爲レ出」の意見は正當で、歳入の判然せぬ中から支出の方ばかりを決めやうとした大久保公の意見を誤謬つてると、私は猶ほ思つて憚らぬほどで、又誰に聞かしても當時の私の意見の方が正當であるのだから、大久保公が

「澁澤は陸海軍が如何なつても可いと思つてるのか」と、怫然色を作して私を壓しつける如うにして詰問せらるゝのを見ては、腹の蟲が承知せず、これも亦例の薩人の暴戻であるのだなと感じて、不快で堪らず、翌日直に辭表を提出しやうと決心し、その夜井上侯の許に相談に出かけることにした。私は大久保公を偉い人であるとは思つたが、何だか厭やな人だと感じたものである。大久保公も亦私を厭やな男だと思はれてたと見え、私は大變公に嫌はれたものである。

井上侯の許に辭職の相談に行くと、侯は懇々と私を諭し、「財政整理は追々實行するから、折角廢藩置縣の制をも布くことにした今日、せめては廢藩置縣の實が擧り、新政の一段落がつくまで留任せよ」と勸め、差當り大阪造幣寮の整理を行つて呉れぬかと賴まれ、十一月まで同地に滯在し、遂に私は明治六年に至る迄、不本意ながら官途にあつたのである。私も斯んな調子で壯年の頃は、一代の人傑であつた大久保公にさへ誤解されて嫌はれたものである。然し永い中には結局眞實の處が他人にも知られるやうになるもの故、青年諸君は此の邊の消息を能く心得置かるべきである。

孝に對する見解と接客の心得

◎孝は子に強ふべからず

孟武伯問レ孝。子曰。父母唯其疾之憂。（孟武伯孝を問ふ。子曰く、父母は唯だ其の疾を之れ憂ふ。）

子游問レ孝。子曰。今之孝者。是謂二能養一。至二於犬馬一。皆能有レ養。不レ敬何以別乎。（子游孝を問ふ。子曰く、今の孝は是を能く養ふと謂ふ、犬馬に至る迄、皆能く養ふあり、敬せずんば何を以てか別たんや。）

却説これから又論語の談話に移るが、孔夫子は玆に擧げた爲政篇の章句によつても明かなる如く、孝道の事に就て屢々説かれて居る。然し親から子に對して孝を勵めよと強ひるのは、却つて子をして不孝の子たるに至らしむるものである。私にも子女が數人あるが、それが果して將來如何なるものか、私には解らぬ。私とても子女等に對して時折、「父母は唯その疾を之れ憂ふ」といふやうな事を説き聞かせもする。それでも決して孝を要求し、孝を強ひるやうな事は致さぬことにして居る。親は自分の思ひ方一つで、子を孝行の子にしてもしまへるが、又不

孝の子にもしてしまふものである。自分の思ふ通りにならぬ子を、總て不孝の子だと思ふのはそれは大なる間違で、皆能く親を養ふといふ丈けならば、犬や馬の如き獸類と雖ども猶ほ且つ之を能くする。人の子としての孝道は、斯く簡單なるものであるまい。親の思ふ通りにならず絶えず親の膝下にあつて親を能く養ふやうな事をせぬ子だからとて、それは必ずしも不孝の子で無い。

◎父晩香の孝道論

斯る事を申述べると、如何にも私の自慢話のやうになつて恐縮であるが、實際の事故、憚らず御話しする。確か私の廿四歳の時であつたらうと思ふが、私の父は私に向ひ「お前の十八歳頃からの樣子を觀て居ると、什麼もお前は私と違つた所がある。讀書をさしても能く讀み、又何事にも悧潑である。私の思ふ所から謂へば、永遠までもお前を手許に留め置いて、私の思ふ通りにしたいのであるが、それでは却てお前を不孝の子にしてしまふから、私は今後お前を私の思ふ通りのものにせず、お前の思ふまゝに爲せることにした」と申されたことがある。

如何にも父の申された如く、その頃私は、文字の力の上から云へば、不肖ながら或は既に父

よりも上達であつたかも知れぬ。又父とは多くの點に於て不肖ながら優つた所もあつたらう。然るに父が無理に私を父の思ふ通りのものにしやうとし、斯くするのが孝の道であると、私に孝を強ひる如きことがあつたとしたら、私は或は却て父に反抗したりなぞして、不孝の子になつてしまつたかも知れぬ。幸に斯ることにもならず、及ばぬ中にも不孝の子にならずに濟んだのは、父が私に孝を強ひず、寛宏の精神を以て私に臨み、私の思ふまゝの志に向つて私を進ましめて下された賜である。孝行は親が爲して呉れて始めて子が能きるもので、子が孝を爲るのでは無く、親が子に孝を爲せるのである。

◎子に對する考

父が斯る思想を以て私に對して下された爲め、自然その感化を受けたものか、私も私の子に對しては、父と同じやうな態度を以て臨むことにして居る。私が斯く申すと少し鳴滸がましくはあるが、何れかと云へば、父よりも多少優れた所があつたので、父と全く行動を異にし、父と違つた所があつて、父の如くになり得なかつたのである。私の子女等は將來如何なるものか素より神ならぬ私の斷言し得る限りでないが、今の處では、兎に角私と違つた所がある。この

方は、私と父とが違つてた違ひ方と反對で、何れかと申せば劣る方である。私よりも劣るので私と違つてるのである。然し斯く私と違ふのを責めて、私の思ふ通りになれよと子女等に強ひて見た處で、それは斯く注文して強ひる私の方が無理である。私の通りになれよと私に強ひられても、私のやうになれぬ子女は什麼してもなれぬ筈のものである。然るになほ強ひて子女等を總て私の思ふ通りにしやうとすれば、子女等は私の思ふ通りになり得ぬばかりでなく、不孝の子になつてしまはねばならぬ。私の思ふ通りにならぬからとて、子女等を不孝の子にしてしまふのは忍ぶべからざる事である。

故に私は、子が孝を爲るのでは無い、親が孝を爲せるやうにしてやるべきものだといふ根本思想で子女等に臨み、子女等が總て私の思ふやうにならぬからとて、之を不孝の子だとは思はぬことにして居る。

◎客に接する二樣の見地

論語に就ての談話を申述べることにして置きながら、これまで御話致した所は、何れかと申せば、論語の章句に就てよりも、餘談の身の上話になつてしまつたやうな傾きがある。然しこ

れとても處世の大道と謂ふ題目の上から觀察へれば、必ずしも無益と申すものにも非るべく、多少は靑年子弟諸君の御參考にならうかと存ずる。又論語の章句を一々逐うて逐章講義を致すやうな事は、淺學の私には到底能きぬのみならず、之を聽聞きになる方でも興味が少からうと信ずる。依て今後も前回までの如く、論語の章句中で私を最も深く感動させ、また私の深く感銘して居るものをポチポチ拔いて、私の實驗を配劑ぜ談話致す事にする。

一體人が人と接するに當つて懷く心情には二樣ある。その一つは、何でも赤いものを見たら火事と思へ、人を見たら泥坊と思へと謂つたやうな調子で、過ふほどの人見るほどの人を、悉く皆自分に損を懸けに來た人、自分より何か盜んで行かうとして來た人、自分を欺く爲に來た人だと思つて接する心情である。今一つは恰度之と反對に、過ふほどの人見るほどの人を、總て皆誠意あるものとして遇し、自分も亦誠意を披瀝して之に接する心情である。人によつて客に接する法が斯く二つに別れる。

◎虛僞欺瞞の接客法

他人から何事か依賴せらるれば、十中八九までは依賴した方には利益になるが、依賴せられ

て之を引受けた當人には、多少とも損失が懸る事になるものである。損失とは必ずしも金錢上の損失を意味するので無いが、時間を損するとか、或は又直接自分の利益にもならぬ事の爲に特別の注意を拂つて、面倒を見てやらねばならぬといふ事になるものである。

又多くの人に接する中には、表面だけは如何にも敬虔を裝うて、所謂巧言令色、假令ば私が論語の談話でもすると之に相槌を打つて、至極難有さうに謹聽してゐるが、內心は侮蔑を以て私を見、「澤山も馬鹿な事ばかり曰つてる男だ、勝手に話さして置けば悅んでるから聽いてやるんだ」と云つたやうな心情で、外と內との違つてる方が無いとも限らぬ。更に一層甚しい邪な念を持つた人になると、那個人を一つ旨く騙して之を煽てあげ、自分の利益を謀るやうにしてやらうなぞと、計略まぬとも限らぬ。澤山の人の中には、斯る宜しからぬ性根の力も尠くないので、遂に赤いものを見たら火事と思へ、人を見たら泥坊と思へといふ如き諺までが、出來るやうになつたものと思はれる。

然し赤いものを見さへすれば、總て之を火事と思ふやうに、見るほどの人を悉く泥坊と思つて接することになれば、自分の心情にも亦誠意が無くなり、那個人は己れを瞞しに來たのだ

から、瞞されぬやうに一つ這個邊からも其裏を搔いてやれと、僞に接するに僞を以てし、巧言令色を迎ふるに巧言令色を以てするやうになる。斯く互に瞞し合つて背後で舌を出してるやうにでもなると、世の中は全く治まりが着かぬ事にも相成り、世道人心に惡影響を及ぼす事夥しく、世間の風潮が甚だ面白くないものになつてしまふ恐れがある。

◎澁澤は門戸開放主義

私は人に接し客を見るには、悉く之を泥坊と思ふが如き心情を以てせず、誠意を披瀝して客に接し、正心を體して人と會見する。決して疑ぐらずに、誠を以て總ての人を遇するのが、私の主義である。

世間には又客の來訪を受けても、之に接するのを頗るオツクウなものに考へて、始めて來訪した人などに對しては、力めて遇はぬやうにせらるゝ方々もある。殊に相當世間に名を成しでもした豪い方などになると、一層この傾きが甚しい。これは私が知人の宅を訪うてる際なぞに、親しく實見する所であるが、來訪者があるのを召使が主人に取次ぎでもすると、今日は忙しいから遇はれぬとか、何時遇へるか解らぬとか、乃至は又當分遇へる日が無いとかと、格別

に忙しい事や故障が無ささうであるのに、強ひて來客を斷り、何だか人に遇ふのを大變面倒な事にして居らるゝ方を見受ける場合が多い。少し名のある人は、成るべく客に遇ふのを避けやうとするのが、一般の傾向である。

然し私は既に前回までにも申述べて置いた如く、誰樣にでも、病氣とか止むを得ざる支障でも無い限り、決して御面會を謝絶せず、御來訪下さる方には必ず御目にかゝることにして居る。これは昔も今も變らず、明治四年或はそれ以前より今日まで實行し來つた所である。

孔子の人物觀察法

◎人物觀察法にも種々あり

斯んな風で、世間に多少名を成して顯れてる方々の中で、容易、簡便に來客に接せらるゝ御人は先づ少いやうであるが、大隈伯丈けは、稍々私と同じ御店の張り方で、來るものは拒まず、誰にでも之を引見して面談せらるゝやうに御見受け申すが、其他には私と同じやうな門戸開放主義の方が餘り無いらしく思はれる。私を訪問せられる方々の中には、私に交りを求められる

爲めの力もあれば、又不肖なる私の談話でも聽かうといふ御篤志の力もあり、又私によつて用便を達さうといふ力もある。實にいろ〳〵であるが、私はそれに對して何れも誠意を以て御應對申し上げ、正心を披瀝することに致して居る。私を御訪ね下さる多くの方々の中には、私が如何に誠意正心を以て其人に對しても、誠意正心を以て私に對して下されぬ方もあるか知れぬが、人間と申すものは不思議なもので、此方から誠意正心を以てすれば、不思議に先方も亦誠意正心を以て對して下さるやうになり、僞り得なくなるものである。

私は斯く誰樣にでも厭ふ所なく御面會し、誠意正心を以て御應對申上げ、交りを求められる御力に交り、談話を聽かうと仰せらるる力には不悉ながらも談話を致し、用便を達されやうとする方には、及ばず乍ら能きる丈けの御便宜を計るやうにはして居るが、其間にも私には又私で、私の人物觀察法といふものがあつて、御來訪下さる多くの方々に就て、一々識別を致す事にして居る。然し人物を識別若くは鑑別するといふ事は却々以て難澁しいもので、古人も人物觀察法に就て種々の意見を述べられて居る。

佐藤一齋先生は人と始めて會つた時に得た印象によつて、その人の如何なるかを判斷するの

が、最も間違ひの無い正確な人物觀察法なりとせられ、先生の著述になつた言志錄の中には、「初見の時に相すれば人多く違はじ」といふ句さへある。始めて會つた時に能く其の人を觀れば、一齋先生の言の如く多くは誤たぬもので、度々會ふやうになつてからする觀察は、考へ過ぎて却て過誤に陷り易いものである。始めて御會ひした時に、この方は大抵斯んな方だなと思うた感じには、いろ〳〵の理窟や情實が混ぜぬから、至極純な所のあるもので、その方が若し僞り飾つて居らるれば、その僞り飾つて居られる所が、初見の時にはチヤンと當方の胸の鏡に映つて、アリ〳〵と見える事になる。然し度々御會ひするやうになると、那的で無い這的であらうなぞと、他人の噂を聞いたり、理窟をつけたり、事情に囚はれたりして、考へ過ぎることになるから、却て人物の觀察を過まるものである。

又孟子は離婁章句上に、「存二于人一者。莫レ良二於眸子一。眸子不レ能レ掩二其惡一。胸中正。則眸子瞭焉。胸中不レ正。則眸子眊焉。」（人に存するものは眸子より良きは莫し、眸子は其の惡を掩ふこと能はず。胸中正しければ則ち眸子瞭かなり。胸中正しからざれば則ち眸子眊し。）と、孟子一家の人物觀察法を說かれて居る。即ち孟子の人物觀察法は、人の眼によつて其人物の如何を鑑別するもので、

心情の正しからざるものは何となく眼に曇りがあるが、心情の正しいものは、眼が瞭然して淀みが無いから、之によつて其の人の如何なる人格なるやを判斷せよといふにある。この人物觀察法も却々確乎した方法で、人の眼を能く觀て置きさへすれば、その人の善惡正邪は大抵知れるものである。

◎孔子の人物觀察法

子曰。視二其所一以。觀二其所一由。察二其所一安。人焉廋哉。人焉廋哉。（子曰く、其の爲す所を視其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ隱さんや、人焉んぞ隱さんや。）

初見の時に人を相する佐藤一齋先生の觀察法や、人の眸子を觀て其人を知る孟子の觀察法は共に頗る簡易な手つ取り早い方法で、是れによつても大抵は大過なく、人物を正當に識別し得らるゝものであるが、人を眞に知らうとするには、斯る觀察法では臻らぬ所があるから、玆に擧げた論語爲政篇の章句の如く、視・觀・察の三つを以て人を識別せねばならぬものだといふのが、孔夫子の遺訓である。

視も觀も共にミルと讀むが、視は單に外形を肉眼によつて見るだけの事で、觀は外形よりも

更に立ち入つて其奥に進み、肉眼のみならず心眼を開いて見る事である。即ち孔夫子の論語に說かれた人物觀察法は、まづ第一に其の人の外部に顯はれた行爲の善惡正邪を相し、それより其の人の行爲は何を動機にして居るものなるやを篤と觀、更に一歩を進めて其の人の安心は何れにあるや、其の人は何に滿足して暮して居るや等を知ることにすれば、必ず其人の眞人物が明瞭になるもので、如何に其の人が隱くさうとしても、隱くし得られるものでないといふにある。如何に外部に顯れる行爲だけが正しく見えても、その行爲の動機になる精神が正しくなければ、その人は決して正しい人であるとは謂へぬ。時には惡を敢てする事無しとせずである。又外部に顯れた行爲も正しく、之が動機となる精神も亦正しいからとて、若しその安んずる所が飽食暖衣逸居するに在りといふやうでは、時に誘惑に陷つて意外の惡を爲すやうにもなるものである。故に行爲と動機と滿足する點との三拍子揃つて正しくなければ、其人は徹頭徹尾永遠までも正しい人であるとは申しかねるものである。

◎祖先崇拜は溫故知新

子曰。溫レ故而知レ新。可二以爲一レ師矣。（故きを溫ねて新しきを知れば、以て師となるべし。）

兎角新しきを追へば、故きを忘れて沈着なる所なく、之に反し故事にのみ拘泥して居れば、新しきを取らずして因循姑息に流れ、固陋に傾き易いのが、萬人の陷る通弊である。青年子弟諸君は深く此の消息に注意し、新しきを追ふも故きを忘れず、故きを溫ぬるも進取の氣性を失はず、故きに就て新しきを學ぶやうにせねばならぬものである。

祖先崇拜といふことも、其精神とする所は、畢竟するに溫故知新に外ならぬもので、祖先の爲た偉業に就て學び、大に自ら啓發せられんとするにある。長上を尊敬せねばならぬといふ事も、是又溫故知新の一種で、自分より先きに此の世の中に出て此の世の中に働き、自分よりも久しい經驗のある人々に就て學び、新に進まんが爲めの資料を得んとする趣旨に外ならぬ。

◎大藏省改正掛の事業

私が新政府に仕官して後に、大隈伯の所謂八百萬の神々をして神はかりにはからしめる目的で設けられた大藏省の改正掛に於ては、私なぞ主として種々の提案を致したものであるが、その精神とする所は、一に孔夫子の論語に敎へられた溫故知新の義を體し、明治御新政の運轉を圓滑ならしめ、所謂「爲レ師」整然たる制度を立てんとするにあつたのである。改正掛に於て私

が發案した種々の改正事業の中でも、最も困難を感じたのは、從來租稅が現物卽ち米穀で納入せられて居つた制度を改正して、現金で納入せしむるやうに致さうといふのにあつた。

御一新後と雖ども、私が大藏省に入つた時は、まだ租稅が總て米穀によつて納入せられ、その納入せられた米を、官廳が官廳の手で船を艤裝し、之に積み込んで東京とか大阪とかの都會まで持ち出し、東京で申せば淺草藏前の米倉だとか、又大阪にも大阪で同じく官廳所屬の米倉があつて之に入れ、それから當時札差しと稱せられた御用商人に命じて、總て之を賣捌かしめ、漸く現金になつた處で、始めて國庫に現金が入るといふ組織であつたのである。

◎租稅現金納入制度の發案

然るに俄に米穀で租稅を納入する制度を廢し、總て現金で納めさせる事にすれば、地方の米穀產地では、租稅に向けるべき米穀を其地方で賣り捌いてしまふ事が困難な爲に、地方に於ける米穀の値段は、供給過剩で自然下落することになる。又東京とか大阪とかの都會では、從來の如く米穀がドン〳〵移入せられて來ぬので供給不足となり、米穀の値段が自然騰貴する事になる。隨つて都會と地方とで米穀の値段に非常な差を生ずるに至る恐れがあつた。

この心配を取り除かうとすれば、地方に於ける過剰米穀を、東京とか大阪とかの都會に移出して賣捌く事の能きるやうに、官廳が米穀運搬の世話を民間の爲に燒てやるまでにして、船なども準備せねばならぬといふ事情もあり、旁々現物納入を廢して現金納入に變ずる新租稅制度は、私の發案したものではあるが、却々實行が六ケしく、その中私も明治六年には官途を退くことになつたものだから、現金納稅制度は良い方法であると知られつゝも實施せられず、私の退官後明治七年に至り、故陸奥宗光伯が租稅頭となるに及んで漸く實施せられる事になつたのである。これによつて考へて見ても、如何に故例を壞さず新しきに進むといふ事が、困難のものであるかが知り得られるだらうと思ふ。

◎器ならざりし大久保利通

子曰。君子不レ器。（子曰く、君子は器ならず。）

孔夫子は、君子は器物の如きもので無いと仰せられてゐる。苟も人間である以上は、之を其技能に從つて用ひさへすれば、必ず其用をなすものであるが、箸には箸、筆には筆と、夫々其器に從つた用があるのと同じやうに、凡人には唯それぞれ得意の一技一能があるのみで、萬

般に行き亘つた所の無いものである。然し非凡な達識の人になると、一技一能に秀れた器らしい所が無くなつてしまひ、將に將たる奥底の知れぬ大きな所のあるものである。

大久保利通公は私を嫌ひで、私は酷く公に嫌はれたものであるが、私も亦大久保公を不斷でも厭やな人だと思つて居つたことは、前にも申述べ置いた如くである。然し假令公は私に取つて蟲の好かぬ厭な人であつたにしろ、公の達識であつたのには驚かざるを得なかつた。私は公の日常を見る毎に、器ならずとは必ずや公の如き人を謂ふものであらうと、感歎の情を禁じ得なかつたものである。

大抵の人は、如何に識見が卓拔であると評判せらるゝほどでも、其の心事の大凡は外間から窺ひ知られるものであるが、大久保公に至つては、何處邊が公の眞相であるか、何を胸底に藏して居られるのか、不肖の私なぞには到底知り得らるゝもので無く、底が何れぐらゐあるか、全く測ることの能きぬ底の知れない人であつた。毫も器らしい處が見えず、外間から人をして容易に窺ひ得せしめなかつた非凡の達識を藏して居られたものである。私も之には常に驚かされて、器ならずとは大久保公の如き人の事だらうと思つて居たのである。底が知れぬだけに又

公に接すると、何となく氣味の悪いやうな心情を起させぬでも無かつた。之が私をして何となく公を厭な人だと感ぜしめた一因だらうとも思ふ。

◎幕政廢止の意なかりし大西郷

西郷隆盛公は、是れも却々達識の偉い方で、器ならざる人に相違ないが、同じく器ならずでも、大久保公とは餘程異つた所のあつたものである。一言にして謂へば、頗る親切な同情心の深い御人で、如何にせば他人の利益を計ることが能きやうかと、他人の利益を計らう〳〵といふ事ばかりに骨を折つて居られたやうに私は御見受け申したのである。

かの山岡鐵舟先生が、江戸城からの使者で駿府の征東總督府を訪ひ、隆盛公に會つた時に、慶喜公を備前に御預けにしやうといふ提議に對し不承知を唱へると、公が山岡先生の情を酌み、即座に山岡先生の議を入れて、備前に御預けの事は廢めにしやうと快く一諾の下に引受けられたなぞは、全く隆盛公が凡庸の器で無く、深い達識のあつた、器ならざる大人物たるの致した所だらうと思ふが、畢竟するに、他人の利益を計つてやらう〳〵との親切な同情が深くあらせられたからの事であらうと存ずる。又私の觀る所を以てすれば、隆盛公には其初め幕府

政治を全く廢止してしまはうとの氣はなかつた如くに思はれる。

◎大西郷は賢愚に超越せり

西郷隆盛公も、德川幕末の制度組織では、到底今後の政治を圓滑に行つてゆかれるもので無い事には氣が付かれたに相違ないが、唯幕府に從來あつた御老中制度を廢止し、諸藩の新しい人材を年寄として召し集め、幕府政治を行つてゆきさへすれば、それで國政の改革を斷行し得られるものと信ぜられ、强ひて幕府を倒ふ必要が無いと考へられて居つたやうに思はれる。私が前にも申述べ置いた如く、一旦德川幕府が倒れても、誠に畏れ多い申し條だが、御親政の御代とならず、必ずや豪族政治になるものだらうと愚考して、一橋慶喜公が第十五代の征夷大將軍になられるのに反對したのも、實は隆盛公に德川幕府を潰してしまはねばならぬとの意志が無いものと看取したからの事である。

隆盛公の平常は至つて寡默で、滅多に談話をせられることなぞの無かつた方であるが、外間から觀た所では、公が果して賢い達識の人であるか、將た鈍い愚かな人であるか、一寸解らなかつたものである。此點が隆盛公の大久保公と違つてた所で、隆盛公は他人に馬鹿にされても

馬鹿にされたと氣が付かず、その代り他人に賞められたからとて、素より嬉しいとも悅ばしいとも思はず、賞められたのにさへ氣が付かずに居られるやうに見えたものである。何れにしても頗る同情心の深い親切な御仁であつて、器ならざると同時に、又將に將たる君子の趣があつたものである。

◎文雅な木戸孝允と器に近き勝海舟

木戸孝允公は、同じく維新三傑の中でも、大久保公とも違ひ、西鄕公とも異つた所のあつたもので、同公は大久保公や西鄕隆盛公よりも、文學の趣味が深く、且つ總て考へたり行つたりすることが組織的であつた。然し器ならざる點に於ては、大久保、西鄕の二傑と異る所が無く、凡庸の器に非ざるを示すに足る大きな趣のあつたものである。

勝伯とても素より達識の方で、凡庸の器でなかつたには相違ないが、大久保、西鄕、木戸の三傑に比すれば、何れかと謂ふに、餘程器に近い所があつて、器ならずとまで行かなかつたやうに思はれる。

其他伊藤公にしろ、山縣公にしろ、井上侯にしろ、松方侯にしろ、將た大隈伯にしろ、あれ

までに成られる方々の事故、何れも凡人と違ふ秀れた所のある人々であるに相違ないが、維新三傑の如く器ならざる方々なるや否や、之れは現下私から申述べるのを御遠慮申上げることにする。なほ是等の方々の外に、現下の政治界にも實業界にも、器ならざる大人物があるのは必定で、器ならざる大人物は、維新の三傑に限られたわけでないが、現在の人物に就て批評がましい愚見を述べるのは憚るべきことであらうから、申上げぬ事に致し、維新の三傑は流石に三傑と崇められるだけあつて、異つた所のあつたものだといふことだけを申述べて置く。

◎人を見るに細心なれ

人物觀察法に就ては、孔夫子が說かれてある遺訓に基き、その爲す所を視、その由る所を觀その安んずる所を察する視觀察の三法に依らねばならぬものである事を、既に前回にも申述べ置いたが、遇ふほどの人に對し、悉く視觀察の三つを遂げやうとすれば、勢ひ探偵吏が人に接する時のやうに細かくばかりなつてしまひ、甚だ面白くない。それよりも寧ろ佐藤一齋先生の言の如く、初見の時に得た印象で其人を相し、それで若し觀察の過まつてた事が後日に至つて知れても、その時はそれで致方の無いものと諦め、探偵吏の如き冷たい疑心を懷いて人を觀

す、總ての人に接するに虚心坦懐を以てするのが、何よりの上分別であるとの意見を持つてる方々も無いでは無い。それも確に一つの接人法であらう。

然し私としては、隨分念にも念を入れて、十分其人を觀察し得た積でありながら、後日に至り其人に意外の行動があるのを知つて、自らの不明を愧づることが屢々ある。人を觀るといふ事は實に難中の難で、決して容易なものでは無い。就中其人の安んずる所を察するのが、最も困難である。困難ではあるが、人の眞相を知らうとすれば、何よりも最も注意して、其人の安んずる所を察するのに力を致さねばならぬものである。其の安んずる所を知りさへすれば、九分九厘までは其人の全豹を知り得られる事になる。

◎意外の失策をする人

最近に於ても、私が世話をして或る會社に入れて置いた世話内の御仁が、意外の失態を曝露したのである。この人に就て私は十分觀察を遂げ、決して悪い事を爲るやうな方ではないと信じ、或る會社の主任に御世話したのであつたが、若し相場にでも手を出すとか、或は又悪い遊びでもするとか、酒でも飲むとかいふのなら、直ぐ私にもそれと知れたのだが、然し其人には

決して爾んな事は無かつたのである。

失態の曝露する前からとても、其人にたゞ少し家事上の締りが無いのでは無からうかと、薄々氣付かぬでも無かつたが、結局其人には安んずる所に間違ひがあつたので、別に相場をやつたの遊んだのといふわけでも無いのに、不義理の借金で首が廻らなくなり、遂に自分が主任をして居る會社の金錢を、私消したといふのでは無いが、或る形式で融通するやうになつて、辭職せねばならなくなつてしまつた。元來決して悪い人では無いのだが、斯る失態を演ずるに至つたのは、全く其の安んずる所を間違へ、相當の給料を得て居りながら、量入爲出の法を無視し、給料だけの生活に滿足しないで、これに家族の者の虚榮心なども多少手傳ひ、收入以上の分不相應なる生活を營み、喰ひ込みに喰ひ込みを重ね、之を埋めるに借金し、借金には利子を取られ、益々借金が嵩まつて來たのが、遂に此の不始末となつたのである。斯る失態を曝露するに至るべき人だと、私が初めから氣付かずに御世話をしたのは、畢竟私が其人の安んずる所を察する明が無かつた不明の致す所で、愈々失態の曝露せられた時に、私は實際其意外なるに驚いたほどである。私は最近に實驗した斯の一例に徵しても、人を觀察するには、其の安んず

る所を知るのが、何より最も大切である事を、切に感ずるものである。

知らざるを知らずとするは最善の處世法

◎理論と實驗との併行

子曰。學而不レ思則罔。思而不レ學則殆。（子曰く、學んで思はざれば即ち罔し、思うて學ばざれば則ち殆し）

玆に掲げた章句は、學理ばかりで事に處せんとしては失敗する、實驗ばかりに信頼して學理を無視しても同じく亦過失に陷り易いものであるといふのを、孔夫子が戒められたものと思ふ。

「罔」とは果して如何なる意の文字であるか、無學の私には之を正確に解し得る力も無いが、朱子集註に皇侃の説として、精思せざれば行用（即ち實地の應用）に至つて乖僻す、是れ聖人の道を誣罔するものだとある。依て私の愚存を以てして孔夫子の御考を忖度すれば、如何ほど理論上の學問ばかりしても、之を實地の經驗に照らして考察熟思する所が莫ければ、結局其の理論を實地に行ひ得ず、所謂論語讀みの論語知らずになつてしまふ、さればとて一にも一に

も經驗〳〵と經驗ばかりを楯にして、學術が教へて呉れる理論を無視するやうでも亦闇の中を提灯無しで歩くのと同じで、甚だ危險なものであるといふのが、此章句の意味であらうかと思はれる。「學」の文字が果して當今用ひらるゝ「學術」と同じ意義で、「思」の文字が又果して「觀察」と同意義であるや否やは、今俄に斷言しかねるが、斯く解釋しても然るべきものであらうかと存ずる。人間は兎角一方に偏し易い傾向のあるもの故、理論一點張にも流れず、文經驗一點張にもあらず、能く孔夫子の此の戒めをお互ひに服膺して、實驗により理論の及ばざる所を補ひ、理論によつて實驗の到らぬ所に達し實地に臨んで事をするに當り失敗を招かぬやうにしたいものである。

◎知らざるを知らずとせよ

子曰。由誨二女知レ之乎。知レ之爲レ知レ之。不レ知爲レ不レ知。是知也。（子曰く、由や汝に之を知ることを教へんか。之を知るを之を知ると爲し、知らざるを知らずと爲せ。是れ知るなり。）

孔夫子が御弟子の子路即ち由に教へられたる如く、知らぬ事を知らぬと謂ひ、知つた事だけを知つたで通すのが、智者のみならず總ての人の取るべき最善の處世法で、斯くさへして世に

處すれば、至極簡單に世渡りも能きるのであるが、さて實際に臨むと、それが却々困難で、知らぬ事でも知つたかの如く見せかけやうとするのが人の弱點である。それが爲め彌縫に彌縫を重ねねばならなくなつて、簡單にして濟ませる世渡りを、好んで複雜なるものにし、强ひて自分で自分を足も手も出ぬやうにしてしまひ、自繩自縛の羽目に陷るものである。知らざるを知らずとするのは、道德上のみならず、處世法としても至極便利な法故、青年諸君は須らく此の點に注意し、知らぬ事は飽くまでも知らぬで通し、決して自らを欺き、他人を欺かうなぞとの不所存を起さるべきでは無い。

◎大西鄕は僞らぬ人

維新の頃の人々の中で、知らざるを知らずとして毫も僞り飾る所のなかつた英傑は誰であらうかと申せば、矢張り西鄕隆盛公である。西鄕公は決して僞り飾るといふ事の無い、知らざるを知らずとして通した方であるが、その爲め又思慮の到らぬ人々からは、往々誤解せられたり、眞意が果して何れの邊にあるか諒せられなかつたりしたものである。これは一に西鄕公が至つて寡言のお仁で、結論ばかりを談られ、結論に達せられるまでの思想上の徑路などに就

き、餘り多く口を開かれなかつた爲めであらうかとも思ふ。

まづ西鄕公の容貌から申上げると、格幅の良い肥つた方で、平生は何處まで愛嬌があるかと思はれたほど優しい至つて人好きのする柔和なお顏立であつたが、一たび意を決せられた時のお顏は又恰度それの反對で、恰も獅子の如く、何處まで威嚴があるか測り知られぬほどのものであつた。恩威並び備はるとは、西鄕公の如き方を謂つたものであらうと思ふ。

◎大西鄕と豚鍋を圍む

既に申述べても置いた如く、私が元治元年二月京都に於て一橋家に出仕するやうになつた當時、初めは奧口の詰番を仰付けられたのだが、間もなく一橋家の外交部とも觀るべき御用談所の下役に任ぜられ、俗に周旋方と申すものになつて、諸藩より上洛する有志者や御留守居役などの間を往來し、その意見を聞いたり、諸藩の形勢を探知したりして暮らしたものである。其中に西鄕公の處なぞにも私は尋ねて參つて、屢々御目に懸つたのである。

その頃西鄕公と私とは素より非常な段違ひであつたが、私を前途少しは見込のある青年だとでも忍はれたものか、種々懇切に談話して下されて、時には、今曉鹿兒島名物の豚鍋を煮るか

ら、一つ晩餐を一緒に食ふて行かぬかなぞと勧められ、同じ豚鍋に箸を入れて御飯の御馳走になつて歸つたことも兩三回はあつた。西郷公の談話は、稀に慶喜公の御身の上にも及んで、慶喜公は確に人材で、諸侯中にあれほどの者は無いが、惜しい事に決斷力を缺いてるから、お前一人の力で如何するわけにも行くまいが、兎に角能く長上の者にお前より話し込み、慶喜公に決斷力を御つけ申すやうにするが可い、然らば敢て幕府を倒さずとも、慶喜公を頭に立てゝ大藩の諸侯を寄せ集め統率しさへすれば、幕府を今のまゝにして置いても、政治は行つてゆけるなぞと談られたこともある。之が前にも述べ置いた如く、私をして豪族政治を夢るに至らしめた所以である。

◎御議事の間の會議

維新前に於ける西郷公と私との間柄は、まづ概略斯んな次第であつたが、維新後私が新政府に仕官するやうになつてからも、種々のことで西郷公とは折衝する機會があつたものである。

今の皇城は御炎上になつてから後に御新築になつたものであるが、まだ炎上せずに、故の千代田城が其儘皇居に充てさせられてあつた明治四年の事である。舊西丸にあつた御能舞臺を修

理して之を御議事の間と名づけ、三條、岩倉、西郷、大久保、木戸、山縣、伊藤、後藤（象二郎）等の諸公が此の御議事の間に出仕し、明治新政の將來に關し會議することになつたのである。私は當時大藏大丞であつたが、杉浦愛藏と申す人と共に、御議事の間附の書記官の如き役に當る樞密權大史を兼務する事となり、御議事の間に出仕した。

この役目は一に大内史とも稱せられたが、素より小走り役の事であるから、議事に立ち入つて彼是れと議論を上下するわけには參らなかつたのである。然し文案を立てたり書類を整理したりするのが大内史の役で、時には間接に自分等の意見なども聞いてもらへたものである。

御議事の間では、君權は何處までゞ止め置くべきものか、輔弼の臣は何處まで其權能を行ふことの能きるものかなぞとの事も追々議せねばならぬといふので、兎に角大權に就て議する事であるから、一應之に關し陛下の御裁下を仰いで置く必要があらうと、大内史たる私に、之に關する奏請文案の起草を命ぜられた。

◎大西郷曰く戰爭が足らぬ

私は御裁可を仰ぐべき奏請文案を、命により兩三回起草して、御議事の間の方々の御覽に入

れたが、那的でも無い這的でもないといふので氣に入らぬ。確か四回目の時だつたと思ふが、後藤象二郎伯が筆を入れて、愈略々之に決する事に相成つた。其日は如何したものか西郷公が定刻より大層遲れて出仕せられ、御議事の間に見えられたのが、夕刻少し前の午後三時頃であつた。西郷公の同意を得ねばならぬからとて、既に決してある文案に同意して印判を捺すやうにと、他の諸公から申入れたが、西郷公は頗る不得要領の返事ばかりをせられ、「日本は維新後まだ戰をする事が足らぬ、もう少し戰を爲ぬと可かぬ、そんな事は己れは如何でも可い」と曰はれて、話頭を他に轉じてしまはれ、要領を諸公に得させず、如何勸めても同意して判を捺かうとはせられぬのであつた。

私も三四回まで稿を改め、漸く採用になつた文案であるのに、今更西郷公が判を捺して下さらぬとなれば、折角の苦心も水泡に歸してしまふと思ふものだから、傍で見て居つても氣が氣でなく、早く西郷公が呑と曰つて判を捺して下されば可いのにと、モヂ〳〵して居つたが、西郷公は如何しても判を捺かれず、これが爲め其奏請文案も遂に御流れになつてしまつたのである。

◎大西郷の一言意味深長

たゞに局外にあつた私ばかりでは無い、御議事の間に出仕する他の諸公とても、氣が氣でない。何れも皆な天下の泰平を冀つて政治諸般の施設を進めて行つてるのに、西郷公はまだ戰が足らぬと曰はれたのであるから、驚いてしまつて、何が何やら薩張要領を得ず、判を捺かせやうと西郷公に迫まれば、直ぐ話頭を他に外らしてしまはれたものである。私なぞは、その時に於ける西郷公の御眞意が果して何れの邊にあるか、頓と解しかねたものである。

然しそれから間もなく、其年の七月中旬に廢藩置縣の事が決定布告になつたので、西郷公が、「日本は維新後まだ戰をすることが足らぬ」と申された一言の意味を、始めて私も解し得られるやうになつたのである。即ち西郷公は、何よりも廢藩置縣を目前の最大急務なりと考へられたので、愈々之を實施する段になると、或は諸藩の中から之に反對を唱へて亂を起し、或は再び戰爭になるやうなことがあるかも測られぬと豫想されて、「戰をする事が足らぬ」と申されたのであつた。然るにたゞ結論だけを談話になつて、この結論に達するまでの筋道を詳細に說明せられぬものだから、他の者には何が何やら一向に解らず、爲に斯く誤解られるやうな事

も往々あつたものかと思ふ。西郷公の一言には、斯んな風で當に意味深長のことが多かつたものである。

◎大西郷の來訪

これも井上侯が總大將を承はつて采配を振り、私や陸奥宗光伯、芳川顯正伯、それから明治五年に英國へ公債募集のため洋行するやうになつた吉田清成氏なぞが、專ら財政改革を行ふに腐心最中の明治四年頃のことであるが、或る日の夕方、當時私が住居した神田猿樂町の茅屋へ、西郷公が突然と訪ねて來られた。その頃西郷公は參議といふもので、廟堂では此上の無い顯官である。それが私の如き官の低い大藏大丞ぐらゐの小身者を親しく御訪ねになるなど、既に非凡の人物で無ければ能きぬことで、誠に恐れ入つたものであるが、その用談は、相馬藩の興國安民法に就てであつた。

この興國安民法と申すは、二宮尊德先生が相馬藩に聘せられた時に案出して遺されたものでそれが相馬藩繁昌の基になつたといふ、財政やら產業やらに就ての方策である。井上侯始め私共が財政改革を行ふに當り、この二宮先生の遺された興國安民法をも廢止しやうとの議があつ

た。

これを聽きつけた相馬藩では藩の消長に關する由々敷一大事だといふので、富田久助、志賀直道の兩氏を態々出京せしめ、兩人は西郷公に面接し、如何に財政改革を行はれるに當つても、同藩の興國安民法ばかりは御廢止にならぬやうにと具に賴み込んだものである。西郷公は其の賴みを容れられたのだが、大久保公や大隈伯に話した處で取り上げられさうにもなく、井上侯なんかに話でもしたら、井上侯はあの通りの方ゆゑ到底受付けて呉れさうに思はれず、頭からガミ〳〵跳ね付けられるに極つてるので、私を說きつけさへすれば、或は廢止にならぬやうに運ぶだらうとでも思はれたものか富田志賀の兩氏に對する一諾を重んじ、態々一小官たるに過ぎぬ私を茅屋に訪ねて來られたのであつた。

◎二宮尊德の興國安民法

西郷公は私に向はれ、斯く〳〵爾か〳〵の次第故、折角の良法を廢絕さしてしまふのも惜いから、貴公の取計ひで此の法の立ち行くやう、相馬藩の爲めに盡力して呉れぬかと言はれたので、私は西郷公に向つて、そんなら貴公は二宮の興國安民法とは何なものか御承知であるかと

御訊しすると、一向何なものか知らぬとの御答へである。何なものか知らずに、之を廢絶せしめぬやうにとの御依頼は甚だ腑に落ちぬわけであるが、御存知なしとあらば致方が無い、私から御説明申上げやうと、その頃既に私は興國安民法に就て十分取調べて置いてあつたので、詳しく申述べることにした。

二宮先生は相馬藩に招聘せらるゝや、先づ同藩に於ける過去百八十年間に於ける詳細の歳入統計を作成し、この百八十年を六十年宛に分けて天地人の三才とし、その中位の「地」に當る六十年間の平均歳入を同藩の平年歳入と見做し、更に又この百八十年を九十年宛に分けて乾坤の二つとし、收入の少い方に當る坤の九十年間の平均歳入額を標準にして藩の歳出額を決定し、之により一切の藩費を支辨し、若し其年の歳入が幸にも坤の平均歳入豫算以上の自然増收となり、剰餘額を生じたる場合には、之を以て荒蕪地を開墾し、開墾して新に得たる新田畑より得たる歳入は別途のものとして、更に新開墾費に充てるといふ法を定められたのである。これが相馬藩の所謂興國安民法なるものであつた。

◎大西郷理に責められて窮す

西郷公は私が斯く詳細に二宮先生の興國安民法に就て説明する所を聞かれて、「そんならそれは量入爲出の道にも適ひ誠に結構な事であるから、廢止せぬやうにしても可いでは無いか」とのことであつた。依て私は此處ぞ平素私の抱持する財政意見を述べ置くべき好機會だと思つたので、「如何にも仰せの通りである、二宮先生の遺された興國安民法を廢止せず、之を引續き實行すれば、それで相馬一藩は必ず立ち行くべく、今後ともに益々繁昌するであらうが、國家の爲めに興國安民法を講ずるのが、相馬藩に於ける興國安民法の存廢を念とするよりも、更に一層の急務である。西郷參議に於かせられては、相馬一藩の興國安民法は大事であるによつて、是非廢絶させぬやうにしたいが、國家の興國安民法は之を講ぜずにそのまゝに致し置いても差支無いとの御所存であるか、承はりたい。苟くも一國を雙肩に荷はれて、國政料理の大任に當らるゝ參議の御身を以て、國家の小局部なる相馬一藩の興國安民法の爲には御奔走あらせられるが、一國の興國安民法を如何にすべきかに就ての御賢慮なきは、近頃以て其意を得ぬ次第、本末顚倒の甚だしきものである」と切論致すと、西郷公は之に對し別に何とも言はれず、默々として茅屋を辭し歸られてしまつた。兎に角維新の豪傑の中で、知らざるを知らずとして

毫も虚飾の無かつた人物は西郷公で、實に恐れ入つたものである。

◎時には返答に困る事がある

後輩の人であるとか、若くは又平素親しくして往來する友人の間柄だとかの人からなれば、間違つた話を持ち込んで來た時に、私とても直に頭から之を卻けて、爾んな馬鹿な話があるものかと一喝の中に不同意を表することが能きるが、間違つた話を持ち込んで來る人が、多少とも自分の先輩であるとか、平素長者に立てゝ置く人であるとか、乃至は餘り平生親しく交際せぬ間柄の人でゞもあると、さう頭から不同意を言明して、ガミ〳〵膠なく卻けてしまふわけにも行かず、さればとて不同意である處を、無理に同意であるかの如くに曰つてしまへば、たゞに自分を僞るのみならず、先方に其非を覺らしむることも能きないで、益々其人の過謬を深くさする事にもなる。これは到底私の忍び難しとする所である。

「實業之世界」の野依君のやうな應對振で、氣に入らぬ事は、誰が曰うて來たのだからとて一向それには頓着せず、頭から排斥つけて、そんな馬鹿なことがあるものかと、平素から卒直に言明することに爲て居れば、それは又それで通用せるものだが、私には又私の應對振があつて

平生が爾ういふ風で無いから、私が觀て以て間違つてるなと信ずるやうな事に、長上や、平素餘り親しくして居らぬ或る筋の人々から同意を求められると、私は全く其の返答に困つてしまふ。斯る場合は、孔夫子が論語に教へられてある「之を知るを之を知ると爲し、知らざるを知らずと爲せ」との語を適用すべき場合と、少し場合が違ふかも知らぬが、理は矢張り同じで、不同意ならば不同意の旨を明言すべきであるのに、人情の弱點とでも申さうか、之を明言しかねるので、處世上何うして可いものかと途方に暮れねばならなくなる。

◎井上と大隈にも苦めらる

井上侯や大隈伯は私の先輩で、私が今日まで御世話を受けて參つた方々である。滅多に間違つた御意見を私に御聞かせになる事もないが、是等の先輩諸賢とても、何から何まで私に於て同意の能きる御意見ばかりを總て持つて居らるゝものとは限らぬ。時に私が觀て以て筋道の間違つてると思ふやうな話を持ち出されて、私に同意を求められるやうな事が萬が一には無いでも無い。斯る時にも、私は其非を指摘して、頭から不同意であると言明するのが眞實の道であらうが、眞逆あからさまに爾うとも言ひかねて、返答に困るやうな羽目に陷ることがある。

大抵の人ならば、斯る場合に臨むと、腹の中では不同意でも口の端だけで、其場限り如何にも同意であるかの如くに申してしまふのであるが、それでは自分を僞り他人を欺き、其人を益々間違つた道に進ましむるのみならず、却つて迷惑を懸けることにもなるから、私には到底爾んな眞似は能きぬのである。斯る場合に遭遇して困るものは、私ばかりで無い、他にも多くあるだらうと思ふが、孔夫子の御弟子の子路なども、時折斯る場合に遭遇して困まられたものと見え、孟子の藤文公章句下には子路の言として、「未だ同じからずして言ふ、其色を觀れば赧赧然たり、由(子路)の知る所に非ざるなり」とあり、意見の同じからぬものから強ひて話しかけられて、機嫌を取つてる人の顏色を見るに赧々として朱いが、そんな事は自分のとても能きることで無いと曰はれて居る。又同じ章句の處に曾子の言として、「肩を脅かして諂ひ笑ふは夏畦より病る」とあり。人の機嫌を取るために肩を突き上げ頭を低れて諂ひ笑ふのは、炎天に田に出て耕作するよりも苦しいと曰はれて居る。況んや子路や曾子には及びもつかぬ薄德の私が、斯る場合に困るのは當然で、甚だしくなれば、煩悶とでも申したいほどの苦みを覺えることがある。

◎默して答へぬ返答

不同意であると其場で直に言明し難いやうな筋の人から、自分が觀て以て間違つたと思ふやうなことに同意を斯く求められた場合に、如何にすれば可いかといふのは、處世上必ず心得置かねばならぬ實際の問題であるが、私は斯る場合に遭遇すれば、大抵なら默して答へずと謂つたやうな調子で、贊否何れの返答をも申上げぬ事にして居る。なほ夫れでも強ひて贊否の答を促さるれば、「考へて置きませう」とか、或は「再考します」とか返答するのであるから、澁澤が贊否を言明しなかつたり、「考へて置きませう」とか、或は「再考します」とか申したら、不同意なのであると、世間が御察し下さるれば、誠に私も樂で好都合である。然し直に爾うと御察し下さらぬ方もあるので、甚だ困る次第である。

又茲に一つ注意して申添へ置きたいことは、表情の具合である。如何に默して答へずとも、顏に出る表情の具合一つで、不同意である心の中を意外にも同意であるかの如くに、先方に覺らしめるやうな場合もあるもの故、此の點は大に要心すべきもので、實際不同意であつて何の返答さへせずに置きながら、先方に惡感情を起させるのが好ましくないなぞとの弱い精神から、

顔の表情や態度を同意であるかのやうにして見せれば、之れは先方を誤解さして欺くことになり、延いては先方の迷惑ともなり、甚だ宜しく無い措置で、それは不同意でありながら、其場を繕らふ爲に同意であると返答したのと同じ事になる。賛否の返答は言葉ばかりに依つて表はれるものではない。顔の表情や態度によつても表はれるものである。故に不同意の場合に默して答へざることにしたら、表情と態度とにも大に注意し、些かたりとも同意と先方に誤解せられるやうな表情や態度をして見せてはならぬものである。

善の極意は自然に一致するに在り

◎孔子を嘲弄せる質問

私の處世談も、追々回を重ねて參りましたが、十分なる準備を整へ置いて、學者諸先生が教室に出でゝ講義をせらるゝ時のやうに、豫め整然と體系を立てた談話をするわけにも參らず、ややともすれば、老人の懷舊談に流れてしまふ如き傾きがある。爲に或は爾んな事なら遠の過去に聞いてるなぞと思召さるゝ方々もあるとも愚考するが、又其代り實踐躬行に就

て、飾りの無い處を談話し得るわけにもなる。談話をする朝になつて、漸く當日談話する章句の邊を一寸繙いて見たくらゐでは、用意が甚だ行屆いて居らぬ次第と申すべきだが、用意の無い所に却つて又或る妙味が無いでも無からうかと、勝手ながら思ふのである。さて爲政篇の篇末に

或謂二孔子一曰。子奚不レ爲レ政。子曰。書云。孝乎惟孝。友レ于二兄弟一。施レ於二有政一。是亦爲レ政。奚其爲レ爲レ政。（或る者孔子に謂ひて曰く、子何ぞ政を爲さざる。子曰く。書に云ふ、孝なる乎惟れ孝、兄弟に友にして、有政に施すと。是も亦政を爲すなり、何ぞ其れ政を爲すを爲さん）

との章句がある。孔夫子に質問を致したといふ「或る者」の誰であつたかは、素より之を知るべき由もないが、兎に角當時の社會に相當有力な人物であつたらしく、孔夫子を一つ皮肉つて苦しめてやらうとの魂膽から、稍嘲弄の意味合で、斯る質問を發したものかと、私には存ぜられる。

◎大隈の居据り内閣

孔夫子が純然たる學者になられ、三千にも餘る弟子を容れて道を說かれ、書を編まれるやう

になつたのは、魯の哀公十一年、御齢が六十八になられてから後のことで、それまでは孰れかと申せば政治家であらせられた。政治家と申しても、春秋の政治家の如く、自己の功名利達の爲に政を行はうといふのでは無い、仁義の爲に政を行はうとせられたのである。

今回大隈伯に於かせられては、一旦辭表を提出せられたるにも拘らず、時局を拾收するに堪ふるものが他に無いからとの事で、内閣改造の上、再び元の如く居据られたのであるが、居据り内閣の御趣意が果して孔夫子の御志と同じで、大隈若し朝に在らずんば、仁義の政を如何せんとの御心情から來たものか何うか、この邊の處は今私より申上ぐべき限りで無い。大隈伯には必ずや春秋に於ける政治家の如き御心情など、毛頭在らせられぬものと私は信ずる。

◎政治家に通有の惡弊

然し世間から所謂政治家と稱せらるゝ人々には、兎角眞實が足りぬやうな傾きのあるもので、人を見さへすれば、何でも之を道具に使はう〳〵といふ事許りを考へる癖がある。從つて道具に使つて役に立つてる間は、大に其人を尊敬するやうな風に見せて大事にもするが、既う使ふ丈け使つて用が無くなつたとなれば、秋が來て團扇を棄てゞもする時のやうに、これまで

隨分自分の利益を計つて呉れた人をも、忽ち棄てゝ顧みぬまでになり勝なものである。

孔夫子に仕官の御志があつて、政治に干與して見たいとの御一念から、或は齊の景公に仕へやうとせられたり、或は魯の定公に仕へられたり、或は又衛、楚などに用ゐられんとしたり、其他、曹に行き、宋に行き、鄭に行き、陳に行き、蔡に行かれたのも、畢竟するに仁義の道を行はうとの御所存からである。然るに當時の諸公や群雄には、孔夫子の斯の至大至高なる御意を解し得るものが無かつたので、一度は孔夫子を用ひて見やうとの氣を起し、或は又魯の定公の如く實際に重用して見るものがあつても、根本の思想に於て孔夫子とは雲と雪ほどにも相違して居る所より、結局遂に折合はなくなつてしまつた。

これと云ふのも、當時に於ける所謂政治家が、一意功名利達を以て終生の目的とし、敢て他を顧みる暇が無かつた爲めである。是に於てか、孔夫子を此の目的を達する道具に使ひ得ると思ふ間は、諸公も禮を厚くして孔夫子を聘しもしたが、愈道具に使へぬことが明かになつて來れば、忽ち棄てゝしまふ事になるから、孔夫子も足の塵を拂つて、諸公の許を去らねばならぬやうになられたものである。孔夫子に「奚ぞ政を爲さゞる」との質問を發した「或る者」

は、斯く孔夫子が寧日無きまでに到る處を駈けずり廻られて、仕官の念頗る急なるに拘らず、到る處に用ひられず、毫も成功を收めずして失敗ばかり重ねて居らるゝのを見、「口で政治を說くばかりでは駄目だ、少し實際の御手腕を拜見さして戴きたいものだ」と、嘲りながら斯く皮肉に質問したのである。

◎濟生會創立當時の桂太郎

故桂太郎公も流石に豪い政治家であらせられた丈けに、濟生會設立の計畫が起つた當時なぞは、不肖の私でも何かの御用に立つものと思召されたものか、大層私を珍重せられて、一にも澁澤二にも澁澤さん〳〵と聲を懸けて下されたものである。桂公が果して私を濟生會設立に都合の良い役に立つ道具だと思はれて、斯く私にチヤホヤされたものであるか何うか、又濟生會が愈首尾よく設立せられてしまつた後の桂公が、私に對して如何であつたかなどと云ふことも、今私より申上ぐべき限りで無いが、兎に角生會創立當時に、桂公が一にも二にも澁澤さん〳〵と、私を大切にして下された事だけは事實である。

孔夫子も初めて諸公に見えられたばかりや、或は又招聘せられたばかりの中は、諸公の眼より我功名利達を遂ぐるに恰好の道具であるかの如くに目せられ、チヤホヤと大切に扱はれもせられたらうが、役に立つ間だけ使つてしまへば、元來が仁義を行はんが爲に政治に干與せられる孔夫子のこと故、諸公の眼よりすれば用の無いのみか、却つて邪魔になる所謂無用の長物たるが如き觀を呈したわけのものである。之が孔夫子の到る處に於て長く政治に關係し得られなかつた所以である。

◎痛快なる孔子の答辯振り

孔夫子に質問の矢を放つた「或る者」は、這邊の消息が解らずして、皮肉に冷評的質問を試みたのであるから、私の如き不肖のものならば、忽ち怒氣心頭に發し、糞を喰へ、そんな皮肉を曰はれ、冷評かされなんかして堪るものかと憤つてしまふ處だが、流石に孔夫子には凡人の及ぶ能はざる偉大な人格があらせられたので、毫も怒らるゝ如き模樣なく――否皮肉られた事さへ御氣が付かなかつたかの如く、意想外なる書經君陳篇の語を引き、淡然として之に答へられたのである。

玆に孔夫子が引用せられた書經君陳篇の語を其儘申上げると、君陳能孝レ親。友レ於二兄弟一。又

能推二廣此心。以爲二一家之政一。（君陳能く親に孝に、兄弟に友に、又能く此の心を推廣して以て一家の政を爲す。）といふのが其全文である。これは周の成王が其臣君陳の德を褒められた時の語で、君陳が親に孝に兄弟に友なる處は、まさしく是れ一の仁政である、之が一家より延いて一國の政治に及ぶのだとの意味である。

◎施さざるの慈善あり

政治とは、必ず一國の朝に立たねば行へぬものと思はば大なる間違ひである。世の中には施さゞるの慈善あり、又書を讀まざるの學問ある如く、政治ならざる政治もある。人の日常生活を離れて、外に政治は在り得べきもので無い。人若し仁義禮智信の五常を以て其日々を律すれば、その人の日常は是れ即ち王者の仁政である。禪を修められた御篤志の方々なぞより、能く卽身成佛と申す事を承はるが、矢張同じ意味のものだらうと存ぜられる。孔夫子ほどの大聖人に成らるれば、政治と日常の御生活との間に、最早區別が無くなつてしまひ、二にして一、一にして二といふ事になる。

孔夫子は此の意味に於て、「或る者」が發した皮肉の質問に答へられ、必ずしも官に就き位に

上り、政治向の事に干與するばかりが政治を執ると申すものでは無い。政は敢て仕官をせずとも日々執つてゆけるものである、兄弟に友に、四海に仁義を施くのが、即ち王者の政である。故に强て世間に所謂政治家となる必要なぞ更々無い、仁義禮智信の道を歩むのが、是政治では無いかとの反問を發せられて、「或る者」の冷評的質問を退治せられたのである。是處に常人と全く其選を異にした孔夫子の偉大なる御人格がある。

◎近江の孝子と信濃の孝子

德川幕府の中葉より行はれ始め、神儒佛三道の精神を合せ、平易なる言語を用ひ、極卑近にして而も通俗な比譬を擧げて、實踐道德の鼓吹に力めたものに心學と申すものがある。八代將軍吉宗公の比、石田梅巖始めて之を唱へ、かの有名な鳩翁道話なぞも、この派の手に成つたものであるが、梅巖の門下よりは、手島堵庵、中澤道二などの名士出で、この兩人の力により、心學は普及せらるやうになつたものである。

私は曾てこの兩人の中の中澤道二翁の筆になつた道二翁道話と題せらるゝ一書を讀んだ事がある。その中に載つてる近江の孝子と信濃の孝子とに就ての話は、未だに忘れ得ざるほど意味

のある面白いもので、確か孝行修行といふ題目であつたかの如くに記憶して居る。その名は何と申したか、今明確と覺えて居らぬが、近江の國に一人の有名な孝子があつた。夫れ孝は天下の大本なり、百行の依て生ずる所を心得て、日夜その及ばざるを唯惟れ恐れて居つたが、信濃の國に又有名なる孝子在りと聞き及び、親しく其の孝子に面會して、如何にせば最善の孝を親に盡すことの能きるものか、一つ問ひ訊して見たいものだとの志を懷き、遙々と野越え山越え谷越えて、夏なほ涼しき信濃の國まで、態々近江の國から孝行修行に出かけたのである。

◎孝子らしからぬ孝子

漸々にして孝子の家を尋ね當て、其家の敷居を跨いだのは、正午過であつたが、家の中には唯一人の老母が在る丈けで、實に寥しいものである。御子息はと尋ねると、山へ仕事に行つてるからとの事に、近江の孝子は委細來意を留守居の老母まで申述べると、夕刻には必ず歸らうから、兎に角上つて御待ち下さるやうにと勸められたので、遠慮なく座敷に上つて待つてると、果して夕暮方に至れば、信濃の孝子だと評判の高い息子殿が、山で刈つた薪を一杯背負うて歸へつて來られた。そこで近江の孝子は、こゝぞ參考の爲に大に見て置くべき所だらうと心得

て、奥の室から樣子を窺つてると信濃の孝子は薪を背負つたまゝで緣に瞪乎と腰を掛け、荷物が重くつて仕樣が無いから、手傳つて下して呉れろと、老母に手傳はして居る樣である。近江の孝子は先づ意外の感に打たれて猶ほ窺つてるとも知らず、今度は足が泥で汚れて居るから淨水を持つて來て呉れの、やれ足を拭うて呉れのと、樣々勝手な註文ばかりを老母にする。然るに老母は如何にも悅ばしさうに嬉々として、言ふまゝに能く仲の世話をしてやるので、近江の孝子は誠に不思議な事もあればあるものと驚いてる中に、信濃の孝子の足も綺麗になつて爐邊に坐つたが、今度は又有らうことか有るまいことか足を伸ばして、大分疲れたから揉んで呉れと老母に賴むらしい模樣である。それでも老母は嫌な顏一つせず揉んでやつてる中に、はる〳〵近江からの御客來があつて、奥の一間に通してある由を仲に談ると、そんならば御逢ひしやうとて、座を起ち、近江の孝子が待つてる室にノコ〳〵やつて來た。

◎孝子老母を勞して厭はず

近江の孝子は一禮の後、信濃の孝子に孝行修行の爲め來れる一部始終を物語り、彼是れ話し込む中早夕飯の時刻にもなつたので、信濃の孝子は晩餐の仕度を仕て客人に出すやうにと老母

に頼んだ樣子であつたが、愈膳が出るまで、信濃の孝子は別に母の手傳をしてやる模樣もなく、膳が出てからも平然として母に給仕させるのみか、やれ御汁が鹹くつて困るとか、御飯の加減が何うであるとか、老母に小言ばかりを曰ふ。そこで近江の孝子も遂に見かねて、私は貴公が天下に名高い孝子だと承はつて、はる〳〵近江より孝行修行の爲め罷出でたものであるが、先刻よりの樣子を窺ふに、實に以て意外千萬の事ばかり、毫も御老母を勞はらるゝ模樣のなきのみか、あまつさへ老母を叱らせらるゝとは何事ぞ、貴公の如きは孝子どころか、不孝の甚だしきものであらうぞと、勵聲一番、開き直つて詰責に及んだのである。之に對する信濃の孝子の答辯が又至極面白い。

◎善の極意は自然に一致の事

孝行々々と、如何にも孝行は百行の基たるに相違ムらぬが、孝行をしやうとしてする孝行は眞實の孝行なりとは申されぬ、孝行ならぬ孝行が眞實の孝行である。私が年老いたる母に種々と賴んで足を揉ませたりするまでに致し、御汁や御飯の小言を曰つたりするのも、母は子息が山仕事から歸つて來るのを見れば、定めし疲れてることだらうと思ひ、さぞ疲れたらうと親切

に優しくして下さるので、その親切を無にせぬやうにと足を伸ばして揉んでもらひ、又客人を饗應すに就ては、定めし不行屆で子息が不滿足だらうと思ふて下さるものと察するから、その親切を無にせぬ爲め、御飯や御汁の小言までも曰うたりするのである。何でも自然のまゝに任せて、母の思ひ通りにしてもらふ所が、或は世間で私を孝子〳〵と言ひ囃して下さる所以であらうか、といふのが信濃の孝子の答であつた。これを聞いて近江の孝子も瞿然として大に覺り、孝の大本は何事にも强て無理をせず、自然のまゝに任せる處にある。孝行の爲に孝行に力めて來た我が身には、まだ〳〵到らぬ點があつたのだと氣付くに至つたと說いた所に、道二翁道話孝行修行の敎訓がある。

◎養育院の事業に盡す所以

孝行ばかりでは無い、政治も矢張同じことである。政治ばかりでは無い、世間の一切萬事皆同じ事である。孝行も孝行をしやうとしてすれば、却つて孝行にならぬやうに、政治も政治をしやうとしてすれば、却つて眞實の政治にならぬものである。孝行ならぬ孝行が眞實の孝行になるやうに、政治ならぬ政治が眞實の政治になるものである。孔夫子が政を行はうとさへす

れば、強て位に上り官に就かずとも、政は行ひ得られるものだと仰せになつたのは、此處の消息を指して曰はれたものである。如何にも孔夫子が仰せられた通りで、孔夫子はその胸中に蘊蓄せられた政道の抱負を、官に就き位に上つて實行せられるわけに參られなかつたに相違ないが、孔夫子の道の傳へられた處には、唯に孔夫子御在世の時代のみに限らず、又支那の一國一州否支那全國四百餘州のみに限らず、海外の日本に於てまでも、御在世當時野に於て孔夫子が唱へられた仁義の政を天下に施いて、民福の增進を計らうとの志を懷く千百の政治家を生じ、孔夫子は敢て政を爲すを爲さずして、却つて東西に亘り古今を通じ、廣く且つ永く政を爲したも同じことになられたのである。孔夫子が政を爲すを爲さずして爲された政は、僅に一國宰相の印綬を帶び、僅々三四年の間に行ふ常人の政以上に値する古今獨歩の大なる政治であつた。この意味に於て、政を爲すを爲さゞりし孔夫子は、今の所謂政治家の夢想にだも及ぶ能はざる大政治家である。

私も明治六年以來全く官途に念を斷つて、一意民業の發達に及ばずながら力を致して來たのであるが、それでも全く政治に關係が無いものとは思はぬ。假令孔夫子の如く廣く且つ永くは

無いにしても、是も亦政を爲さずして爲す政の中であらうかと、僭越ながら存ずるものである。私は久しい以前より東京養育院の事業に關係し、今日でも不行屆勝ながら其の御世話を致して居るが、之なぞも素より私が一身の功名榮譽の爲にするのでも何でもない。孔夫子の論語に說かれた、「孝なる乎、惟れ孝、兄弟に友に、有政に施す、是れも亦政を爲すなり」の遺訓を服膺し、斯る事業に力を盡すのも、つまりは政を爲さゞる政で、少しは國家政治向の御爲にならうと思ふからの事である。

信と義と無くんば國も人も共に亡ぶ

◎民に信無くんば其國亡ぶ

子曰。人而無レ信。不レ知二其可一也。大車無レ輗。小車無レ軏。其何以行レ之哉。（子曰く、人にして信無くんば其の可なるを知らず。大車輗なく小車軏無くんば、其れ何を以てか之を行らんや。）

往昔支那で大きな車を動かすには、輗と稱する横木を、梶棒の端へつけて之に牛を繫ぎ、又小さい車を動かすには、軏と稱する鉤のやうなものを梶棒の端に結びつけて之に馬を繫ぎ、そ

れで以て旨く牛馬を駕御して車を曳かせることにしたものだが、軏と軏とが無ければ、如何に堂々たる車輛があつても、如何に逸れた牛馬があつても、車は一寸たりとて動くもので無い。恰度そのやうに人に信が無ければ、如何に才智があつても、如何に技倆があつても、少時たりとて安全な世渡りを爲て行けるもので無いといふのが、玆に掲げた教訓の趣旨で、信は人の行に取つて扇の要の如きものである。信無くしては、如何なる事業にある人も、如何なる職務にある人も、世に立つて行けるもので無いのである。

是に於てか孔夫子は、同じく論語の顏淵篇に於て、子貢が夫子に對し、政治とは如何なるものかとの質問を發した時に、足レ食。足レ兵。民信レ之。（食を足らし、兵を足らす、民之を信ず。）即ち民力、兵力を充實し、民をして信を守らしむるのが、是れ政治の奧義であると答へられ、然らば此の三つの中で孰れが一番大切のものかと、子貢より重ねて御問ひ申上げると、國には兵が無いからとて必ずしも滅ぶるもので無い、又國に食物が無いからとて必ずしも滅ぶるものでは無い。「自」古皆有レ死」（古へより皆な死あり）だが、「民無レ信不レ立。」（民信なくんば立たず。）と答へられ、國民若し信を守らずんば、其國家は一日たりとて立ち行くもので無い。食が無い爲に死

するのは、生きとし生けるもの、一度は遭はねばならぬ運命に遭ふ丈けのことであるが、國民に信なき爲め國家の陷らねばならぬ亡國の運命は、是れ自ら強ひて招く禍であると仰せられたのである。

孔夫子が、人の守るべき道の中で、最も重きを信に置かれたことは、是まで既に申上げた所によつても、又其他の章句に照らしても明々白々の事で、論語の中ばかりにも、孔夫子が信に就て說かれた所が、前後十九個所ほどあるやうに思ふ。

◎信は親より進化せるもの

法學博士穗積陳重氏は、人の子に「信之助」と命名した時に、命名の辭に代へて、道德進化論の上より信の重んずべきを說かれたことがある。同氏の意見に據れば、信は素と母が其子を哺育する關係より、母子の間に生じた「したしみ」即ち親に其端を發したもので、母子間の親は擴められて親子間の親となり、更に擴大せられて同族間の親となり、漸次社會が進步發達して其範圍を擴張するに至るや、親も亦其形式を變じて信となつたのであるが、社會が進化して其の範圍が擴めらるれば擴めらるゝほど、信は愈よ益々社會の結成に必要缺くべからざるものと

なる故、信は道德の中でも最も進歩した形式で、今日の如く進化發達せる社會には一日も缺くべからざるものだとの事である。穗積氏の意見に對しては、私も全然同意である。

然し、既に本書の初頭に於ても私が申し述べ置いた通りで、信には又必ず義を伴はねばならぬものであつて、不義を果さんが爲に守る信は、單に社會の利益とならざるのみならず延いては社會を茶毒することになるものであるから、此邊は青年子弟諸君に於て十分注意せられて然るべきである。

◎武士道は義によつて立つ

見レ義不レ爲。無レ勇也。（義を見て爲さゞるは勇無き也）

これは爲政篇最後の句であるが、武士道などと申すものも、畢竟するに勇を振つて義を行ふ所にあるらしく存ぜられる。苟も義の在る所、水火をも辭せずして行くといふのが、是れ即ち武士道の本意である。

文天祥と申さるゝ方は、甚だ女々しい行のあつた人で、好ましからぬ人物である。私が先年九州の安川敬一郎氏が設立せられた明治專門學校を參觀致した時に、同校に文天祥の書いた額

を掲げてあつたのが偶然眼に觸れたものだから、私は安川氏に向ひ、文天祥とは……突飛い人の額を御掲げになつたものだと、稍々不同意の心情を漏らすと、安川氏よりも私に對し、文天祥の額に就て非難せらるる方は、閣下ばかりで無い、過般大隈伯の來られた時にも、切りに文天祥は不可ん、文天祥は不可んと申されてゐましたとの話があつた程で、文天祥の行爲には好ましからぬ事も多いが、この人が死んで後に其遺骸を調べて見ると、下帶に次のやうな銘の書かれてあつたのを發見したとのことである。

孔曰成レ仁。孟曰取レ義。惟其義盡。所二以仁至一。讀二聖賢書一。所レ學何事。而今而後。庶幾無レ愧。

（孔曰く仁を成すと。孟曰く義を取ると。惟れ其の義を盡すは、仁至る所以なり。聖賢の書を讀んで、學ぶ所何事ぞ、而して今より後、庶幾くは愧無からんか。）

昔の支那人は、平素服膺すべき箴言を、能く衽（ジン）に書きつけなぞして居つたものだが、文天祥は更に其の上わ手で、日常の座右の銘とも申すべき此の句を、下帶に書いて、座臥共に須臾も我が身より離さぬやうにして居つたものと思はれる。

◎文天祥の衣帶銘

文天祥が死んでから後に、下帶へ書いてあるのを發見された此の銘は、文天祥衣帶銘とも、又衣帶中贊とも稱ばれて居るが、假令文天祥の人物や行動には好ましからぬ所があつたにしても、衣帶銘は決して棄つべきもので無い。其意たるや、孔子は仁を說き孟子は義を說いたが、人若し義を盡せば、自らにして仁に達するを得べく、仁義は決して二つ個々別々のものでは無い、二にして一なるものである。聖賢の書を讀んで學ぶ所も、畢竟この上に出づる能はざるもの故、義を盡して世に立ちさへすれば、仁をも完うし、百世の後までも、世間の人々より笑はるゝやうな愧を搔かずに濟むといふにある。

如何にも其の通りで、孔夫子が論語衛靈公篇に於て、志士仁人。無二求レ生以害レ仁。有二殺レ身以成レ仁。(志士仁人は、生を求めて以て仁を害する事無し。身を殺して仁を成すこと有り。)と仰せられた。仁の初步たる孟子が公孫丑章句上に所謂惻隱の心なども、其根底は矢張之を義に發するものである。故に孔夫子は同じく論語衛靈公篇に於て、君子義以爲レ質。禮以行レ之。孫以出レ之。信以成レ之。(君子は義を以て質と爲し、禮を以て之を行ひ、孫(遜と同意義)を以て之を出し、信を以て之を成す。)と說かれて居る。義は仁の本體で、義が動いて人の行跡になつたものが是れ卽ち仁である。義に勇みさへすれば、人は必ず仁を行ひ得るもので、文天祥の衣帶銘は此の消息を傳へたものである。されば孟子の如きも告子章句上に於て、魚我所レ欲也。熊掌亦所レ欲也。二者不レ可レ得レ兼。舍レ生而取二義者也。義亦我所レ欲也。二者不レ可レ得レ兼。舍レ生而取二義者也。(魚は我が欲する所、熊掌も亦我が欲する所なり。二つの者兼ぬることを得可からずんば、魚を舍てゝ熊掌を取らん者なり。生も亦我が欲する所、義も亦我が欲する所なり。二つの者兼ぬることを得可からずんば生を舍てゝ義を取らんもの也。)と曰はれて居る。

◎高杉晉作と阪本龍馬

人誰か生を欲せざるものあらんや、誰でも生を欲しはするが、義の爲めに生を捨てゝ意とせざること、猶ほ魚を捨てゝ熊の掌を取るが如くにするのが、是れ人の人たる道を盡くす所以である。然しこれは言ふべくして容易に行ひ難いもので、殊に才智謀略に富んだ人に於て難しとする所である。

されば維新の三傑の中でも、大久保公とか木戸公とかの如き計略の多い方々は、如何しても義に勇むといふ所が少かつたやうに思はれる。之に反し計略智謀に乏しいが、何方かと云へば

蠻勇のあるやうな方には、義に勇む人々が多いものである。高杉晋作といふ人は米山湛句によく謠はれる「眞の闇夜に櫻を削り赤き心を墨で書く」の唄を作つた方で、私は別に親しく往來したわけでも無いが、故井上侯などより承る所によつて觀れば、義を見て爲さゞるは勇無き也との意氣が常にあらせられた人の如く思はれる。高杉氏は餘程變つた面白い所のあつた人らしく、安政六年吉田松蔭先生の在獄中に種々世話をしたり、文久二年品川御殿山の公使館を燒いたり、其他屢々生死の巷に出入したのも、義を見て爲すの勇があつたからである。それから又坂本龍馬といふ人なども、義を見て爲さざるは勇なき也の意氣があつた方のやうに思はれる。

◎櫻田事變の有村治左衛門

御大老井伊掃部頭を櫻田で刺した水戸浪士の仲間に、有村治左衛門といふ人があつた。この人は元來薩摩の藩士で、安政の六年薩摩から出て來て國事に奔走して居つたのだが、其間に水戸の志士と交際するやうになつたものである。然し井伊大老を刺さうといふ評議のあつた時には、有村は水戸藩のものでも無いから、若し浪士の仲間に加盟せずに濟まさうとすれば、加盟せずとも夫れで濟んだものである。この消息は當時の事情を詳細に調査して見れば、直ぐ明かに

なる次第だが、有村は井伊大老を以て天朝に對して慮外の處置を致す不屆至極の不義者と考へたので、水戸浪士の仲間入をしないやうでは、是れ義を見て爲すの勇なき卑怯者になると信じ、強ひて自ら求めて櫻田事變の徒黨に加盟したものである。

如何なるものを義と觀るかといふ事に關しては、それ〳〵其人其時代によつて觀る所を異にするだらうが、井伊大老にして果して違勅等の所爲があつたとすれば、有村治左衛門が之を刺すを義なりとして、當然避け得らるべき所を避けずに、萬延元年の櫻田事變に於ける水戸浪士の仲間入りをしたのは、生を輕んじ義を重しとしたものと云はねばならぬ。

◎水戸烈公は偏狹の人

水戸藩も藤田東湖先生などと申す俊傑を出した頃には、一時之によつて天下に名を成したものであるが。東湖先生が死んでしまはれた後は、烈公と仰せらるゝ方が、元來世間で評判せられるほどに偉大な人傑でなく、餘程偏狹な所があつて、實際は政治の手腕に乏しかつたものと見え、藩内に黨爭が絶えず、互に他を排斥して、之を殺してしまはうといふ如き傾きを生じ、遂に烈公派と中納言派との二黨の間に、激烈なる確執を生ずるまでに至つたものである。

烈公派は尊王攘夷を以て旗幟とし、自ら正黨と稱し、中納言派は佐幕開港を以て旗幟とし、姦黨と稱せられたのであるが、佐幕開港派の所謂姦黨の勢力が次第に盛んになつて來て、尊王攘夷派の所謂正黨の方が危地に陷りかけて來たものだから、この派の頭目武田耕雲齋は、同志の者三百人ばかりを率ひて筑波山に立て籠つて兵を擧げ、幕府に抗しやうとしたが、軍利あらず敗戰になつたものだから、今度は越前の敦賀の方を廻つて京都に上り、大に事を計らうとしたが幕府では耕雲齋の仲間に京都へ入り込まれては大變だといふので、一橋慶喜公に出兵して耕雲齋を討伐するやうにとの命を下されたのであつた。

◎東湖の遺子藤田小四郎

武田耕雲齋は同志の者を引きつれて敦賀まで來た時に、一橋慶喜公が兵を率ひて討伐に向はれると聞いたものだから、慶喜公を敵にして戰ふわけにもゆくまいといふので、遂に一同は降服を申入れて歸順の意を表することになつたのである。依て幕府方に於ては夫々處分をつけて、慶應元年二月武田耕雲齋以下重だつたる者には切腹を命じ、其他身分の輕いものは之を斬首の刑に處したのであるが、その時殺されたものが、何でも數百人あつたやうに記憶する。

その斬罪の刑に處せられた者の中に、僅に二十四歳の藤田小四郎といふ青年があつた。この人とは私も兩三回面接したこともあるが、頗る立派な人物で、刑に臨み從容として文天祥正氣歌を朗吟し、辭世として、

兼ねてより思ひ染めにし言の葉を
今日大君に告げて嬉しき

の一首を遺し、泰然死に就いたのである。小四郎は名を信と謂ひ、東湖先生の第四子に當る人である。然し今回私が德川慶喜公の御一代記を編纂することになつて、種々詳しく取調べた所によると、小四郎も櫻田事變に於ける有村治左衛門と等しく、強ひて武田耕雲齋の徒黨に與みして斬首に處せらるゝまでの目に遭はずに濟まさうとすれば、幾干でも濟まされる位置にあつた人で、又耕雲齋の仲間に無理に引き込まれたのでも何でも無い。然るに小四郎は耕雲齋が頭目であつた正黨に入つて兵を擧ぐるのを、是れ卽ち義であると信じたものだから、生を捨て強ひて耕雲齋の仲間に黨し、遂に斬首に處せられたのである。この點から觀れば、小四郎はまさしく義を見て爲さざるは勇無きなりとの意氣があつた人と思はれる。明治廿四年武田耕雲齋

が正四位を贈られた時に、藤田小四郎も亦從四位を天朝より追贈されて居るが、こゝらの爲めだらうと私は存ずる。

◎太田道灌の辭世

私の此の邸宅のある飛鳥山の山續きは、今でも道灌山と云はれるほどで、その昔太田道灌の住つてた處だらうとのことであるが、道灌は始めて江戸城を築いた人だと申すことになつて居る。狩りに出た歸り途、雨に逢つて雨具を借りに或る農家に入ると、簑の代りに少女が山吹の枝を出したといふので、道灌の名は能く世間に知られて居るが、幼より武藏の管領上杉持朝に知られ、十一歳召されて出仕し、源六郎持資と稱したものである。然るに上杉の臣下中に道灌と快からざる長尾意玄と申すものがあつて、酷く道灌を邪魔物にし、種々と策略を運らし道灌を亡きものにせんと謀んだが、上杉氏も遂に其策略に乘せられ、道灌を糟屋（今の豐多摩郡千歳村）の第に招き、浴室に入れて置いて刺客に道灌を殺させることになつたのである。これは文明十八年七月、道灌齢五十五の時であつたが、刺客に刺される時も、道灌は神色自若として毫も狼狽せる模樣なく、

かゝる時さこそ命の惜しからめ

かねて無き身と思ひ知らずば

の一首を辭世に詠み、從容として死に就いたとの事である。この一首の意味は、平素より生命を無いものと思つてゐるから、只今不義者の計略にかゝり生命を取られても、露些か生命を惜しいなぞとは思はぬが、若しも平素より生命を無いものだと思つて居らねば、こんな時に定めし生命が惜しいことだらうといふにある。道灌は文雅の素養も並々ならず、雅懷に富ませられた方であるが、それでも義と見れば進んで之に殉ずる覺悟が平素よりあつた人と思はれる。今申述べた如く一首を辭世に詠むことの能きたのも、畢竟するに、平素より義を見て爲さゞるは勇無き也との意氣があつたからである。今の青年子弟諸君に於かせられても、平素より常に此の太田道灌の如き意氣と覺悟とを持つやうにして戴きたいものである。

◎不義を見て爲さざるの勇

孔夫子は義を見て爲さゞるは勇無き也と教へられて居るが、不義を見て爲すのも亦勇の無いものである。故に青年子弟諸君には、義と見れば進んで之に殉ずるの勇あると共に、不義と見

たらば、如何なる人より壓迫せられても、斷じて之を爲さずとの勇氣が無ければならぬものである。

大鹽平八郎が天保八年大阪に兵を擧げて亂を起した時のことであるが、彦根の藩士で平八郎の高弟に當るものに宇津木矩之丞といふ人があつた。櫻田で水戸浪士に刺された井伊掃部頭家の家老を勤めた俗に大宇津木と申した人の子息で、岡本半助や岡田六之丞なぞとも、多少の緣邊に當つたものである。大鹽に就き深く陽明學を修め、長崎にも參つたことなぞもあつたが、彦根に歸つて陽明學を教授して居る中、大鹽に擧兵の陰謀があるとも知らず、一日大阪に出で、大鹽に面會すると、折柄恰度大鹽に於ては擧兵準備の最中であつたものだから、大鹽は宇津木矩之丞に其次第を漏らし、一味徒黨の連判に加はるやうに勸めたのである。

◎死を決して大鹽平八郎を諫む

この時に宇津木矩之丞は、大鹽平八郎が既に大事を自分に漏らしたからには、若し一味徒黨に加はらぬと跳つけてしまへば、忽ち其場で大鹽に殺されるに相違ないとは覺つたが、大鹽の擧兵は慥に失敗するもので、謀叛を案ずる愚民の所爲であると信じたものだから、躊躇として其

不可なる事を說いて擧兵を諫止し、自分は素より大鹽の一味徒黨に加はるを肯じなかつたのである。然し大鹽に於ては少しも意を翻へす模樣が見えないので、其夜大鹽の邸に一泊することにはしたが、必ず其夜の中に大鹽に殺されるものと覺悟し、同伴して參つた十八歲ばかりの少年に、委細を詳しく認めた一封を授け、之を懷にして窃に大鹽の邸宅より拔け出で、急ぎ彦根に歸るべき旨を命じたのであるが、少年のことゝて旨く邸を拔け出るわけに行かず、彼是して居る間に、平八郎は果して一刀を提げ、矩之丞を殺しにやつて來たのである。

少年は之を見るや驚いてウロ〳〵して居つたので、矩之丞は狼狽爲す所を知らざる少年を叱して邸より拔け出でしむると共に、大鹽に對しては、斯くあるべしと覺悟の上に諫止せし事故、決して逃げも隱れもせぬからと立派に言ひ放ち、猶ほ大鹽の不心得を諫めて、從容その刄に罹つて殺されたとのことである。

この矩之丞の如きは、不義を見て爲さゞる勇のあつた人といふべきである。この點に於て、青年諸君は大に矩之丞の意氣を學び、不義と思ふ事には、何時如何なる人より加擔を迫られても、決して其仲間に加はらず、爲に生を捨つるも厭はざるまでの覺悟を平素より養つて置くや

うにして戴きたいものである。この宇津木矩之丞なる彦根藩士御一家の力で、宇津木留太郎といふ人は、目下大阪の北野中學校に英語の教師をして居られるとか聞き及んで居る。

◎大典參列の光榮と渡米

今上陛下御卽位の御大典も、來る秋冬の候に於て目出度御擧行あらせらるゝに就ては、實に千載一遇の御盛儀のこと故、是非之に參列の光榮を荷ひたいのは、私として山々の次第であるが、私も旣に本年七十六歲、この上なほ永い餘生のある身とも思へぬ、かく思ふにつけても、この殘り少い餘生を、少しでも國家の御利益になるやうに用ゐて一生を終りたいといふのが、私の微衷である。今回御大典を目前に控へながら、看す〳〵之に參列するの光榮を荷はずに、十月下旬橫濱出帆の汽船によつて渡米の事に決心したのも、全く奉公の微衷の致す所で、假令この老軀でも多少國家の御利益になるものとすれば、一日の大饗に參列して、獨り自ら之を光榮として悅ぶよりは、國家百年の福祉の爲に微力を獻ずるのが、孔夫子の論語に於て說き遺された忠孝の道を全うする所以であらうかと存ずるのである。

◎渡米の精神論語に發す

私としては、博覽會見物をした處で、別に面白いわけでも無く、又遙々亞米利加三界まで罷出でたからとて、物質上の利得があるといふのでも無い。俗にいふ三文の徳にもならぬ。若し能きるものならば、御免を蒙つて濟ましたいわけであるが、私の渡米が多少なりとも日米兩國の國交親善に貢獻し得る所がありとすれば、老軀を慮つたり、或は又御大典參列の光榮に浴したいのを思つたりして、自分の身の上の都合ばかり考へ、渡米を見合すやうでは、論語に所謂「義を見て爲さざるは勇無き也」の譏りを免れず、孔夫子の御叱りを受けねばならぬわけのものである。私今回の渡米は、これも亦止むに止まれぬ大和魂の致す所とでも申すべきだらうか。

私は常に孔夫子が論語に說かれてある所によつて、去就進退を決することに致して居る者故、私の渡米が、果して豫期せらるゝ如き効果を實際に擧げ得るや否や、素より今に於て逆睹し得べきでは無いが、成敗を論ぜず、一身の利害を顧みず、兎に角取り急ぎ明春の加州議會開會前に渡米して、在米同胞諸君の御利益を計り、國威を失墜せず、圓滿に多年の懸案を解決し得るやう、及ばずながら微力を添へるのが、私として當に盡くすべき國民たるの義務で、御奉

公の一端を果す所以であらうかと存ずるのである。

禮は仁義忠信の仕上げなり

◎禮は他無し社會の秩序

林放問ふ禮之本。子曰。大哉問。禮與ニ其奢一也寧儉。喪與ニ其易一也寧戚。（林放禮の本を問ふ。子曰く、大なる哉問や。禮は其の奢らんよりは寧ろ儉なれ。喪は其の易めんよりは寧ろ戚めよ。）

茲に掲げたる章句は、論語爲政篇の次ぎの篇に當る八佾篇の初頭の處にあるのだが、孔夫子の所謂禮の意義は、既に一度詳しく申述べ置ける如く、儀式とか儀禮とかの小さい範圍に限られたもので無いのである。坐臥進退に關する禮節の如きは、寧ろ禮の末に屬するもので、禮の禮たる要は、社會全般に亘つて秩序を維持するといふ處にある。故に禮の一字に含まるゝ範圍は頗る廣く、大は一國の政治刑律より、小は人の一擧手一投足にまで亘り、外は威儀典禮の末より、內は心の持ち方にまでも及んで居るのである。禮の一字に斯る高遠なる意味の含まれてある事は、論語顏淵篇に於て、克ル己復ル禮爲ル仁。一日克ル己復ル禮。天下歸ル仁。（己れに克ちて禮に復

るを仁と爲す。一日己れに克ちて禮に復れば、天下仁に歸す。）と孔夫子が說かれたるに徵しても明かで、禮を修めて仁ならんとすれば、まづ己れに克つて私慾私心を棄てゝしまはねばならぬことになる。これ精神修養の道では無いか。又己に克つて禮を修むれば、天下は仁に歸して秩序が整然となる。これ政道の極意では無いか。禮記に周の刑政の事を載せてあるのも、實に之が爲めである。

◎孔子の答辯は王手を狙ふ

禮の本を孔夫子に質問に及んだ林放は魯の人である。當時の禮を說くものが、末節にのみ拘泥して、如何にも繁文縟禮をのみ之れ事として居るのを見、禮の大本は決して斯るものではあるまいとの疑ひを起し、又周の禮に於て貴ぶ所も、斯る繁文縟禮の末節であらう筈が無いと考へたので、禮記を編まれるまでに禮の事に精通し居らるゝ孔夫子と知つて、林放は斯く禮の根本の何れの邊にあるかを質問に及んだものと思はれる。

孔夫子は此の質問に接せらるゝや、魯の人であつて禮の事には疎い筈の林放が、斯る問を發したのを多とし、其質問の頗る要領を得て居るのに甚く感心せられ、先づ「大なる哉問や」と林

放を褒めて置いて、それから其質問に答へられたのであるが、孔夫子の御答辯は、何時でも細かい事を並べてクド〳〵と說かれる如き繁に陷らず、言簡にして要領を得、巧に意を盡くしてしまはれる所に妙味がある。

林放が禮の本を尋ねたるに對し答へられたるものが矢張それで、禮の本とは斯く〳〵のものであるとか、斯うあらねばならぬ筈のものだとかと、クド〳〵しく說き立てたら、問題が根本的のもので大きくある丈けに、一朝一夕で盡きず、際限が無くなつてしまふ。是に於てか孔夫子は言を禮の本の方に及ぼすのを避けられて、特に之に言及せず、禮の末に走つた弊を捉へて指摘せられ、これによつて自然と禮の本の何であるかを、問ふ者に理解せしめられるやうにしたのである。これが所謂氣の利いた答辯と申すものである。孔夫子は聖人であらせられたが、その言論には常に氣の利いた所があつたもので、有子が學而篇に於て、「孝弟者。其爲レ仁本與。」（孝弟は其れ仁を爲すの本か。）など丶道破した所は、孔夫子の此の氣の利いた辯論振りを學ばれた結果である。

◎禮の要は精神にあり

さて禮を重んじ其末に走るの弊は、林放の考へたる如く繁文縟禮に流るゝ事であるが、繁文縟禮だけならばまだしも、儀禮を繕つて人の手前を飾らんが爲に、奢侈に陷る者を往々にして生ずる恐れがある。一たび斯る弊に陷れば、如何に威儀を整へ禮儀に缺く所が無くつても、その威儀、その禮儀は悉く拔け殼になつてしまひ、形があつても魂の無いものになる。禮の要は形骸でない。その禮を執り行ふ者が人に對する時の精神にある。故に外形の禮儀を完うせんが爲に奢侈の弊に陷るよりは、寧ろ外形の禮儀を缺く恐れがあつても關はぬから、儉約を旨とし、人を尊敬する精神と、物事を愼重に考慮し、之を輕忽に取扱はぬ精神とを、絕えず忘れぬやうにするのが大切である。この精神さへあれば、假令外形に於て缺くる所があつても、其人は禮に於て完きものである。喪即ち凶禮も勿論禮の中であるが、喪も外形に於て徒に完全無缺を期するよりは、精神に於て悲哀痛惜の情を盛ならしむるやうにするのが禮儀上の道である。

かく孔夫子が論語に於て遺訓へられてあるので、私は野人禮に慣らはぬ所もあるが、他人に對して成るべく粗末なる言葉など使はず、衷心より如何なる人にも敬意を表することに致して

居る。又祖先を祀ることなどに就ても、敢て外形を整へるといふやうな事に力を致さず、世間普通の事だけを致し、精神に重きを置く事に致して居る。

禮は兎角亂世になると亂れ易いもので、行はれぬ勝ちになる。禮の重んぜられて修めらるゝのは、世の中が、泰平になつてからの事である。隨つて維新當時の豪傑たちの中には、禮を重んじた人が餘り見當らなかつたやうに思はれる。何れも皆磊落な質で、勝手に擧動つたものである。その結果、家道の齊まらなかつた方々が多かつたやうである。木戸公でも井上侯でも皆それである。その中でまづ比較的禮を修めて堅かつたといふのは、大隈伯ぐらゐのものであらうかと思はれる。それでも一部には色々の非難もあるか知らぬが、大隈伯ならば、まづ家道も齊まつた方と申上げて然るべきだらう。

◎太閤秀吉の長所と短所

亂世の豪傑が禮に慣はず、兎角家道の齊まらぬ例は、單に明治維新の際に於ける今日の所謂元老ばかりでは無い。何れの時代に於ても、亂世には皆爾うしたものである。私なぞも家道が齊まつてると、口はばつたく申上げて誇り得ぬ一人であるが、かの稀世の英雄豐太閤などが、

矢張禮に慣はず家道の齊まらなかつた隨一人である。亂世に生立つたものには、素より賞むべきでは無いが、什麼も斯んな事も致し方の無い次第で、餘り酷には責むべきでも無からうかと思ふ。然し豐太閤に若し最も大きな短所があつたとすれば、それは家道の齊まらなかつた事と、機略があつても經略が無かつた事である。

◎秀吉の一生は勉強のみ

豐太閤の長所はと云へば、申すまでもなく、その勉強、その勇氣、その機智、その氣慨である。かく列擧した秀吉の長所の中でも、長所中の長所とも目すべきものは、その勉強である。私は秀吉の此の勉強に衷心より敬服し、青年子弟諸君にも、是非秀吉の此の勉強を學んで貰ひたく思ふものである。事の成るは成るの日に成るに非ずして、その由來する所や必ず遠く、秀吉が稀世の英雄に仕上がつたのは、一に其勉強にある。

秀吉が木下藤吉と稱して信長に仕へ、草履取をして居られた頃、冬になれば、藤吉の持つた草履は常に之を懷中に入れて暖め置いたので、何時でも温かかつたといふが、こんな細かな事にまで亘る注意は、餘程の勉強でないと、到底行屆かぬものである。又信長が朝早く外出で

もしやうとする時に、まだ供揃ひの衆が揃ふ時刻で無くつても、藤吉ばかりは何時でも信長の聲に應じて御供をするのが例であつたと傳へられて居るが、これなぞも秀吉の非凡なる勉强家たりしを談るものである。

◎中國より二週間にて山崎

天正十年織田信長が明智光秀に弑せられた時に、秀吉は備中にあつて毛利輝元を攻めて居つたのであるが、變を聞くや、直ちに毛利氏と和し、弓銃各五百、旗三十と、一隊の騎士とを輝元の手許より借り受け、兵を率ゐて中國より引つ返し、京都を去る僅に數里の山崎で光秀の軍と戰ひ、遂に之を破つて光秀を誅し、其首を本能寺に梟すまでに、秀吉の費した日數は、信長が本能寺に弑せられてより僅に十三日、唯今の言葉で申せば、二週間以内のことである。鐵道も無く、車も無い交通の不便この上無き其頃の世の中に、京都に事變のあつたのが、一旦中國に傳へられた上で和議を纏め、兵器から兵卒まで借入れて京都へ引つ返へすまでに、僅に二週間を出でなかつたといふのは、全く秀吉が尋常ならぬ勉强家であつた證據である。勉强が無ければ如何に機智があつても、如何に主君の仇を報ずる熱心があつても、斯くまで萬事を手早く

運んで行けるものではない。備中から攝津の尼ケ崎まで、晝夜兼行で進んで來たのであると謂ふが、定めし爾うであつたらうと思ふ。

翌天正十一年が直ぐ賤ケ嶽の戰爭になつて、柴田勝家を滅ぼし、遂に天下を一統して、天正の十三年に秀吉も目出度關白の位を拜するやうになつたのであるが、秀吉が斯く天下を一統するまでに要した時間は、本能寺の變あつて以來僅に滿三年である。秀吉には素より天分の秀れた他に異る所もあつたに相違無いが、秀吉の勉强が全く之を然らしめたものである。又秀吉が信長に仕へてから間もなく、清洲の城を僅に二日間に修築して信長を驚かしたといふ事も傳へられて居るが、之れとても一概に稗史小說の無稽譚とのみ觀るべきでない。秀吉ほどの勉强を以てすれば、これぐらゐの事は必ず能きた事と思ふ。

◎秀吉は機略に長じ經略に疎し

御前槍仕合の譚は隨分有名なもので、繪本太閤記などにも揭せられ、面白ろ可笑しく書かれてあるが、これなぞも稗史小說家が、單に太閤の一生を飾るために編み出した虛構の作意であるとばかりは謂へぬ。全く實際の事實としてあつたことで、依て以て秀吉の如何に機略に富ん

だ人物であつたかを窺ひ得られるものと思ふ。長槍短槍の得失論が起つた時に、短槍の利を說いた上島主水が敵方の探偵であるのを看破し、あべこべに長槍の利を說き、信長御前の仕合に於て、主水をして顏色なきまでの敗を取らしめたなぞは、素より秀吉の機略によるが、又其の勉强にも依ることである。平素より能く勉强して細事に注意して居らなかつたならば、主水が敵方の廻し者であつたのを知り得られさうな筈が無い。

秀吉が中國の陣中に在つて本能寺の變を聞くや、立に一切の事情を隱す所なく、披瀝して、毛利輝元と和議を講じた所なぞは、是又如何に秀吉の機略に富むかを示すに足るものであるが、秀吉には斯く機に臨み變に應じて事を處する機略があつても、部下の如何なる人物を如何なる部署に配置し、如何なる順序方法によつて全體の事業を進行さして行くべきかといふ事に就ての、經略の才が無かつたやうに思はれる。その結果は、何でも才智に富んだ人物でさへあれば、その根本の精神如何を問ふの遑なく、悉く之を信用して重用し之に重要なる位置を與へたるかの如くに觀られる。

石田三成や小西行長などが秀吉の信用を得て重く用ひられたのは、全く秀でたる才智があつ

た爲めだが、秀吉は三成や行長の如き才智のある人物のみを重要した結果は、加藤淸正の如き忠誠無二の臣を疎んずるに至り、秀吉は三成等の才に魅せられて、淸正を卻ける氣味があつたと云はれても、辯解の辭が無からうと思ふ。「たゞ片桐且元のみが、忠誠無二の士でありながら、猶ほ且つ秀吉の信用を得て居つたのは寧ろ異數とするに足るが、且元の秀吉に信用せられたのは、その無二の忠誠に因るよりも、寧ろその機略に富んだ所にあつたらうかと思ふ。」且元は淸正の如く單に忠誠無二といふだけの人物では無い。元祿事變の大石良雄の如く、却々複雜した性格を有つた機略に富んだ人物である。

◎晚年の振はざりし秀吉

秀吉の晚年は甚だ振はなかつたのには、いろ〳〵の原因もあらうが、斯く才智のある人物をのみ偏重して、部下の人物配置の法その當を得ず、機略にのみ秀でゝ、經略即ち經綸の才に乏しかつたことが確に其一つだらう。然しその最大原因は、禮の大本を辨へず、漫りに淀君の愛に溺れて、其間に生れた秀賴を寵し、一旦猶子にまでして關白の位を繼がしめた秀次を疎んじ卻け、遂に之に反意を懷かしむるに至り、反意ありと知るや、之を高野山に放つて切腹を命

じ、その首を三條河原に梟して遺骸を葬りし墳墓に畜生塚の名を附し、一族の子女妻妾侍臣に至るまで悉く之を誅するなど、家道の甚だ齊まらなかつた所にあらうかと思ふ。

太田錦城などの意見も、此の點に於て私の思ふ所と同じで、秀吉が信長の遺子北畠信雄及び神戸信孝に對する處置は、戰國の事情止むを得ざるものとして責むべきではないが、秀次に對する處置は甚だ其當を得ざるもので、恕すべからずと論じて居る。畢竟皆禮の大本を忘れたるの致す所也と云はねばならぬ。

◎倫常を無視せる女色

昔時男女間道德の進歩して居らぬ時代に於ては、賣女に戯るゝとか、或は又美しい女を容れて妾にするとかいふ事は、素より賞むべきで無いが、必ずしも酷に責むるわけにも行かぬ。殊に亂世の英雄に斯ることの存するのは止むを得ぬ次第である。然し女に戯れ色に近づく間にも、如何に亂世なればとて、如何に英雄なればとて、倫常を無視して差支ないといふ法は決してあり得べからざることである。然るに秀吉は禮の大本を心得居られぬ方であつたものか、女に戯れ色に近づいてる間に、人間として如何なる場合に於ても離れてはならぬ倫常を離れ、淀

君の愛に溺れては、秀次に對し常識を逸せる處置に出で、其他我意に任せ、女に關する事に就ては、隨分我儘氣儘勝手放題の仕たい三昧をした形跡がある。

◎蒲生氏郷の妻と秀吉の母

蒲生氏郷は素と織田信長に仕へて其寵を受け、永祿十二年八月信長大河内の城を攻めるに當り、年僅に十四にして先登の功を立て、信長の娘を娶されて之を妻としたほどの英才であるが、信長の歿後氏郷が秀吉に仕ふるやうになるや、秀吉は氏郷の妻の美しさに迷ひ、氏郷に進つて其妻を獻ぜしめ、之を容れて妾にしたといふが、これは秀吉が單に氏郷の妻の美貌に迷つた爲めばかりとも謂へず、多少其間に戰國の特色たる政略上の意味も混じ、氏郷の妻が信長の娘である處より、之を妾にして置けば、信雄、信孝等を制するに便なりと考へたのにも因らうかなれど、假令信雄、信孝と同胞たるにせよ、既に一旦氏郷の妻になつてる女を、無理から其夫に迫つて之を自分の側室にするなどいふ事は、倫常を無視するの甚だしきものと言はねばならぬ。

天正十二年秀吉小牧山の陣を收め、長湫の戰を終へ、漸く大勢の己れに利あるを見るや、天下一統の志を起てたが、目の上の瘤たる家康の事が氣に懸つて堪らぬので、早く家康と和

協の實を擧げたいものと思ひ、三河にある家康に切りに上洛を促したが、家康もさるもの、容易に之に應ずる色が無い。是に於てか秀吉も遂に力盡きて施すの策なく、自分の生みの母を人質にして家康の許に送り、漸く家康をして上洛せしめ、之と和睦するを得たといふ事は、正史の傳ふる所である。

◎晩年の振はざる所以

秀吉如何に天下を一統するに鋭意し、家康と和睦を講ずるに急であつたからとて、天にも地にも懸け替の無い我が生みの母を、家康の許に人質として遣はすを意に介せず、之によつて僅に家康との和を調へたなどといふのは、實以て沙汰の限りで、人倫を無視するの甚だしきものである。

又既に佐治若狭守の妻になつて居つた自分の妹を取り返し、家康と和睦したさの一念から、之を家康の妻として嫁せしめたなども、隨分亂暴な處置で、倫常を無視したものであると謂へる。人質や政略結婚は如何に戰國の習ひであるとは申しながら、斯く禮の大本を忘れて人倫を蹂躙し、亂暴無盡に擧動つては、如何なる英雄と雖も決して其の終りを美くしさうな器がない。是れが秀吉に氣慨あり、勇氣あり、機智あり、而も非凡の勉强家なりしに拘らず、其晩年に至るや甚だ振はず、豐臣の末路なるものが悲慘を極むるに至つた所以である。

秀吉の晩年に就て稽へ、豐臣家の末路に鑑みても、人は勢ひに乘じ好い氣になつて、傍若無人、倫常を無視する如き擧動に出でゝはならぬものである事が肯かれるだらうと思ふ。青年子弟諸君は、能く此の消息を胸底におさめ置かれ、如何なる場合に於ても、禮の大本を忘れぬやうに心懸けて然るべきものである。然らずんば一敗再び起つ能はざる如き悲運なる境遇に陷らねばならぬ事にもなるのである。

◎何事にも根柢が第一

子夏問曰。巧笑倩兮。美目盼兮。素以爲レ絢兮。何謂也。子曰。繪事後レ素。曰。禮後乎。子曰。起レ予者。商也始可二與言詩一已矣。（子夏問ふて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を爲すとは、何の謂ぞや。子曰く、繪の事は素を後にす。曰く、禮は後か、子曰く、予を起すもの、商や始めて與に詩を言ふべきのみ。）

この章句も禮に關したものであるが、巧笑倩たり以下、絢たりまでの句は、逸詩と申して詩

經に漏れて載らなかつた詩であるが、其意は、一たび笑へば其口元倩として忽ち萬人を惱殺し、目元美しく涼しい所は、實に盼たるの美人でも、その微笑める口元とか、或は又目元の美しい表情とかは、抑々末の事で、美貌の根抵になるものは、生れついて持つたる明眸皓齒の天質である。これに粉黛衣服の絢を加へて、玆に始めて美人の美人たる所が發揮せらるゝものだといふにある。然るに孔夫子の御弟子の子夏卽ち商は、「素以て絢を爲す」の字句を「素が直に絢となる」との意に解し、甚だ合點の行かぬのに疑ひを起し、近頃の言葉でいふ認識論の質問を孔夫子に持ちかけたものである。然るに例の氣の利いた答辯振によつて之に對し、恰も顧みて他を曰ふが如くにして、「繪の事は素を後にす」と答へられ、繪に於ての大事は、先づ粉地を作り、純白の素地を調へるにある。五彩を施して之を繪にするのは、それから後のことだと申されたのである。

◎禮は仁義忠信の仕上げ

私は美術の方面は至つて不案内であるから、繪の事なぞに就いて何事も申上げるわけに參らぬが、孔夫子は美人に關する詩より延いて繪の事に及ばれ、更に進んで道德上のことを之によ

つて暗示せられたものである。子夏は孔夫子に斯る意があるを直ちに汲み取つて、「然らば道德上に於ても、禮より先になるものは仁義忠信で、これにより人間の素地を作つた上に、禮の絢を施すべきものであるか」と再度の質問を發せられたものと思はれる。

子夏卽ち商の發した再度の質問は、大層孔夫子の御氣に適つたものと見え、「商よ爾は予を失望せしめぬ好弟子である、爾の如くに考へてこそ始めて眞に詩を解するものと謂へる」と、子夏を御賞めになつたのであるが、如何にも其の通り、禮は仁義忠信で出來あがつた德性の上にかけられる仕上げである。又美人の事を謠つた詩でも、人の解し方によつては之を道德的にも解し、我が修養の一助に供し得るものである。

形式の整備よりも精神が根本なり

◎覺永寺を菩提所とす

祭如レ在。（祭るには在すが如くにす。）

これも孔夫子が、形式よりも大切なものは精神であるといふ意味を敎へられた語で、祖先を

祀るにしても、眼前に其人あるが如き精神を以てせざれば、如何に祭式を調へても、それは藻抜の殼同然のものだといふ教である。

私は及ばずながら此の精神を以て我が祖先に對し、我が亡き父母に對することに心懸けて居る。從つて墓地を立派に飾るとかいふことを致さず、たゞ世間並にして置くばかりである。元來私の家は代々古義眞言を宗旨とする寺の檀家であつたのだが、私が東京に居住するやうになつて以來、私が德川家と關係のある都合上より、只今では私も上野寛永寺を私の家の菩提所に定め、同寺の境内には既に先妻の墳墓もある。私も死ねば矢張り其處に參ることになつて墓地が取つてある。さればこそ別にその墓地を立派にして置くといふわけでも無い。たゞ私が澁澤家代々の爲に微かな招魂碑を建て、位牌堂を寛永寺の境内に設けた丈けである。要するに祖先より亡父母に至るまでの靈を在すが如くにして祀らんとする微意に外ならぬ。

◎父は見識のあつた人

私の母は、他の女と變つた所のあつた豪い女だと、今になつても素より想ひはせぬが、非常に人情の深い慈愛に富んだ女であつたこと丈けは確實で、今日になつても、之を想ふと涙の垂

れるほど有難く感ぜられる。母は家付の娘で、父は同村の澁澤宗助といふ家から私の家へ婚養子に參つたのであるが、父は今となつて想へば思ふほど豪い非凡の人であつたと、益々敬服するばかりである。父の事に就ては、これまでにも既に申述べ置いたので、大略讀者諸君も承知せられて居ることと思ふが、極めて方正嚴直、一歩も他人に假すことの嫌ひな持前の人で、如何に些細なことでも、四角四面に萬事を處置する風があつたのみならず、非常な勤勉家で、相應な家產をも作り出したほどの人ゆゑ、働く方の慾は極めて深かつたが、物惜みなどは毫も致さず、至つて物慾には淡白の方で、義の爲めだとなれば、折角丹精して作りあげた身代でも何でも、之を擲つて些かも悔ゆる所無しといつたやうな氣概に富んだ人である。又他人に對しても頗る嚴格でありはしたが、深刻だといふ質でなく、小言を云ひながら能く他人の世話をしたものである。若し不肖の私に多少なりとも斯る美質がありとすれば、それは皆父の感化による賜であると謂はねばならぬ。

父は平常多く書籍を讀んで居つたといふほどの人でなかつたが、四書や五經ぐらゐは十分讀め、傍ら俳諧などもやるまでの風流氣のあつたもので、何時でも自分相當の見識を備へ、漫り

に時勢を追ひ、流行にかぶれるといふやうな事は無かつたものである。隨つて私にも十四五歳までは讀書、擊劍習字等の稽古をさせたが、當時の時勢にかぶれて、武士風にばかりなつても困るからとて、家業の藍を作つたり、之を買入れたり、又養蠶の事などにも身を入れるやうにせねばならぬと、常々私を戒められたものである。

それで私も父の命に背かず、十七歳から二十二歳までの間に、毎年二度藍の商業の爲め信州へ出かけたほどであるが、世間が段々騷々しくなつて來たので、既に是まで申述べ置いた中にもある通り、私は隱忍として家業に勉強ばかりして居られなくなり、國事に奔走して見たいとの氣を起したものだから、それとなく父に話もしたが、父は飽くまで其位にあらずんば其事を揆らずの意見で、ただ國事の評論をするだけならば、如何に農を業とする者でも之を敢てして拘はぬが、實際の政治向の事は、その位にある人に任して置くが可いと申され、私が國事に奔走せんとするのには不同意であつたものである。然し私は飽くまで國事に奔走し、幕府を倒してしまはぬばならぬとの決心を棄てるわけにゆかず、什麼しても鄕里より江戸に出やうと心を定めたのである。

◎國事に奔走するを許す

然し私は全く父に何も打明けず、突然鄕里を逃げて出發しては宜しく無いと思つたものだから、それとなく訣別のつもりで、文久三年九月十三日の夜、月見の宴にかこつけ、尾高藍香と澁澤喜作と私との三人が、父と一座して月を見ながら天下の形勢を談り、愈よ私が國事に奔走せんとする決心のほどを打ち明けることにしたが、父は依然として矢張不同意で、其の位にあらざる者が、如何に田舍から駈け出して單身奔走して見た處で、何の効果も擧るもので無いと諄々として說かれ、私の決心を翻へさせやうとせられたのである。

之に對し私は楠正成湊川戰死の例を引き、楠公とても必ず彼の戰で勝てるものとは思はなかつたらうが、死ぬまでも戰はれた處に楠公としての豪い處があるやうに、自分とても微力を以てして奔走したのでは、或は到底その目的を達し得られずに終るやも測り難いが、楠公の如く戰死しても厭はぬゆゑ、やれる處までやつて見る氣であると、私が語を痛切にして決心の次第を父に物語ると、父も到底私の決心の翻へし難きを見、それほどまでの決心ならば、思ふまゝに行るが可い、私は干涉せぬからと、私の國事に奔走するのを許されたことは、既に是まで

申述べ置いた所にもある通りである。私は是處が父の豪い所だと思ふて感服せざるを得ぬのである。

◎父は終生郷里にて暮す

佛蘭西から歸朝して、明治元年十一月三日横濱に入港するや否や、其趣を直に父に報知してやると、佛蘭西にある中、豫ねて私より、或は金子の必要に迫まられ、送金して貰はねばならぬやうになるかも知れぬと、父に通知して置いてあつたので、若干かの金子を懷にして、早速東京まで出て來られたのであるが、既う金子の必要も無く、當座用は十分手許にあるから、御心配には及ばぬと申述べ、色々と洋行中の話などをして別れたのである。私は夫れより一旦靜岡に參り、明治二年明治政府に出仕するやうになつて、東京に家を持ち、妻子とも同棲することに相成つたので、父にも是非東京に參られて、同じ家の內に住むやうにと話しても見たが、父は貴公と私とは全然結着點が違ふ、貴公は官にも出仕して居れば、いろ〳〵と交際も廣かるべく、私のやうな田舍者が貴公の家に同居して居つては、水の中に油を入れたやうなもので、貴公の迷惑にもなる、私は郷里に居る方が却つて氣樂で可いからとて、什麼しても東京居

住を承諾せられなかつたものである。就ては私も父の意に任せ、郷里に住つて戴くやうにしたが、三ケ月に一度くらゐは出京されて、その頃湯島にあつた住宅に私を訪れられ、三四晩も泊つては、又郷里に歸られたものである。

◎郷里にある父の死

私が大阪造幣寮の整理をする爲めに、明治四年の秋、同地に出張を命ぜられ、その任務を終へて東京に歸つたのは、十一月の十五日であつたが、歸京すると、其月の十三日から郷里の父が大病であるとの飛脚に接したので、卽刻にも出立して郷里に向ひたかつたのであるが、大阪滯在中の復命もせねばならず、又身苟にも官吏の班に列して居る以上、賜暇の手續きも經ねばならなかつたので、其一夜は千秋の思で過ごし、翌朝井上大藏大輔に面會して、大阪の事情を逐一報告に及んだ上直に病父看護のため歸省の許可を得、折惡く降り切る大雨を冒し、中仙道を武州血洗島村にある郷里の家に着したのが、十六日の夜も大分晩くなつて午後十二時頃であつた。父は十三日に發病してから、一時は人事不省に陷つたさうであるが、幸ひ私の歸つた時には、俗にいふ中癪とでも申すものであつたか、病狀も稍々快方に向つたらしく、氣力も回復

して、私が看護の爲め歸省したのを甚く悅ばれたものゝ、六十以上になつてからの大患とて、とう〳〵全快せられず、十八日の晝頃から又人事不省に陷られ、二十二日といふに、六十三歲を一期として遂に亡くなられてしまつたのである。葬儀を鄉里の菩提寺に營んで、祖先の墓地に葬ることに致し、葬儀萬端を濟して歸京したのが、十二月の初旬であつたやうに記憶して居る。

◎鄉里にある澁澤家

父の亡くなられた跡の鄉里にある家は、私の妹に須永才三郎といふ親戚の者を婿に貰つて繼がせるやうに致し、今日も猶ほ其儘續いて居るが、妹の子の澁澤元治といふのは、既う相當の年配で、目下遞信省に奉職し、電氣局の遞信技師として電氣の方面を擔當し、工學博士にまでなつて居る。格別豪い人物だといふほどでも無からうが、將來のある人物として囑望せられて居る。父母の墳墓は鄉里にあるが、私は度々鄉里まで展墓に行く暇も無いので、祭祀の便利を得るやうに、父の亡くなられた翌年谷中の墓地に建てたのが、前回に申述べて置いた招魂碑である。父の招魂碑に刻んである撰文は、尾崎停忠の書いて與れられたもので、左の通りである。

翁諱美雅。澁澤氏。通稱市郎。號二晚香一。武藏國血洗島村人。世農。考諱敬林君。妣高田氏。實同族諱政德君第三子。嗣二敬林君之後一。配二其長女一。自レ幼嗜レ學。慨然有二特立之志一。而思慮周密。一事不レ苟。凡自二耕稼生產之道一。至二尋常瑣事一。必反復審思。本二於實際一。是以施設不レ差二成算一。家製レ藍。爲レ品素精。至レ翁研究益到。名傳二遠近一。其業大盛。家產致レ優。至レ有二鄉人傚以立レ產者一。村原係二半原藩封內一。藩侯有二土木若不時之費一。每令二翁供一レ財。翁毫無二難色一。曰。財之用在レ應二緩急一耳。況藩命乎。又厚二於親姻故舊一。人或失レ產破レ家。則諄々誘誨。爲捐レ財賑恤。使二其復一レ產。故人皆稱レ之不レ已。明治四年冬十一月二十二日病歿。年六十三。越五日。葬二其鄉先兆之次一。贈レ號曰二藍田靑於一。五男八女。長男榮一君。見爲二大藏省三等出仕一。叙二正五位一。長女適二吉岡十郎一。少女配二外甥須永才三郎一。委二其家產一。餘夭。男榮一君以レ在二東京一。建二招魂碑於谷中天王寺一。以爲二行香之便一。嗚呼。翁行修二於家一。信及二鄉里一。而老二死畎畝之間一。終無レ著二于世一。洵爲レ可レ惜矣。然榮一君擢二草莽一。居二顯職一。望屬而名馳。蓋有二所以一矣哉。惇忠於レ翁。有二叔氏之親一。而蒙二師父之恩一。謹叙二其行狀一。表レ之。